

# 東方巡迷伝

ゆっくりゼロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——少年達は普通ではなかつた。——

3人の異質な少年達は神に助けられ転生した。

転生した先は特別な力を持つ者達が住む里。

はたして3人の少年達は二度目の生でなにを見るのか。

?この作品はハーメルン、小説家になろう二つのサイトで投稿しています。

ハーメルンでは私が、なろうではもうひとりの作者であるΩの感想が見る事が出来ま

す。

目

次

終わりと始まり	転生と発見	疑いとこれから	生活と信頼	戦いと行方	目覚めと記憶	大戦と結果	非常識と分かれ	原因と情報	出会いと協力	再会と再開	時と嘘
---------	-------	---------	-------	-------	--------	-------	---------	-------	--------	-------	-----

109 97 87 79 71 61 48 39 29 18 8 1

誤魔化しと納得	開始と決着	朝と夜	魔の霧と現代の巫女	大図書の主と完璧で瀟洒な従者	喧嘩と仲直り	結末と宴会	計画と自然	天狗の山と侵入者	天狗と新聞	時の流れと四季	妖桜と亡蝶	冬と春
---------	-------	-----	-----------	----------------	--------	-------	-------	----------	-------	---------	-------	-----

270 256 242 229 216 203 191 175 162 150 139 128 119

異変と宴会

酒と鬼

日向と日陰

種族とモノ

夜明けと決着

過去とお見舞い

幽霊と花

再開と暴挙

風と神

昔と今

天氣と氣質

赤と白

機械と魂

430 419 407 395 384 372 360 347 332 321 310 297 287

掃除と後始末

440

# 終わりと始まり

彼らは生まれた。

――――忌み子として――――

とある小さな村に、彼ら3人は生まれた。

彼らは何の不自由もなく、日々を過ごしていた。

たくさんの友人や知り合いもでき、充実した日々がいつまでもきつと続くと彼らは思っていた。

しかし、彼らが物心つき始めたころ、その希望は打ち碎かれた。

一言で表すならば、彼らは異質だつた。

子供とは思えないほどの靈力、常識を変えてしまうような能力を生まれながらに持つていた。

それらの異質は、周りの人間を怯えさせ、時には傷つけた。

その力を恐れた人間は彼らを地下牢に幽閉した。

彼らは嘆き悲しんだ。

何故僕達がこんな目にあわなくてはならないのか。自分たちの運命を憎んだ。彼らはその後牢から脱走した。

これ以上いればこの村の人々を傷つけてしまうと。

不思議と村人を憎むことはなかつた。

それは仕方の無いことだと理解していた。

彼らは数々の村を巡つた。

時には追放され、時には殺されかけた。

だが彼らはそれでも諦めなかつた。

もしかしたらその希望を叶えてくれる人々がいるかも知れないと。淡い希望を抱いていた

そうした暮らしがしばらく続き、とうとう彼らは自分たちを受け入れてくれる人々のいる村を見つけた。

人間達は3人に、その能力で世界を平和にできる豊かな生活を手に入れられると言い寄つた。3人はそれに歓喜した。

そしてその村で3人は暮らす事にした。

彼らはその能力を使い生活を裕福にした。

時には妖怪から村を守つた事もあつた。

3人は今度こそ見つけた。

とお互いの記憶に涙し、励まし、喜びあつた

「へだがそんな希望さえも遮られた。」

彼らは強すぎた。異質な能力を目の当たりにした村人はその力を独占したいと思うようになつた。

だが彼らの能力は異質だとしても体は子供。

その負担に耐えられるはずもなく、3人はあつけなく力尽きた。

彼らの目は裏切られた憎しみに溢れていた……

卷之三

? 1 「…は…?

周りを見渡せば彼岸花が咲き誇る野原が見える。

空は青空だがうすく桃色がかかつてているようにもみえる。その風景はまさに桃源郷

だ

? 1 「確かボクは人間に殺されて……ツ!!」

—（そうだ。2人は!）

? 1 「あつ、居た……」

案外2人はすぐに見つかった。

2人とも同じ木にもたれかかって目をつぶっていた。

? 1 「おーい、かいー。ごうー? 生きてる?」

—（そういえば傷ついていたのに痛みも何も感じない……。もしかしてここはあの世なのか……?）

そう今の状況を整理しているうちに、2人は目を覚ましたようだ。

峡剛「まさのぶ」「将信：ここはどこなんだ？」

「もしかしたらあの世だつたりしてね……あはは」

将信「ボクも考えていたんだけど……皆さつきの事はちゃんと覚えてるよね!」

上の空で空を見つめている二人に心配して将信は一人に問慌てていた。

剛「ああ、ちゃんと覚えてる。あいつら……」

剛は怒りに震え涙を浮かべている。

峡「まあ、とりあえず歩こう。」

峡「まあ、とりあえず歩こう。」

將信「どうやつて？道もわからぬいけど……」

峠「その川を進めばいずれ何処かに着くだろう。今はそうするしかない」

剛「そうだな。イマイチ整理できてないが……進もう」

將信「わかつた。」

そうして川沿いをしばらく歩いていた。

美しく咲く花々に見とれることもあれば、川の透き通った美しさに見惚れることもあつた。

そして数分後、橋を渡つた先になにやら船に乗つている人をみつけた。

峠「すみません。ここはどこですか？」

そう問われ船に乗つた人は振り返つてこういつた。

婆「ここは三途の川だよ。君たちは死んだのさ」

やはり……。3人は目を一瞬見開いたあと互いを見合させ、こう訪ねた。

「「我々はこの後どうすれば……？」」

婆はにつこりと微笑んで

「船にお乗り。」と言つた。

そうして3人は六文を払い、一人づつ渡り終えた。

三人の見る先にはお屋敷、城とも言えない建物が建つていた。その中には何人か他に

も老人や子供などがいた。不思議と動物は見なかつたが。

そして3人は同時に大きな扉を開き、1人の者を目にした。  
その者は妖しくも神々しい、圧倒的な迫力があり、3人は気圧され額には脂汗が浮か  
んでいた。

? 「主らは、過酷な運命だつた」

? 「しかし主らは善行をつんでいる。転生は十分に可能だろう。」

剛 「では元の世界に転生させていただけませんか!!わ'r」

? 「しかし、ちと主らは復讐心も強い。」

その能力を悪用すれば世界のバランスが崩れてしまう。主らの体も耐えきれないだ  
ろう。

だからもし元の世界に転生するとなれば、能力に制限を掛ける。来るべき時が来れば  
それは開放される用にした。本当に元の世界に転生するのか?」

3人 「「はい」」

? 「… よからう。では転生を開始する。くれぐれも後悔のないように…」

その瞬間彼らの体は光り輝く消え始めた。

? 「3名様ご案内ー♪」

気の抜けた声が響くと同時に、彼らの頭には能力が浮かんだ。

真月峡「正体を見分ける程度の能力」

白野剛「勢いの増減を操る程度の能力」

波城将信「状態変化を操る程度の能力」

そうして彼らは転生した。古代へと…

# 転生と発見

剛 「なあ… これはどういう状況だ?」

峠 「おちてるんじゃない?」

剛 「ハハハ、そうか」

将信 「笑い事じやないよ!! 死ぬ!!」

峠 「剛の能力で何とかならない?」

落下する中、ひとりを除き冷静に話合う3人

剛 「勢いを減らすつてことか。やつてみる」

剛 「フツ… ツ!  
あー、やつぱ無理だわ。完全には無くせない。衝撃に

備えてくれ」

峠 「… はあ。あの駄神覚えてろよ…  
バカ神

将信 「えつボク泳げn」

その海には大きな3つの水柱がたつた

剛  
「無事か？」

何とか陸まで泳ぎきつた剛は尋ねる

「なんとかね。いやあ剛の能力が無かつたら危なかつた……。ところで將信は？」

剛  
「ん、あいつは…」  
「ああ泳げないんだつた」

將信「ばぶべべ!! ぼぶびぶ」

「將信つてもしかして自分の能力の事忘れてるのか……？」周りの水を氷にすればいいのに」

剛「あつ・・・」

剛 「おーいまさのぶうううううう。能力使ええええええ!!!!」

•

「… なんで気づかなかつたんだろ」

トコトコと氷の上を歩いてくる將信に2人は苦笑いを浮かべていた。転んだのは言

わざもがな。

—————数分後—————

剛 「これからどうする？」

峡 「……えーと、あそこに洞穴があるし、そこを住処にすればいいと思うんだけど、どう思う？」

剛 「いいんじゃねえか？ あそこなら月の光も十分に入るし、大きさも3人入るには十分だ」

將信 「いてて……ボクも賛成。というかそれ以外にないだろうね。」

將信もまた苦笑いで膝を擦りながら答える。

峡 「よーし一致だね。これから役割分担したいんだけど……」

將信 「提案いい？ 剛は力があるから流木や木を集めてほしい。」

峡は能力で食料調達。僕は家具を組み立てたり能力を調べたい

峡 「おお、なるほどね。じゃあ各自分かれよう」

剛・將信 「了解」

峡 side

將信に言われた通り淡々と魚を釣つていく。

峡「にしても本当に初めて見る魚ばかりだな……」

ごく小さなもののから自分の身長を簡単に越す大きさの魚がいた事に峡は驚いた。

数10分後魚釣りをある程度終えた峡は近くの森に入つた。

その近くにはたくさんのキノコや木の実があつた。

峡「はは……」

峡は自身の能力をこんなにもありがたいと思ったことはないだろう。

毒の判別まで出来るのだ。しかし彼は自身の能力を恨んでいる。複雑な気持ちで苦笑いするしかなかつた。

そうして食料などを取りつつ森を進んでいると、大きな建物が見えた。

それは天まで届くのではないかという高さの塔で、炎無しで光り輝いている。峡は目を見開いた。

しかし残念な事に既に日没している、峡はこれ以上の探索をやめ、謎の塔を横目に拠点へと戻つて行つた

將信 side

一方將信は剛が持つてきた流木を使い、机を作つていた。

何故か円筒の容器や斧なんかも拾っていた。

將信「ふう……こんなもんか。」

ある程度整備した洞穴を見てニヤニヤとした笑顔を浮かべる將信。

將信「……よし。」

將信は海辺に行き、鉄の円筒に水を入れ、能力を使つてみた。

將信「……なるほど。」

（液体を個体に、そして蒸発も出来る……と。これはかなり利便性があるかもしない……）

そう自己分析していると、2人が順に帰つてきた……。

剛「さあ、料理の時間だ」

見た目に似合わず料理が出来る剛を2人は手伝つている。

峠がとつてきただキノコや魚を焼き、木の器に木の実とともに盛り付ける。

もちろん毒はないし、將信が作った塩をかければ味気もある。

質素かもしれないが、腹を満たすには十分な量が確保されている。

その後腹を満たした3人は今後について話し合つていた。

將信「それで、2人は何か発展があつた？」

剛「俺は特にない。ただ近くに肉食動物がちらほら見えた。用心した方がいいだろうな」

將信「なるほど。入口の周りに火を焚いていた方がいいかもしない。峠は何かあつた？」

峠「…信じられないかもしないが、信じてくれるか？」

剛「当たり前だろう。生まれ変わつても親友なんだ。信じられないわけがない」

將信「だね。信じるよ」

峠「…わかった。俺が見たのは、ものすごく大きな建物だ。

周りには冷たくて硬い壁があつた。鉄に似ていたよ。

それに炎もないのに昼間のように明るかつた。眩しいほどにな。日が沈みそつたからその後引き返したが、何かあるに違いないだろうね。」

將信「幻術の類つてことはないの？」

峠「それはない。試しに能力を使つたが白と出た。つまり現実の建物だ。」

剛「一体ここは俺達の時代からどれほど時間がたつてゐるんだ… そんなに文明が發

達していたとは……。ある程度準備が整えば話を聞きに行くべきだな」

將信「そうだね、気になることは多いけれど、明日も早いしもう寝よう。」

剛「ああ、おやすみ」

峠「おやすみ、俺は外で火をつけてくるよ」

將信「ああ頼む、おやすみ」

そんな生活をして2週間。

食料もある程度たまり、將信の能力で食料を保存するためのクーラーボックスも出来た。

これでもし都に行けなくとも食料は確保されているから、安心して逝けるだろう。

3人は洞窟を出発し、森を進んでいた。

剛「ツ!?止まれ！」

剛は何か気配を察知し、歩くのを止めた。

三人の視線の先には、1匹の大蜘蛛がいた。

峠「…あいつは流石に武器なしじやキツイ。どうする？」

冷や汗を浮かべながら小声で峠は聞いた。

剛 「打つ手なし、か？斧を持ってくれば良かつたか？」

將信 「いや、提案がある。その大きな石を剛が投げるんだ。能力で投げた勢いを増せば一撃で仕留められる」

至つて冷静に將信は策略を提案する。

剛 「だがチャンスは1回だけだろ？それは難しいんじゃないかな？」

將信 「うーん……峠、敵の弱点は頭だよね？」

峠 「……………ああ、そうだな。そう出てる」

將信 「ならいいけるはずだ。的は大きいし、もしもの時はボクが援護するから、思い切り投げてよ」

剛 「……わかった、頼むぞ。」

剛は足を振り上げ思い切り腕を振り下ろした

剛 「ツツツオラアあつ！」

そして加速した石は相手の脳天を

——貫通した———

大蜘蛛 「キシヤアアアアアアアア!!!!」

しかし、大蜘蛛も最後の悪足掻きをする。

尻の先の針から大きく鋭い光線を剛に向かつて発射した。  
それが通った地面は大きくえぐれている。

將信 「ツツ!? 水蒸気を凝結!! 水滴を凍らせる!!」

將信は咄嗟に靈力でコーティングした水と氷の壁を作つた。これは能力を試した際に思いついた技である。

だがそれでも光は収まらない。壁がひび割れていく。

將信 「負けるか・ よツツ!!」

最後の力を振り絞つて光線を將信は相殺した

剛 「・ !!! ウオオオオオ !!!」

そして、大蜘蛛が怯んだ一瞬の隙に大蜘蛛にむかって突っ込んだ剛は拳を振り上げ、自身のパンチの勢いを増加させ渾身の一撃を放つた。近くには大きなクレーターができていた。

結果、大蜘蛛に勝利した。

剛は腕がはずれたようだが。

剛 「…ツ！」

峠 「我慢してね！」

近くに腰をおろし峠は剛を手当てしている。

峠 「剛はほんと無茶するよねー。」

剛 「お前は何もしてないけどな」

峠 「…」

雜談をしている2人を尻目に、將信は大蜘蛛の死体を観察していた。

將信 「…」

（あの光は…、そしてこの妖力。恐らく妖怪化したのだろう。都はこんなものを無化け物

視できる程の技術があるのか…！？）

そして数分後歩いていた彼らは足を止め、呆気に取られていた。

一（なんなんだこの広大な都は…）

# 疑いとこれから

剛 「なあ、お前はあるの都が安全だと思うか……？」

剛は目を細めて峠に問う。

峠 「……さあね。奴らは僕らを裏切った。人間

この都の人達もどうなのかはわからない。でも、まだ復讐するには早いよ？」

剛 「……そうだな。」

3人の間に静かな雰囲気が流れる。

將信 「2人とも、とりあえず話を聞きに行こうよ。まずは剛の手当てもしてもらいた

いし……」

將信は腕を組みながら考えている。

剛 「わかった。いくぞ」

將信・峠「ああ」

門番 「……」

・

剛「すまない、旅の者だが、少しばかり話を聞きたい。」

門番「…！ああ、わかつた。ついてこい！」

門番は目を見開いたあと鋭い眼光でこちらを視察し、開けた場所へと案内した。

峡「？」  
「ここはどこですか？」

峡が質問したその瞬間、峡の足元に光線が放たれた。

峡「ツツ！」

威嚇射撃のようだ。峡に続き一瞬で防御の構えを取り次の攻撃を警戒する三人。

剛「何故我らを打つ？」

剛はドスの効いた声で門番にむかって殺氣を込めて放つ

門番「ツ、盜賊は始末する!!」

一門番は一瞬身震いした後大声を発した

それと同時に三人の四方八方から数名の黒の鎧を着た者が現れ、ナニカをこちらに向けている。3人はは戻に掛かってしまった。

どうやら先ほど妖怪の血を被つたせいで盗賊か何かと勘違いされたようだ。  
即座に3人はアイコンタクトでやむを得ず緊急離脱を開始しようとした。

しかしそれは不可能だと知られた。

剛は利き腕を負傷しておりあまり大きな力は出せない。つまりそれは直接的な攻撃  
ができないという事だ。

(ならば!)

剛「ツオラアツツ！」

マズイと思つた剛は一瞬で足を振り上げ、物凄い勢いで足を地面へと振り下ろした。  
負傷しないよう加減したため近くの地面が揺れる程度だが、敵の姿勢を不安定にする  
には充分だ。

敵兵「!?」

急いで敵兵達はナニ<sup>銃</sup>から光線を放つてくるが、狙いが定まらず当たらない。  
それを見た峠は即座に敵の弱点を分析し、

峠「將信!! 手首だ!!!」

手首周りの装甲が薄い事を見抜いた。

將信「ツラアツ！」

將信はクーラーボックスの氷を溶かし、周りの兵士に投げつけた。  
それによつて兵士が怯んだ一瞬の隙を見て、

將信「ツハアツ!!」

將信は敵兵の手首や足にかかつた水を凍結させ、全兵士の身動きを封じた。  
殺してしまえば取り返しがつかない、彼らは知つていた。  
だがそれでも敵の猛攻は收まらない、何百という援軍がやつてきた。  
そして3人を狙い撃とうとしたその瞬間

「やめなさい!!」

全員の耳に、甲高い女性の声が鳴り響いた。

門番「×様!! いいのですか!!! 彼らは盗賊です！ 今すぐにでも捕らえるべきでは？」  
 門番は×わけがわからないと言つた様子で×に慌てて問う。

「 黙りなさい」

その殺氣は尋常ではなかつた。

門番は手足が震え座り込み、顔が青ざめている。

一方の3人も立つことはできるものの油断をすれば気を失つてしまいそうな、そんな状態だつた。

「 …… 貴方達は私が話を聞くわ。ついてきなさい。」

殺氣を抑えた×は彼らに命令した。

戦つていた兵士は呆気に取られている。

三人は足を無理やり動かし、赤と青の奇抜な服を着ていた彼女について行つた。

… .

「 …… 初めまして。私は×と言うわ。ここで医師をやつているの。本題に入る

けれど、貴方達の名前と、なぜ血濡れだつたのかを言つてちょうどいい」

病院の一室にいる彼らに向けて目を細めて×は問う。

剛 「すまない、もう一度名前を言つてもらえるか？」

×「！あら、ごめんなさい。私の名前は八意永琳よ。本来は違うのだけれど、発音が難しいからそう呼ばれているのよ。」

八意永琳は目を少し見開いたあとすぐに元の表情に戻る。

峡 「… 私達は背の高い方から、剛、峡、將信と言います。遠い所から旅をしてきたのですが、途中から妖怪に襲われちゃつて… あはは、それで返り血が飛び散つてしまつたんです。」

峡はわかりやすい嘘の笑顔を浮かべる。

(私の名前が聞き取れないという事は本当に都で生まれていない… !? 一体彼らはどうやつて生き残つたというの… ?)

永琳 「そう… もう一つ質問いいかしら。あなた達はなぜここ来たの？」

永琳は若干顔を引きつらせて3人に問う。

將信 「… それは僕から説明します。それは…」

――数分後――

永琳「そう……いいわ。嘘をついているわけでもなさそうだし、住民として認め  
てあげる。けれど何か危害を加えた時はその場で死ぬ事になるわ、いいわね？」

永琳は3人に警告する。

3人「はい、大丈夫です」

それに即座に3人は答えた。

永琳「ところで、剛君だつたかしら。貴方腕を負傷しているわね。治療するからつい  
てきなさい。あと2人は都の中央に中でも大きな建物があるから、そこで家や詳しい事  
を聞くといいわ。」

2人 side

治療されている剛を除き、2人は都の中央に向かっていた。  
どうやらさつきの騒ぎはかなり広まっているらしく、興味や軽蔑の視線が2人にふり

かかつていた。

そんな視線を気にしない様子で2人は歩いていった。

数分後大きな建物を見つけた2人は、家を探している事を伝え、案内してもらつた。

峡・将信「…」

2人は沈黙していた。

都の端にちょうど良い物件があつたが、生憎3人は一文無しだつた。

しかし幸運な事にも、その家主さんは親切な人だつた。頭金は後払い構わないそうだ。

2人はその言葉に甘え、職を探すことにした。

峡・将信「…」

しかし二人はまた沈黙していた。

二人は唯一力仕事などには適している。

しかしそれは既にキカイとやらがせつせとやつてくれてているようだ。

文明がかなり進んでいることがわかる。

少なくとも二人の時代にはこんな物は無かつた。

それは普通嬉しい事だが、今の彼らにとつては良くない状況だろう  
力関係の仕事がないとなれば、良い職業がなくなってしまうのだ…。  
2人はその日を諦めて、一度病院へと戻ることにした。

剛 side

剛「ツ！」

永琳「… 終了よ。すぐに良くなるけれど、それまで腕に負担を掛けないようにして  
おいた方がいいわよ。」

何やら永琳は症状を紙に書いている様子だ。

剛「ああ、わかった。」

そう言つて剛は立ち上がろうとした。

永琳「ああ、それと、これは個人的に聞きたいのだけど、貴方達は京都の警備隊をや  
る気はないかしら？」

剛「警備隊… か。」

剛は座り直し、永琳の質問に答えた。

剛「そうだな…（力のコントロールの修行にもなるし、やってみる価値はあるかもし  
れない…）考えておく。明日また来る」

今度こそ立ち上がった剛、はドアを開け永琳に礼を言つた。

剛 「世話になつた。」

永琳 「ええ、お大事に。」

その後道の途中で出会つた3人は、海が橙色に染まる中、洞穴の荷物を家に移していった。

——その夜——

峠 「ふう… 今日も色々あつたねえ。」

永琳にもらつた布団に3人は包まりながら今日を振り返る。

將信 「だね。ふああ… 一文無しつて事を思い出した時は思わずマズイと思つたよ…」

あくびをたてつつ將信は苦笑いをする。

剛 「俺も散々だつた… ところで、仕事の見当はついたのか?」

峠 「いや?、まあ技能もないし、力関係の仕事も少ないからねえ…。」

峠は難しそうな表情をして剛の質問に答える。

剛「… そうか。実はさつき、永琳にこの都の警備隊にならないか提案されたんだ。」

將信「警備隊つてあの集団？用心棒みたいなものつて理解でいいの？」

剛の真剣な表情に將信もまた真剣に答える。

剛「ああ・ 詳しい事は明日聞く。それに、武器も調達出来るかもしねれない。どうだ？ いい提案だと思うのだが」

峠「いいんじやない？こつちにデメリットは無いに等しい。断る理由もないしね。」

將信「僕も賛成だよ。ところで、そろそろ寝ていい…？もう限界…」

目をつぶつたまま將信は答える。

峠「將信今日は結構頑張ったよね…。僕も武器が欲しいな、戦闘で活躍出来ないし…。おやふみ…」

峠もまた安心した表情で眠る。

剛「… ああ、おやすみ」

3人は今日の疲れを癒すため、深い眠りについた…。

# 生活と信頼

（翌日）

太陽が3人の真上にある頃、彼らは永琳と警備隊について話を聞いていた。

永琳「警備隊はその認識で間違いないわ。いい提案でしよう？けれどやるからには必ず続けることになるわ。」

3人は椅子に座りながら永琳の話に耳を傾け、答える。

剛 「ああ勿論だ。ところで警備の時間帯だが……」

（数十分後）

3人は永琳に連れられて警備隊の基地へと入った。

一通り新入メンバーとして警備隊の上司たちに挨拶を済ませた3人は武器庫へと向かう。

永琳「ところで、貴方達は武器を持つていなければ、何か扱いなれた武器はあるのかしら？」

永琳は道を進みつつ質問する。

峠「うーん、僕が住んでいた所はあんまり文明が発達してなかつたから参考になるかわからないけど、剛は近距離、僕は中距離、

将信は弓とかの遠距離攻撃が得意だよ」

永琳「へえ、かなり遠い所から来たのね。未だに弓を使う人は珍しいわよ?」

そういう私も弓を使っているのだけどね。」

クスクスと妖艶な笑みを永琳は浮かべる。

あの殺氣といい、この人は自分達より何倍も強いのだろう。

そんな事を考えつつ、のんびりと話をしていると、武器庫についた。

どうやら厳重なロックがあるらしく、門番はもちろん、警備員が中にもかなりの数見張っていた。

そのロックは顔で識別される仕組みなのか、3人もドアの前に立つと自動的にドアが開いた。

その中には門番達の物と同様のナニカ《銃》や、長い筒状の物、その他装備品が生徒んされて並べられていた。

永琳にそんな装備品の説明品を聞きつつ、警備隊で使う装備をきく

永琳「剛君は近距離が得意……これなんてどうかしら?」

そう言いながら永琳は彼に一つの大剣を手渡した。

それは2mを超えるというような大剣で、一見なんの変哲もない大剣のようだ。

永琳「それはただの大剣ではないわよ？靈力を込めてみなさい」

剛「あ、ああ、わかつた。」

心を見透かされたような返答に若干驚きながらも、言われた通り持ち手を握り靈力を込める。

剛「おお……」

その瞬間刃先から刃元までが赤色に染まつた。

強い熱を発しているらしいにも関わらず鉄は溶けない。これもこの大剣特有の効果なのだろう。

永琳「どうかしら？」

剛「…………ああ、気に入つたよ。ありがとう」

笑顔を浮かべつつ剛は大剣を何度か素振りしたあと、刀を鞘にしまつた。

永琳「峠君は……これかしらね。」

そういうながら永琳は峠にもまた武器を渡す。

それは二本の短剣だった。持ち手は白、刀身は黒で、両刃。試しに剛と同じように靈力を込めると、それもまた熱を発した。

永琳「その短剣は変形できるの……。このボタンを押して靈力を込めてみなさい。」そう言われて峠は持ち手と刀身の間にあるボタンに手を触れながら靈力を始めた

峠「おつとつと……。これは、拳銃？」

永琳「そう、これは双剣だけれど、二丁拳銃にもなれるわ。」

永琳「峠君は弱点を的確に狙える。だから近中どちらのバランスも良くて身軽なこの武器を選んだの。」

峠「こここの技術は凄いね……。ありがとう」

永琳「将信君は……これね。少し重いから、落とさないようにね？」  
永琳はそつと将信に長物の銃を渡す。

永琳「それはスナイパーライフルというの。消費靈力は高いけど、その分高威力で素早い銃弾を発射できるわ。サポートが得意な貴方にはもつてこいな武器よ。それに靈力を強く込めるほど威力、範囲は上がるわ。ガス欠にならないようにな？」

将信「ありがとう！」

将信は喜んで銃を取り、観察している。

永琳「ええ……どういたしまして。詳しい使い方は警備隊の人達が教えてくれるはずよ。私は病院で患者達を見ないといけないから、お先に失礼するわね」  
永琳は後ろを向きトコトコと道を戻つていった……

——そうして彼らは警備員達と共に日々を過ごした。

都の人達は3人を最初は軽蔑していたが、次第にその心も緩んでいき、周囲に3人はとけ込めていた。

特に大きな争いもなく、ひたすら修行に打ち込む日々がそれから2年半ほどたつた。

そして3人も青年といえる風貌になってきた頃、彼らはとある噂を耳にすることになつた——

店主「お仕事お疲れ様。話は変わるけど、最近のあの噂を知つてゐるかい?」

店主はお菓子を作りつつ答える。

峠「噂? へえ、どんな噂なの?」

峠は面白そうに興味を示している。

店主「実は、もうすぐ地球人全員で月に行く計画を立てているらしい。なんでも月でより科学を発展させたいそうだ。」

剛「そんな事が……月か。どうなるのやら」

剛もまたお菓子をつまみつつ、興味を示している。

店主「あくまでも噂だけどね? 月に移り込むなんて信じられないよね……はは」

そんな雑談をした後、3人は家に戻った。

数日後? ドアの前?

将信「ん、なにこれ?」

ドアの近くには手紙が置かれていた。

この都で手紙は珍しい。

特に機械類が発展しているから、手紙の必要性はない。

となればこの手紙は永琳のものに間違いない。

3人は部屋の中に入つたあと、その手紙を開けてみると、このようなことが書かれて

いた。

〈これを読んだらすぐに私の元にきなさい〉

それはあまりにも短文で、何やら急用に見える。

三人は急いで病院へと向かつた。

不思議とその道中に人は見かけなかつた。

永琳「……きたわね。座つて」

3人は永琳に言われた通り椅子へと座る。

剛「急いでいたようだが、どうかしたのか？」

目を細めて剛は永琳に問う

永琳「……地球人が月に行くという噂は知っているかしら？」

峠「うん、3人とも知ってるよ？」

永琳「そう……。実はそれは本当の話なの、これは極秘。貴方達を信頼して頼みたい  
ことがあるの」

若干俯きながら永琳は意思を見せる

将信「ボクらに出来ることならなんでもするよ。わかってるでしょ？」

そういうながら3人も目を合わせ、頷く。

永琳「… そうね、そうだつたわ。

： まず目的から話すわね。

目的は月へ移住するためのロケットを守る事。妖怪達は私達が月に行こうとすれば束になつて襲つてくるわ。

私達は妖怪にとつて食料だから…。

貴方達にはその妖怪達の足止めをしていて欲しい。

その後最後のロケットに乗り地球から離脱することになるわ。質問はあるかしら？」

一通り説明し終えると永琳は3人に質問を促した。

剛「了解した。いつロケットは出発するんだ？」

永琳「： 明日よ」

將信「またそれは結構急だね…」

流石に予想以上に早かつたのか將信は目を見開き答える

永琳「本来はまだ数ヶ月先だったのだけど、どこかで情報が漏れたのか妖怪の大軍がこちらに向かっているとの報告を受けたわ。今世界中の偉人たちが中心部に集まつて会議をしているところよ」

峠「なるほど…。ということは都の人達に伝わつてしまつてているのか？」  
「どこか納得した表情で峠は話している

永琳「ええ、都では軽いパニック状態になつてゐるかも知れないわね……」  
唇を少し噛み締めながら永琳は答えた。

峡「かなり深刻な問題じやないか……。わかつた、今のうちから見張つておこうよ剛、  
将信」

剛・将信「了解」

永琳「……ありがとう、剛、将信、峡。それと、もしもの時にこれを渡してお  
くわ。もし最悪の事態になつたら使いなさい。」

そう言いながら永琳は3人にいくつかの種類の薬を手渡した。

永琳は二年半彼らと同じ都に住み3人を信頼している。だからこそ呼び方も変わつ  
てゐる

剛「感謝する。では」

峡「また明日ね」

将信「永琳も気をつけてね……」

（翌日の曙）

3人「さあ…人妖大戦の始まりだ!!」

## 戦いと行方

大戦が始まつて數十分

早くも妖怪が防衛装置を突破し始めている。

妖怪達は質より数という手段なのか、星のような数え切れない数の妖怪が突つ込んできている。

一方ロケットは、人々が我先にと乗り込もうとしており混雑している。準備段階がやつと半分ほど終わつた辺りのようだ。

剛「つつオラアツツ!!」

剛は靈力や能力を惜しまず行使し、大きく大剣を振るい風圧で吹き飛ばしている。

それは修行のおかげか、以前より靈力を多く消費しても負傷することはなくなつた。

その風圧は弱い妖怪なら吹き飛ばし殺してしまつほどの威力だ。

人間の中でも規格外な力を持つている。

峠「フツ!!」

一方峡は永琳にもらつた双剣で剛の近くにいる敵を薙ぎ払う。拳銃にも変形できるその剣は峡の能力と共に行使することでより効率良く敵と対峙できる。

警備隊も峡と共に光線銃で剛を援護しつつ戦つている。

將信「…」

そして低めのビルから落ち着いて敵を狙撃していく。

靈力の調整で時には戦車の主砲ほどの威力も發揮し、数を少しでも減らそうとしている。

だが妖怪達の勢いはおさまる気配を見せない。

次第に3人が疲れを見始めた頃、突然都の近くの妖怪達が消え始めた。

そして何が起きたのか理解できない三人の耳に、大きな咆哮が響いた

「バオオオオオオオオオオオオ!!!!」

思わず劈く悲鳴に耳を塞ぐ3人。

そこには5mほどの体格の妖怪がいた。

巨大な猪という印象だが、そこには猪はあるまじき1本の大きな角と鋭い鎌のような尻尾が見える。

恐らく何百年も生きたであろうその妖怪の迫力に、遠くにいる將信でさえも冷や汗を浮かべる。

恐らく総大将といった所なのだろう。

將信「… ッ！」

將信はすかさず大きく靈力を高め靈弾を発射した。それは見事に猪に命中した。しかし猪は一瞬怯んだ程度で体力を削れたといえなほどの様子だった。

將信はその出来事に驚いた。

だが怯える暇もなく咆哮が耳を響かせる

猪「バオオオオオオオオオン!!!!」

靈弾に怒ったのか、猪はビルに向かつて巨大なレーザー光線を発射した。

將信「ツ！」

將信は自身の攻撃が負けると瞬時に判断し、下に水をしき、無事に地面上に着陸できた。

將信は即座にビルを確認する。

どうやら先ほどの判断は間違つていなかつたようだ。

ついさつきまで將信がいた場所は光線により大きくなり抜かれている。

その威力に將信は冷や汗を浮かべつつも、急いで剛達の元へと向かつた。

その間も警備隊達は猪を傷つけようと必死に攻撃をする。

その攻撃も虚しく、この都の技術で作られた銃を駆使しても、猪はビクともしない。

時には突進、時には鎌の様な尻尾を使う攻撃に、剛達は避けることで精一杯だつた。そして警備隊達がほぼ全滅した頃

特に有効な決定がないままさらには数分がたち、全てのロケットが発射された。

＼ロケット内部／

永琳「首相様… 何故ですか。何故!!

何故彼らを裏切る必要があつたのですか！」

永琳は怒濤のような形相で首相に怒鳴る。

首相「：」  
仕方が無かつた。あの軍勢には警備隊は絶滅する。彼らは我々を守る必要があつた。」

永琳「それでも…!! 他に何か支援が出来たはず…!!」

永琳は目に涙を溜めながら首相に問う

首相  
〔：〕

首相は何も言えず、黙つた。

永琳

永琳は地球を見て、唇を噛み締めることしかできなかつた……。

だが警備隊達の死を悲しむ暇はない。

大きな発射音に猪は再び意思を取り戻し、剛達を無視。都を覆う壁へと突進した。その破壊力は凄まじく、一撃で都の壁を半壊させた。

押し上げ猪は突進する

万事休す。誰もがそう思つたその時

無数の氷の礫が剛の風にのり発射された。

將信「はあ・・・はあ・・・お待たせ・・・」

その正体は將信だつた。

遠い位置にあるビルから大急ぎで戻つてきたせいか息切れが酷いが・・・ これで戦力は大幅にアップした。

先ほどの無数の礫は剣のように鋭い。

鋼の体を持とうとも、目や角は弱点なのか、猪が苦しみのあまり足掻き苦しんでいる。

剛「隙あり!!」

そこで剛はトドメをさそと大剣を振り上げた次の瞬間・・・

猪の周りを邪悪な妖力が包み込んだ。

どうやら諸刃の剣をくりだすつもりらしい。

目や角からは大量の血が流れているにもかかわらずそれを無視し妖力を集中させている。

その姿は死を覚悟した武士のようだ。

そして猪は3人に向かつて突進した。

それは今までより早く、強い一撃だ。

剛の風、將信の水と氷を利用してなおおさまらない突進は徐々に2人を押して行く。：

2人「グウツツ…！？」

2人はそれでも諦めずに全身全靈の力を込める。：

だがそれを遮る、一つの白い輝きを放つモノが落とされた。  
口ケツトは既に全て発射している：つまり

將信「ヤバイ!!逃げるべきだ!!」

峠「剛!!離脱だ!!」

剛「？」  
あ、ああ！」

その時、またあの時<sup>幻想入り前</sup>のような  
音声が頭に流れた。

第一制限を解除しました。能力を転換、派生します。

峡 「直進反射屈折を操る程度の能力」

剛 「ありとあらゆる勢いを操る程度の能力」

将信 「五感を操る程度の能力」

その瞬間3人の中には確かな力が開放されたのを感じた。

それらを疑問に思いつつ彼らは離脱し急いで都を離れる。

だが核の爆発は猪を、都を飲み込みそして3人をも飲み込もうとしていた。

剛 「フツツツ!!!!」

峡 「ハアツ!!」

先ほどの声を頼りに、剛は自分の周りの核分裂の勢いを、峡は何とか放射線を反射

しようとしている。

——そしてさらに靈力を高めたその瞬間、三人の周りを光が包み込んだ——

# 目覚めと記憶

峡 「……つ」

峡は淡い光で目を覚ました。

峡 「…………ツ!!剛!!將信!!」

目をこすつていた峡はハツとして二人の名前を呼ぶが、返事はない。  
近くにはいないのか？そもそもあの後に何があつた？ここはどこだ？

そんな数々の疑問が浮かぶ中、自分のことを関係なしに、峡は2人を探すことに集中する。

しばらく歩いている浜辺の近くの岩で倒れている2人を発見した。

峡 「おい!!!大丈夫か!!!」

峡は2人を必死に搖する。

將信 「…………つ、あれ、峠？」

将信は峡に起こされてきよどんとするが、次第に状態が整理できたのか難しい顔をする。

剛 「グツ……。生きていたのか。よかつた」

剛も日光が眩しそうに手で顔を少し覆いつつ安堵する。

峠「2人とも、体は大丈夫?」

剛「ああ……。だが頭が混乱している。

状況を整理させてくれ、核爆弾が落ちた後俺達はどうなったんだ?」

3人は座り込み、話し合う。

峠「ごめん、僕もさつき起きたばかりでよくわからないんだよ……。」

将信「うーーん、体に異変が無いことは薬の影響って考えられるけど、核の放射能に耐えられるわけないよね……。体に傷がないってことは、かなりの年月がたつてるってこと……？かな？」

将信は冷静に、ゆっくりと考察する。

剛「……まあそれが一番有力だろう。

だとしたら、なぜ妖怪に襲われない?不老も薬でなんとかなるだろうが、妖怪に襲われるはずだろ?」

峠「不老不死って事はないの?」

剛「……試してみるか」

剛は近くの枝で少し自身の腕を傷つける

剛「不死になれば再生能力は半端ではない。それに永琳がするとは思えない。」  
剛も永琳を信頼しきつているのだろう。堂々と答える。

血が流れているがあまり影響はないだろう。不死で無いことは証明された。

將信「うーん……つまり、いまh」

？「ねえ……」

將信はいきなり後ろから声をかけられたことに咄嗟に防御の体制をとる。

そこには、身長が峠より少し低いほどの、金髪の女性がたつていた。  
ロングヘアで、黒を基調とした綺麗な服を着ている。

剛「…………」「お前はだれd」

剛は村人かと期待を込めて名前を問うが、

？「貴方達を……殺すわね」

それはたつた一言の言葉によつて裏切られた。

將信「ツツ!!」

?は黒い闇に包まれた大剣を將信に振り下ろした。

?「チツ……」

剛「グウツ……。その力……貴様妖怪か!!」

その攻撃を剛は靈力でコーティングした腕で間一髪將信への攻撃を受け止めつつ、声を荒らげる。

峠と將信は知的な妖怪が生まれたことに驚愕しているようだ。

彼女が核分裂のあとに生まれたなら、3人との歳は大差ないだろう。

実力はほぼ互角……3人なら勝てる! そう彼らは思つていた。

?「なら、これはどう?」

その瞬間、三人の周りを純粋な闇が覆つた。

それはどんな光をも一切通さない。

均一に濃く妖力が分散している。並の妖怪なら失神するだろう。

峡「…：君の名前はなんだい？」

峡は静かに？に問う

？「あら？名を尋ねる時はまず自分から、でしよう？」

そういうながら？はクスクス笑つていて。その姿は闇の中に閉ざされ見ることが出来ない…。

峡「…：峡、真月、峡だ。」

？「フフ…、峡ね。覚えておくわ。

私の名前はルーミア、お察しの通り闇を操る人食い妖怪よ。

お話はこれまでにして…：貴方達に、光が見えるかしら？」

刹那、ルーミアは峡達に向かつて自身の身長ほどもある大剣を振るつた。

それは命中した

かと思えばしかしそれは空を斬る。

ルーミアは慌てて闇をはらすと、彼らは一目散に山の方向へと逃げている。靈力の勢いが凄まじく流れているが、それ相応の足の早さだ。

流石のルーミアでもあの速さではおいけない。

ルーミア 「…… 楽しくなってきたわね♪」

ルーミアは大剣を肩に担ぎながら彼らに背を向けて去つていった。

3人「はあ……はあ……」

ルーミアという妖怪が追い付けないほどの速さで山を越えた2人は、気が遠くなつた事に安堵しつつ、木陰で休んでいた。

剛「……ふう、二人とも大丈夫か?」

剛は冷や汗に濡れる中2人を気遣う。

峡「……なんとか。いやあまた將信に助けられちゃつたなあ。能力なかつたら死んでたよ……」

峡はもしものことを想像し身震いする。

將信「……つ、といつても、賭けだつたけどね。聴覚が操れるとはいえ、同時に視覚は制御できなかつた。修行不足だよ。もし気づかれたら死んでた……」

將信もまた、息を整えつつ苦笑いをする。

剛「核分裂の後少なくとも数千、数万ほどは時間がたたないと生き物は生まれないだろう。なぜ能力が開放されたのかも気になるな」

將信「そうだね……今度こそ村を探そう。妖怪がいるんだから人間もいるはず。あわよくばしばらく泊めてもらおう。」

そう言つて3人はまた村を探し始める……

剛「……前世を思い出してしまったな。」

歩いている途中、剛は悲しげで、しかし怒りに満ちた表情でつぶやく。

峠「……そうだね。信頼できるかはわからない。けどここが前世より過去なのか未来なのかを知るためにも必要だし、仕方ないよ」

3人は歩きながらどこか遠くを見ているような表情で話している

將信「ツ、2人とも、静かに」

將信の言葉に2人は屈んで、將信の見る方向を見る。

峠「あれは、門番だよね」

剛「あ、ああ……そうだな……。」

どこか見た光景に3人は警戒を強める

將信「取り敢えず会つてみよう。武器もないし、これじゃあ妖怪の餌になるよ」

村人に近づくと、3人は村人の服装に目を見開く。それはかつて三人の前世の頃の服

装に似ていた。

完全に同じではないが、その面影がある。

剛「すまない、旅のものだが……話を聞きたい」

以前の事もあつてか、似合わない愛想笑いを浮かべつつ門番に交渉する。

門番「……わかつた。待つておいてね」

まだ青年なのか、若い雰囲気を纏つた門番はもうひとりの見張り役と何やら話している。

門番「許可が出たよ。

でも、まだ色々聞きたいことはあるから、まずは村長の家に行くといつてね。  
旅の疲れもあると思うし、村長も何か考えてくれると思うよ？」

門番は村長の家の方向を指差しながら話す。

峠「恩にきるよ。ありがとうね」

峠はあまり感情がないようにも見える笑顔でお礼を言い、その後3人は村長の家に到着した。

村長「… ふむ。なるほど」

村長は何やら考え込んでいる。

剛「信じられないかも知れないが、これは本当の話だ。どうかこの村に住まわせて欲しい。」

村長「…… よかろう。断る理由もあるまい。お主らは力も強いだろう。村に歓迎しよう」

将信「ありがとうございます！」

村長「ああ、問題ない。この後だが、君たちの家へと案内する。

そのあと、諏訪子様が居らっしやる神社へ行つて挨拶しておいた方がいいだろう。」

「「…… は？」」

3人は石のごとく固まつた

村長「…はて？何かおかしな事をいつたかの？」

剛「すまない…今、なんといつた？」

村長「？」  
何かおかしいn」

峠「違います。その前の発言です」

峠は思わず真顔でツッコミをいれる。

村長「…ああ。諏訪子様の事か。知つておらぬのか？」

將信「いえ、3人とも存じています…。ミシャグジ操る土着神、そうですよね？」

將信はゴクリと唾を飲みこんで答えを待つ

村長「ああ、その通りだが、何か疑問が？」

將信「…いえ、なんでもありません。ああ、早々ですみませんが、取り敢えず家に案内していただけますか？」

村長「ああ、よからう。これ○○、3人を家に案内してくれるか？」

○○「わかりました。こちらですよ」

3人には同様が隠せなかつた……

――――――家――――――

峠「諏訪子……洩矢諏訪子で間違いないよね」  
3人は畳の上で寛ぎつつ話し合つてゐる。

剛「それ以外考えられない……つまりここは過去と言うことか。前世の記憶が役に立つたな」

将信「ボクはてつきり転生先は未来だと思つてたけどね。昔からあんな技術があつた

なんて」

峠「……日本神話にのるような神に会うつてのはちょっと危険じやない?」

剛「、しかしそれ以外に道はないだろう……もしもの時は頼むぞ。」

峠「もちろん……いこうか」

3人は土着神が崇拜されている神社へと歩きだした。・・。

# 大戦と結果

土着神 「ふーん・ そんな事が……」

境内で3人は祟り神と話をしていた。

土着神は相槌をうちつつ、三人の身なりなどを見る

土着神 「……正直信じられないけど、嘘をついているわけでもないね。この村へようこそ。」

まだ半信半疑だろう。だが歓迎する様子を土着神は見せる。

剛 「よろしく頼む。ところで、我々は職を探しているのだが……何かあるだろうか？」

土着神 「確かに仕事が得意だったよね？……あっ！、ならしばらくは、防壁を築いて欲しいんだけど、どう？」

土着神は閃いたように動作をした後、3人に提案する。

将信 「質問よろしいでしようか？」

将信は少し緊張し表情が堅くなっている。

土着神 「ん？遠慮せず言つてごらん。

それと、敬語は外して構わないよ？」

一応神だけど堅苦しいの苦手だし……諏訪子つて呼んでね」

諏訪子は笑顔を浮かべて將信を気遣っている。

將信「あ、ありがとう。えっと質問だけど、防壁をもつと作るつてことは……戦でも起こすの?」

諏訪子「あー、そうなんだよ。実はちょっと前に、とある軍神から手紙を頂いてね。

信仰を賭けて戦争だつて。断つたんだけど強引にさあ……あはは」

諏訪子は言いにくそうに質問に答える。

峠「なるほどねえ……こちら側としても協力したいんだけど……それはいいのかな？」

諏訪子「うーーん。まだ来たばかりの3人を巻き込むわけにはいかないよ……それに、私が<sup>軍神</sup>アーツを倒さないと、懲りないかもでしょ?」

諏訪子はニヤニヤと銀の輪を見ながら笑う

剛「承知した。ただ戦争という形式なら、軍神とやら以外の雑魚は片付けて構わないか? こちらとしても恩に着るばかりでは心苦しい。」

剛は真面目な表情で諏訪子に問う

諏訪子「へえ……そこまで言うなら、頼むよ。開戦は1週間後だよ。ちなみに明日の

9時ごろから建設を開始すると思うから、よろしくね』

諏訪子は机に頬杖をつきながら答える。

その表情や身なりに、想像していたものと真反対の感想を3人は抱く。

将信「わかつた。じゃあまた明日、諏訪子」

3人は立ち上がりつて玄関に向かう

諏訪子「うん。頑張つてね〜！」

諏訪子はブンブンと部屋から腕を振る。

3人はその様子に苦笑いしながら、腕を振り返し、扉を閉めた

—————

## 『夜』

剛「やはり予想通りだつたな。洩矢諏訪子本人で間違ひなかつた。」

剛は自慢げに2人と向き合つて座つている。

将信「だね。ちよつとイメージと違つたけど…」

将信は苦笑いをしながら昼間の事を思い出す。

峠「でもあの神力は本物だつたね。どうする？この村は信頼出来そう？」

剛「あの神様の様子から見て信頼出来るだろう…。もしかしたらこの世界は違う世

界なのかもしない」

剛は難しい顔をして考えている。

将信「ああそれ知つてるよ。パラレルワールドってやつでしょ？永琳の友達と話している時に耳にしたんだ」

将信は思い出を懐かしんでいる

剛「その通りだ。よく覚えてるな…」

峠「あの神の事だから、復讐させないようにこの世界を選んだのかも…ね。」

峠は目が半開きになつて眠そうだ。

だがその表情からは迷いが見受けられる。

将信「だとしたら、ボク達はこの世界で何をしたらいいんだろうね？」

剛「取り敢えずは戦争を見届けるしかないな。

歴史通りなら諏訪子の負けになるが」

剛は複雑な気持ちなのか、迷っている。

峠「うん。その後は…この世界が無くなるまで世界を見届けたいな。」

将信「まあ、もう遅いし寝よう。明日から壁の建設だし…。」

將信「あ、待つて。そういうえば武器がないよね……」

剛「すっかり3人とも忘れていたな……。明日村の人たちに聞いてみるか。」  
3人は思わず吹き出し、その後布団を準備し始めた。

その日は3人も早めに就寝した……

――――――――――――――――――――――――――――――

### 『1週間後』

ある程度村の暮らしに慣れてきた3人は、軍神の来訪を待つている。

峠「何かすっごく短い時間だつた気がするんだけど……」

將信「そうだね。また非日常が始まる……のんびりできないなあ……」

將信はふと空を見上げる。

將信「ツツ？ 峠！、剛！」

峠「？」

ツ！！

空からは軍神が現れた。

その圧倒的な神々しくも妖しい神力は村の中にもと大きく響き渡る。

軍神「…待たせた。戦乱の準備は出来ているな？」

軍神は徐々に神力を高めている。

諏訪子「…当たり前さ、始めようか。大戦をね」

――その瞬間、神力がぶつかり合い、歴史に残る大戦が始まつた――

諏訪子と軍神はお互いに神力を最大限に放出しているように見える。

諏訪子「…ツ!!」

軍神「…」

諏訪子はこの時代では最先端の鉄製武器を使い軍神を切り刻もうとする。

一方軍神は諏訪子の攻撃を蝶のようにひらりひらりと交わしている。

そしてその2人の戦いを邪魔しないよう、3人は兵士達と戦う。

剛「オラアッ!!」

時には剛が小石を投げ、勢いを増加させる。

そしてその攻撃を峠は直進、屈折させより命中度を高める。

その威力は小石でも砲弾以上の早さだ。

一方將信は敵の感覚を、操り敵のチームワークを混乱させている。

結果は目に見えていた。

3人はほぼ軍神の兵を制圧しきっていた。

その圧倒的な力の前に、村の人々は口がしまらなかつた。  
しかしどうやら諏訪子は押されているらしい。

最先端の鉄製武器やミシヤグジ様を使つてるが、どうやら軍神の神力に動きを阻害されてるようだ。

3人は諏訪子に協力したい衝動を抑え、じつと見守つていた

そして結果は敗戦。

要因は単純明快、諏訪子の力不足だった。

武器に頼りすぎたのか、身のこなしが不安定だった。

3人が見かねて協力しようとしたが、諏訪子らそれを拒んだ。

この村は、軍神八坂神奈子により支配される事になつた。

-----

『夜』

諏訪子「……ツ」

月明かりが神社を照らしている頃、諏訪子は湖のそばで涙を浮かべていた。  
その姿は子供のように、けれど大人のような可憐な姿だ。

將信「……。」

2人は既に眠っている。

諏訪子の姿を見た將信は、無言で彼女の傍に座つた。

諏訪子「……ごめんね。私の力があれば……。」

諏訪子は悔しそうに唇を噛み締め、俯いている。

將信「、そんな事ないさ。諏訪子は十分頑張ったよ。」

諏訪子「でもっ！！……村の人達を裏切っちゃつた……。神様失格……だな」

將信「違う！！」

諏訪子「ツ……」

將信の形相に諏訪子は、涙目で目を見開き、將信をじっと見つめる。

將信「それは違うよ。村の人達は諏訪子に裏切られたなんて思つてはいない。」

アイツ

諏訪子「…………」

諏訪子「… ありがとうね、將信」

諏訪子は暫く沈黙した後、袖で目を擦り、若干目の赤くなつた顔で、將信に礼をいつた。

將信「どういたしまして…。どうする？ 寝る？」

諏訪子「いーや… もうちよつとこのまま…」

諏訪子は將信の肩に体を預け、目を閉じた。

その後諏訪子が眠つたのを確認した將信は諏訪子の寝室へとお姫様だっこし、布団に寝かせた。

諏訪子は目を瞑り、心臓が波打つていた事に、將信は気づいていなかつた。

—————

『3日後』

天津神八坂神奈子、諏訪子、そして3人は、神社の境内で話しあつていた。

神奈子「… どうやら村人は私のことを受け入れる気はさらさらないらしい。これで

は信仰も集まらないんだ。」

剛「…まあそうだろう。村人達は強く諏訪子を信仰していたからな…。いきなり神が変わると言われても受け入れられないか。」

將信「うーんと、そこで提案があるんだけど?」

しばしの沈黙の後、將信は片手を挙げて提案の意思を示す。

神奈子「構わん。どんな意見だ?」

將信「えっと、2人で村をおさめるってのはどう?」

諏訪子「私と神奈子で…？」

諏訪子は頭上に?を浮かべ答える

將信「そうだよ。そうすれば村の人々も納得するんじゃない?」

神奈子「…確かに、それならばこちらとしても都合がいい。」

峠「じゃあ決まりだね!新しい神社の誕生。今夜は宴会かな」

そして村人は新しい村の繁栄を願つた。その村はしばらく安息だつたという…。

## 非常識と分かれ

大戦以降、特にこれといった事件もなく、数十、数百年ほど3人は諏訪子、神奈子の管理する村で暮らしていた。

その頃になると、鉄製の武器や装備も整い、次第に3人がいた時代と似通つていつた。時代の流れは早いが、信仰はまだまだ大丈夫なようだ。

3人は村の警備や管理を手伝いつつ、日々鍛錬に励んでいた。

諏訪子「いってらっしやあーい!!」

将信「いってきます」

将信は諏訪子の言葉より少し落ち着いた声で返事を返した。

3人は二人の神とはかれこれ數百年の付き合いがあることになる。  
当然親しみをこめて、互いを下の名前で呼びあつていた。  
特に仲が良いのは諏訪子と将信だ。

諏訪子は将信といふ時、いつもよりも大きく笑う。

その理由に気づいていないのは将信だけなようだが。

3人は森に妖怪が出て子供が襲われたという報告を女性から聞き受け急いで森へと向かっていた。

数百年の鍛錬をつんだ3人はより能力を応用し、体力や靈力を長持ちさせられるようになつてゐる。

そして数分後森に到着した。

しばらくあたりを能力を使い探索してみるが、特に血の匂いもなく穏やかな様子だ。もしかしてイタズラだろうか？

そう三人が考え始めた刹那、辺りを膨大な妖力が立ち込めた

3人「⋮」

その妖気はルーミアとはまた違つた質の妖気だつた。あたり妖力を分散出来ることから、かなりの実力者だとわかる。

だが3人は以前の戦いとは違い、お互に合図を送りつつ冷静に思考していく。知性のある妖怪にも随分なれた。

女性「あら、そんなに警戒されなくてもよろしくてよ?」

峡「…君はさつきの…」

峡は低めのトーンで女性と会話する。

女性「ええ。あの情報は嘘ですわ。少し事情が…。

実は、貴方方に頼みたいことがありますの…」

妖艶な女性は口元を扇子で隠しながら話している。う

将信「その用k」

剛「待て、まずこちらから聞きたいのだが、君の名前は何だ?」

剛は将信の言葉を遮り少し強引に名前をきく。

女性「あらごめんなさい。私は、八雲紫と言いますわ。」

八雲紫と名乗る女性は、胡散臭い笑みを浮かべ答える。

将信「僕達は君にさつき話したから省くとするよ。話を戻すけど、用件は何かな?」

紫「貴方達は妖怪が嫌い?神が嫌い?私はそんな「非常識」の世界を作ろうと思つて

いるの」

紫はするどい視線を三人に向けている。

峡「それは…不可能じゃない?そんな世界を作れた所ですぐに滅びると思うよ」

紫「それは問題ないわ。私の能力はそんな事さえも可能とするの。詳しくは秘密よ？  
 さて、もし私の計画に協力していただけるのであれば、歓迎するけれど……いかが  
 かしら。

といつても貴方達が私<sub>幻想郷</sub>の世界にいるだけでいいのだけれど。」  
 3人は話し合い、こう結論した。

剛「いいだろう……だが、身内に連絡をしよ」

紫「ありがとう。頑張ってね♪♪」

紫は扇子を振るい、3人を気味の悪い空間に落とした

剛 side

剛 「うおつおつおおつ!?」

剛は坂道を転がるように、背中から落ちた。

剛 「グウ……」

背中から落ちたため、その痛みに悶えている。

剛 「おい二人共大丈夫……いない……？」

剛は木々の生い茂る、どこか妖しげな雰囲気の森にいた。

剛 「（3人とも別の空間にとばされたって事か……まずは合流したいが、連絡手段もない……）

剛は一通り考えたあと、こう結論した

「とりあえず人を探すか」

そう呟いた剛は山を登つっていく。辺りを見渡すつもりなのか、少し早歩きで登つていく。

? 「止まれ!!」

? は剛に怒鳴る。

剛 「何故だ。私はこの山を登りたいだけなのだが。話を聞いてk」

白狼天狗 「問答無用!!白狼天狗の名の元に、貴様を通すわけにはいかない!!」

その言葉を元に、戦いが始まった。

峡 side

峡「いつた…」

峡もまた剛と同じように転げ落ち、周りを見渡している。

そこには人々がいた。

自分たちの時代とほぼ変わらない風景に、あれは夢だったのかと錯覚しそうになる。おそらくここは人里だろう。

妖気をチラホラ感じるのは気になるが。

峡「あの、すいません。こんな感じの男二人を見ませんでしたか？」

通行人「いや、見てないよ。ごめんね」

峡「いえ、大丈夫です、あはは」

峡はわかりやすい愛想笑いを浮かべ、近くの人々聞き込みを開始した。

そして数分後、情報がなく困っていたところ、大きな靈力が響き渡つた。

峡「ツ！」

(あれは剛の… 急がないと危ない!!)

峡は怪しまれないように視線を反射しつつ走り出した。

將信 side

「ガフツ」

情けない声を上げて將信は坂を転げ落ちた。

見渡す限り木々しかないが、道のようなものはできている。

辺りを能力で警戒しつつしばらく歩くと、

そこにひとつの中居があつた。

しつかりとした中居もあり、最近出来たようだ。

何かの縁と思い、將信は賽銭を入れ、参拝する。

巫女「… こんにちわ。旅の方ですか？」

垢と白を貴重とした、おそらくこの神社の巫女であろう彼女は將信に問いかける。

將信「え、ええ… 何故でしよう？」

將信は少し驚きつつも、その質問の意図を聞く。

巫女「いえ、この近くは妖怪もいますし、山奥ですから参拝する方もいないんですね

よ…」

巫女は少ししゆんとした表情で呟く。

巫女「あ、私の名前は博麗 鈴といいます。以後この神社を宜しくお願ひします…」

ペコペコとお辞儀を丁寧にする彼女に將信は警戒心を解く。

將信「ありがとう。僕は波城將信だよ。ところで…色々聞きたい事があるんだけ  
ど、大丈夫か？」

その瞬間、あたりに凄まじい靈力が響き渡つた。

あまりの靈力に鈴は驚愕の表情を浮かべ、將信も目を見開いている。

將信「ごめん用事ができた。また後でお願いします」

鈴「あ、ちよつ・と…」

戸惑う鈴を後ろに、將信は全速力で駆け出した、

## 原因と情報

白狼天狗は駆け出した。

天狗はトップクラスの速さを持つ種族だ。

目にも止まぬ早さで懐に入り、首をもぎとる

はずだった。

もう少しで刃先が首元に届くという距離で、剛は靈力を開放し、威圧した。  
しばらくの間眠つていたとはいえ、その力は大妖怪を上回る力だ。

白狼天狗「グツ⋮」

どうやら威圧されているらしい。手足がガタガタと震え涙目で歯を食いしばつている。

その威圧に失禁、失神してもおかしくないだろう様子の天狗は刃先を振れない様子だ。

白狼天狗「貴様⋮なに⋮を⋮」

必死で力を振り絞つて答えるが、男からの返答はない。

そこで白狼天狗は意識を失った。

剛「… ほう」

彼女は剛の能力により血流が流れにくくなつており軽く失神している。

白狼天狗：いや彼女を見た剛は素直に関心する。

恐らく妖怪にしては若いだろうに、必死で天狗として誇りを守り通そうとする意思に剛は感心させられる。

剛は彼女を近くの大木の傍に寝かせた後、この後どうするべきかについて考えている  
と、

どこかで合流したのか2人が全速力で突進してきた。

峠「おい剛！大丈夫か!?」

剛「あ、ああ。どうしたそんなに慌てて」

峠の形相に剛は驚いた様子で返答した。

將信「そりやあんなに靈力出したら何かあつたのかと思うよ…。

その証拠にほら…」

將信の指さす方向を見ると、鴉天狗や大天狗などが鬼の様な顔で迫ってきていた。

剛「…やりすぎたか」

3人「逃げよう（るぞ）」

剛が2人のエネルギーの勢いを操り全速力で逃げつつ、峠は敵の視界を妨害、將信は氣を悟られない用に能力を上手く使い、逃げ出した

「近くの洞穴」

剛「いやあ危なかつたな」

峠「やりすぎだつて…流石に骨が折れるよ」

峠は外の様子を見つつ話している。

將信「天狗達は流石だね！もつと強い奴もいるんだろうなあ」

將信は先ほどの出来事に興奮した表情で呟く

峠「ええつと…取り敢えず皆で情報交換だね。八雲さんに落とされた後から。」

剛「ああ…といつてもおれは、あの山にとばされた後アイツと会つて…それだけだが。中々精神力が強かつたぞ」

將信「人間が天狗を下に見るつて…。つくづくこの世界は面白いねえ…」

峠「…えっと、俺はまず人里にとばされたんだ。人々に聞いてみたんだけど、有力な情報は無かつたかな。

「ここが幻想郷だということ、妖怪と人間が共存している事ぐらいかな。寺子屋もあつたし文化はある程度発達しているのかも」

峠は顎に手をあてつつ考察している。

将信「なるほどね。じゃあボクだけど、僕は博麗神社つて所にとばされたんだ。んでそこの鈴つていう巫女さんに会つて……あつ」

将信は何かを思い出したように口を半開きにして固まる

剛「どうした？」

将信「実は後で話を聞く予定だつたんだけど……忘れてた……」

将信は悲しげな表情で答える。

剛「……まあ明日謝ればいいだろう。」

話は変わるが、明日からどうする？いつまでもここで暮らすわけにはいかないだろう。」

剛は洞穴での生活を思い出している。

峠「人里には空き家もあつたし住めそうだけど……？」

将信「うーん、暫くは無理じゃない？」

天狗達も激怒して変な情報を流しているだろうし……。

あ、いやその辺は僕の能力でしばらくはカバー出来るね。」

將信は自問自答している。

峡「んじや取り敢えず変装して人里に行つてみようか。」

| | | | | 週間後 | | | | |

3人は難なく人里へ侵入し、周囲に溶け込めていた。

家も確保し、情報を収集していた3人は博麗の巫女のいる神社へ向かつていた。

剛「…どうする」

峡「なんで1週間も会うこと忘れてるの…」

將信「そうだよ… 鈴にあわせる顔がないよ…」

剛「元々はお前だけどな」

醜い言い争いをしながら3人は渋々神社へ向かつた

（神社の境内）

鈴「いえ… お忙しかつたと思ひますし、大丈夫ですよ？」

… それで、一体何の情報が…？ 皆さん幻術を使つておられますし…

鈴は3人を見て逆に質問する。

將信「最近の新聞見た？」

鈴「いえ…あまり天狗の新聞は見てないですね。」

将信「前にものすごい靈力が解き放たれた事があつたよね？あれ実はボクらがやつちやつてさ…」

将信は苦笑いしつつ答える

鈴「なるほど。だから人里で暮らすためにしばらく幻術を使つてらつしやると…。」

峠「凄い推測力だね…ところで鈴さん？は八雲 紫を知っていますか？」

峠は目を鋭くして眞面目な雰囲気を醸し出しつつ問う

「ええ、この幻想郷の管理者ですから知らない人の方が少ないと 思いますよ。もしかして紫さんに？」

剛「そうだ。何も聞かされずにとばされたから、この地についての情報が欲しい。」

鈴「わかりました。では少し長くなりますがお伝えしますね。」

まず地形図ですが、剛さんのいた場所は妖怪の山ですね。天狗達が管理していく、侵入者は捕獲、もしくはその場で殺されますので、注意が必要です。

ちなみに人里を更にまっすぐ進むと魔法の森があります。ここは奇怪な妖怪が数多く住んでおり、ここも危険ですね。

左に行くと迷いの竹林と呼ばれる場所があります。名前の通り入ればかならず迷ってしまうと言われている竹林です。今は何もありませんが…。妖怪もあまり見かけま

せん。」

将信「詳しく述べる。あと一つ、この幻想郷つていうのはどういう仕組みで成り立っているの？」

鈴「はい、基本的には、妖怪が人間を食べ、人間が妖怪を退治する関係ですね、その仲介をするのが私です。数はある程度紫さんが管理していると思います。このぐらいでしようか。」

鈴は丁寧に説明をする。

剛「感謝する。すまない、時間を取らせてしまって」

鈴「いえいえ……お役に立てたならよかったです。ところで……」

3人はお茶を飲みつつしばらく談笑し、人里へと戻った。

（団子屋）

通行人b「あらこんにちわ」

3人「コンニチワ。」

皆人見知りなのかぎくしゃくしているが、しつかりと受け答えをしている。

通行人b「そういえば、かぐや姫のうわさは知ってる？」

峠「かぐや姫つて……あの竹取物語に登場する……」

通行人b 「そうなの。そのかぐや姫が本当に現れたって村中で話題よ？私もちらつと見てみたけど、とても美しい女性だつたわ」

惚れ惚れとした表情で通行人bは答える

將信 「そなんですね……。一度話してみたいものです」

「翌日」

夜に三人で話し合った結果、昨日の”かぐや姫”に会つてみたいという事になつた。

3人は人里の中心から少し外れた場所にあると大きな屋敷に着く。

初めて来る屋敷だが、どう見てもここだろうと3人はわかつた。

屋敷にはたくさんの男達が花束から宝石まで、様々なものを持ってかぐや姫を一目見ようとしていた。

その中には女性もチラホラ見える。

この様子ではかぐや姫と会うことはおろか、見ることすらできないだろう。

そこで2人の能力を使い、屋敷に潜入する事にした。

將信・妓

# 出会いと協力

3人は能力を駆使して、屋敷へ侵入した。

屋敷の前では翁と婆が求婚者たちと何かを話しているからなのか、特に警備している人も見受けられない。

簡単に侵入した3人はかぐや姫だと思われる気配のする部屋の扉を開ける。

かぐや姫 「：」

どうやらかぐや姫はこちらに気づいていないらしい。

3人は思わず唾を飲み込んだ。

その美しさは大和撫子を思わせる佇まいに、長い黒髪はツヤツヤとしている。その姿を見て3人は、竹取物語を思い出し、お互いの目を見合わせる。：

かぐや姫 「： ツ： あら、貴方達は誰かしら？」

その言葉からは気配に気づけなかつた事へなのか、戸惑いと不安が見える。

峠「ん、別に危害を加える気はないから安心してよ。噂のかぐや姫が見たかつたからつい、ね…」

かぐや姫「それを信用しろ、と？」

それは無理な話だけれど……まあいいわ、私が気づけないのだから、貴方達も永い時を生きて、鍛錬しているのでしょうか？ 話を聞かせてちようだい。少し退屈なのよ」  
かぐや姫は軽く体をほぐしつつ、3人の状態を確認しているようだ。

剛「構わないが… いいのか？ 我々は一応侵入者だが」

かぐや姫「いいのよ、私が許可するわ。私の名前は蓬莱山輝夜よ。」

剛「あ、ああ…俺は 白野剛だ。」

剛は予想していたとは違うかぐや姫の態度に少し動搖しつつ、3人の紹介やこれまでの経緯などを、粗方話していく。

輝夜「へえ… 随分刺激的な人生じやない、羨ましいわ。人間なのかしら？」

輝夜は袖で口を隠しつつ、クスクスと冗談を交え笑う

将信「あはは、君も永い間を生きているんでしょ？ でも妖氣は感じられないけど…」

輝夜「ああ、私のことも言つておくわね。

実をいうと私は不老不死、月から来たのよ」

輝夜は三人の反応を伺いたいのか少し自慢げに告白する。

峠「…へえ、そうなんだ。

ところで僕からも質問だけd』

輝夜「ちよ、ちよつと待つて。反応が薄くないかしら…？」

峠「だつて月に行つた人なんてねえ…あつ」

峠を含む3人は何か言いたげに顔を見合わせ、輝夜に問う

峠「月の中で一番頭が一番いい人つて誰？」

輝夜「…？月の頭脳と呼ばれている人はいるわよ。名前は、」

4人「八意永琳よ（だろ、かな、でしょ）」

輝夜「…え？」

輝夜は口をぱくぱくさせている。

峠「あははははっ！、いやあやつぱり永琳と知り合いなのかー。懐かしいね」

峠は珍しくツボに入ったように大笑いし、涙目になつていてる。

剛「ああ、懐かしいな。永琳も元気そうでよかつた。」

將信「輝夜さん？がここにいるつてことはいつかまた会えるかもね…楽しみだなあ」

3人は永琳についてしばらく語りあう。

輝夜「…ツ、貴方達、もしかして核爆弾が落とされるまでの時間稼ぎをした英雄だとか言う…」

將信「えつそんな事言われてるの？いや照れるね」

後頭部を搔きながら照れている様子を將信は見せる。

峠「あの時は死んだと思つたけどね…」

輝夜「敬語は使わなくてもいいわよ。」

永琳が月で自慢げに話してたわ、

帰ってきた時は、涙目で似合わず不機嫌丸出しだつたから、物凄く焦つたけれど、まさかこんな形で貴方達を見れるとは思つてもいなかつたわね。

もつと色々聞いていいか？」

翁「かぐや姫、今日も求婚者の方々g・： 貴様ら何者!! 今すぐ其処を退け！」

翁は目を見開き、持つていた弓矢を構え大声で三人に怒声を浴びせる。

輝夜「いえ、いいのよお爺様。彼らは私の知り合いですわ。

そうお怒りになるとお体にも悪いでしょう」

輝夜はニッコリと微笑み、先ほどの態度とは別人のように話しかける。

その様子に、翁は一旦彼らを見たあと、警戒をとき弓矢をおろす。

翁「・ すまなかつたの。少し気を張りすぎていたようじや。

かぐや姫のお知り合いとあらば構いません。どうぞ楽しんでくだされ」

翁は先ほどとは打つて変わつて優しげな表情で3人へ笑顔を向けて、扉を閉めた。

その様子に安堵した4人は、またしばらく、過去の思い出を話し合う。

―――そして数10分後。―――

剛 「ところで、何故翁はあんなにピリピリしていたんだ？いつもあんな感じなのか？」

輝夜 「… 実は私は2週間後ぐらいに、月へ帰ることになつてているのよ。」

輝夜は少し言いにくそうに答える。

將信 「へえ… 一体どうやつて帰るの？」

輝夜 「月の使者がやつてくるわ。まあ従う気はないけどね。」

竹取物語では、使者たちになす術なくかぐや姫は元の場所に変えるはずだ。3人は矛盾した物語に疑問を浮かべる。

輝夜 「実はそこに永琳が乗っているのよ。不意をついて逃げ出す予定。」

つい最近細工をしてある手紙を永琳から貰つたわ。それによると迷いの竹林にしばらく住むことになるわね。」

輝夜は夕日の差し込む窓の外を見つつ、遠い目をして答える。

剛 「… そうか。成功する確信はあるか？」

輝夜 「… 正直確率はとても低いわね。」

永琳の事だからある程度なにか考えていると思うけれど。」

輝夜は不安げに剛の問いに答える。

峡「ふーん。なら僕達も手伝うよ。永琳にも会えるいい機会じゃん。ねえ二人共?」  
剛「だな。久々に永琳も見たい。我々も永い時を生きている身、協力するぞ、かぐや姫」

輝夜「……ツ、ありがとう。先に礼を言つておくわ。」

輝夜は3人の思わぬ助太刀に驚愕の視線を向けるが、素直にその心を受け取ったようだ。

〔約二週間後〕

満月の夜、月の使者がやつてくると聞き、かぐや姫を月に返すまいと多くの人々が屋敷の前に、弓や槍といったあらゆる武器を持つて、彼らを追い返そうと待ち構えていた。  
そしてとうとう奴らはやつてきた。  
使者

彼らは眩しい光とともに小さな雲の上に乗つて現れた。

使者「…姫、お向かいに上がりました。穢れた地上に長い間居られるとは、どうなされたのか。我々と月に戻りましょう」

その姿に武器を持っていた人は体に力が入らなくなり、地にひれ伏す。

未知の存在との戦いに、武器を取ろうとしても体が言う事を聞かないのだ。

輝夜「残念だけど、それはできないわ…」

使者2「ツ！何故ですかひm」

突如、使者たちが目をくらませた。

使者達「ツ！」

突然の出来事に思わず使者達は混乱する。

この正体は峠だ。

使者達の発する何らかの光を目に向けて反射する事で、目眩しをした。

その隙に輝夜と永琳は竹林に向かつて全速力で逃げる。

永琳の持つてきた服のおかげなのか、二人の気配が消えている。

永琳は三人に気づいていないのか大急ぎで竹林へ走っていく

その姿を三人は見届けて、使者達を圧倒する。

将信は敵の感覚神経を惑わせ、峠は敵の攻撃を防ぐ、そして剛は力技で相手をねじ伏せる。

かつて彼らの味方をしていた3人にとって、その戦いはあまりにも結果が見据えていたものだつたという…。

「永琳、輝夜 side」

永琳「はあ… はあ… ここまでくれば問題ないわ… 遅くなつたわね、輝夜」

輝夜「ええ… ありがとう…。彼らがいなかつたら危なかつたわ… 大丈夫かしら。」

永琳「彼ら…？」

輝夜「あら、見てなかつたの？」

⋮⋮⋮「フフ、”英雄”よ」

永琳「英雄つて⋮⋮まさか！？！」

永琳は驚愕の眼差しで輝夜を、輝夜はニヤニヤとした笑みを浮かべ永琳と視線を交わしていた。

## 再会と再開

そんな騒動があつて1ヶ月。

3人は今まで將信による幻覚により月の使者達に違う顔を見せていたため、見張りがあるとしても難なく村を移動できた。

といつても村の人々にとつても初めて会う人だと思われてしまうが。

3人は永琳に会うため迷いの竹林へ行く準備を済ませ、靴を履いていた。

準備するのはコンパスや地図などオーソドックスなものだ。

そして3人が数分ほど歩き村の外へ出ようとした時、村長が彼らを呼び止めた。

どうやら酷く焦つているようだ。

剛「一体どうされたのですか？」

剛はその村長の様子に酷く不安感を抱く

村長「妖怪が… 妖怪の集団が村の近くに!!」

3人「ツツ!」

村の周囲100m付近には妖怪の軍勢が迫っていた。不思議なことに3人は接近気づかなかつた。

数は数十頭と大戦と比べると余り多くはない。しかしそれは十分村の存亡に関わる。3人は大急ぎで四方に散らばり、妖怪の軍勢の制圧を開始した

――――――――――――――――――――――――――――――――

剛「：大体こんなものか」

剛は村の周りにある死体の山を見る。

あの時の妖怪は全て目が黒く染まり光がなかつた。

さらに、妖怪達の様子は酷く興奮し凶暴になつていた。

こんな事が自然現象で起こるとは考えにくい。

となれば人為的におこす他ないので。

そんな強大な力を持つていて、人間と対立している妖怪は一人しかいない。

ルーミア「お久しぶり。御三方？」

剛「随分と手荒な真似だな。常闇の妖怪」

剛は殺氣を込めてルーミアと対峙している。

その殺氣は他に向けられていないのにも関わらず、木が軋み、川が波立ち、空気はピリピリとしている。

ルーミア「あらら……私は少し彼らの闇を強くしただけ……彼らが選んだのよ？」

ルーミアは頬を上げニヤツと笑う。

その瞬間、剛は鉄の大剣をルーミアに向かつて大きく振りかざす。

それは女性だろうと容赦しない剛の心意気が現れていた。

しかしそれはいとも簡単にルーミア自身の愛用している、暗黒を纏つた大剣に防がれ、簡単に折れてしまう。

剛「やはり勝負は自身の力で……だな!!」

剛は能力で勢いを増し、腕を振るう。

ルーミア「つ……」

いきなりの攻撃に、流石のルーミアも同じほどの時を生きた剛の力には負けるらし

い。ルーミアは少し押され気味に見える。

一方の峠と將信は、住民に被害が及ばないようそれぞれ村を守っている。

峠は二人のぶつかる衝撃波を屈折させ、將信は住民がパニックにならないようにして  
いる。

どうやらそれだけでも多くの靈力を消費しているようだ。

だがそれは無理もない。ルーミアの妖気は剛と同格……もしくはそれ以上だ。

これほどの妖怪は殺害を諦め封印が手つ取り早い、が生憎まだ鈴はきていない。  
しばらく時間稼ぎをするため、住民の保護を峠に任せ、將信は剛をサポートするため  
にルーミアに近づき、能力を発動する。

ルーミア「グツ……」

將信の能力によりルーミアは視力、聴力、皮膚の感覚を一時的に奪うことに成功。

剛「ハアッ！」

そして一瞬の隙をついて剛はルーミアの腹に勢いを乗せた拳をぶつける。

ルーミアは何本もの木を折った跡止まり、少しよろめきながら立ち上がった

ルーミア「流石に堪えるわね……」

ルーミアは体中が傷だらけ。

しかしそまだ少し余裕はありそうだ。

将信は慣れない能力の行使の仕方に息を切らしている。

ルーミア「なら、これはどうかしら?」

そういうつた途端、2人を濃密な闇が包み込む。

それは以前よりもさらに濃く、強い妖力を纏つた霧だつた。

峠が村を守つていなければ深刻な被害が出ただろう。

ルーミアは二人の周りだけに妖霧を発生させており、ルーミア側からは2人が良く見える。

ルーミアは大剣で何度も2人に切りかかる。

闇に邪魔され剛は本来の力や能力を發揮できず、自身と将信の止血を最優先にしている。

将信も能力を駆使しルーミアに対抗するが、未来の武器も無く攻撃手段はない。

いくら二人の回復力が強くても靈力を使い果たせば回復はできなくなる。

二人がどうにかして離脱する方法を必死に考えていると、

空から何かが空気を切つて落ちてくるのが見えた

――――――――――――――――――――――――

峠「…？」

峠は急に消えた妖霧に疑問を抱き、すぐさま3人へと駆け寄る。  
そこには、3つの武器が落ちていた。

ルーミア「ツ!？」

ルーミアはその武器から放たれる何らかの力に目を見開き、戦闘を放棄し急いでその場を立ち去った。

その後から博麗の巫女が空を飛んでルーミアを追いかけている。

なんとか時間稼ぎはできたようだ。

それを見た2人は意識を失った。

峡「…」

そして峡は、2人とその武器を担ぎつつ、汗だくになりながら竹林へ向かつた。

数10分後、通りかかった村人に助けてもらい、3人を永遠亭と呼ばれる所に運んだ。ここは迷いの竹林の奥に位置している。

大きな病の場合の病院としてよく知られているようだ。

そしてそこには…

峡「永琳…二人を頼むよ」

峡は息を切らしながら2人を引き渡す。

永琳「…ええ、色々聴きたいことはあるけれど、とりあえず2人を預かるわね」

永琳は苦笑いを浮かべながら3人を治療室へと案内した。

|||||

永琳「心配ないわ。恐らく力の使いすぎね。所々切り傷はあるけど、私の薬を塗つておいたから、問題ないわ」

永琳は二人の容態を確認し息をつく。

2人はゆっくりと呼吸し寝ている。

そして峠もまた安堵する。

永琳「さて峠、思い出話は後にして、いくうか質問させてもらうわね」

峠「ん、ああ」

永琳「まず… その武器は何？月の武器でもないし、幻想郷の技術ではそんな物は作れないはずよ」

永琳は椅子に腰掛け、静かに考察し質問する

峠「… それがわからないんだ。二人の怪我はルーミアによるものなんだ。その時にいきなり、空からそれらが落ちてきたんだよ」

峠もまた永琳と同じような仕草を取る。

永琳「… やつぱりあの妖力はルーミアの物だつたの…。良く生きていられたわね。

下手すれば人里は壊滅していたわ。ここまで来たんだから。」

その力は幻想郷中で話題になつたという。

永琳「気になるのは、その武器の質が酷く貴方達と酷似しているのよね……。話は変わるけど……すまないわね。昔、私の不注意で貴方達を地球に置いていつてしまつて……」

永琳は少し俯きつつ、小声気味になりながら峠に向かつて謝罪する。

峠「…はは、永琳も変わったなあ……。そんなこと3人とも気にしてないさ。後で月の話でもしてくれ」

峠はニヤニヤとしながら、背もたれ腰掛けてリラックスする。

永琳「どういう意味よそれ……。」

2人はお互に笑いあい、時を過ごした。

しばらく談笑し3人が起きたあと、3人は今までについて話し合っていた

――

数時間後

容態の良くなつた3人はそれぞれ氣に入つた武器を手に取りあつている。

剛「なるほど、確かにこの槍は良く体に馴染むな」

剛は槍を持ち素振りする。

永琳「そう……貴方達に何か関係があるのかもしないわね。河童にでも聞いたらい  
いんじやないかしら？」

将信「河童つてあの頭に皿を乗せてる……？」

将信はポカーンとした顔で永琳に尋ねる

永琳「……それは古すぎるわよ。幻想郷の河童の見た目は人間と変わらないわ。  
彼らはここ屈指の技術力を持つているから、参考になると思うわよ。」

将信「なるほど……河童はどこにいるの？」

永琳「妖怪の山ね。天狗がいるから、ちょっと危険だけれど。」

3人「……」

永琳「……ああ、何かやつたのね。まあ何百年化したら行くといいわ……」

その後永琳と思い出を話し合った後、3人は永琳にこき使われ、輝夜の暇つぶしの相  
手をやらされてたという。

その頃には夕日が輝いていた……

ルーミア s i d e

ルーミア 「… つあの力は一体… !?」

あまりの力に急いで森へと逃げ込んだルーミアは木の側に座り込んでいた。

鈴 「… やつと追いついたわ…」

そしてそこには紅白の巫女服を着た物がやつてきた。

ルーミア 「… 貴方が博麗の巫女ね。

さつきと封印なさい、名残惜しいけど、こんな力じやもう戦えないわ…。」

脱力したように木にもたれたルーミアは、鈴の封印の様子をじっと見つめ、こう言う。  
ルーミア 「… 彼らを貴方達は守れるかしらね」

鈴 「それはどういう…」

その答えは聞くことが出来なかつた。

ルーミアの髪にはリボンに似せた、強い結界の封印を施した。

そうすると、みるみる見た目が幼くなり、妖力も収まつていく。

ルーミア 「… お姉さんは、だれ？」

鈴「私は博麗鈴、よろしくね、ルーミアちゃん」

ルーミア「うん！よろしくね！」

フワフワと雲のように浮かび、ルーミアは鈴に手を振った後ゆっくりと進んでいった

鈴「あれは一体……？彼らって……？」

鈴はまだ疑問の残る中、ルーミアを見送り、神社へと戻つていった

## 時と嘘

あのルーミアと戦つて以来、3人は長い永い日々を自身の鍛錬に費した。

それは人の一生をはるかに過ぎた時間だ。

既に人の一生で例えるなら、6人目に到達するころだろう。

人間は妖怪と比べ成長が早いが、その分老化も早い。

だが3人は薬の効果が切れたあとも、剛の能力により老化の勢いを止めている。その能力を使う限り、半永久的に彼らは老いることがない。

しかしそれは一生の孤独を意味している。

-----

彼らは博麗 鈴の墓を訪ねた。

それは村の外れにある小さな墓だ。

彼女は村を懸命に守り抜いた英雄であるはずなのに、それに見合わないような大きさの墓に見える。

博麗 鈴は強かつた。

妖怪達が人々を襲えば、自分が最前線に立ち妖怪達を撃退する。

その体さばきは長年の努力の成果なのか、とても見事なものだつた。これは今の巫女の中でもトップだ。

だが、幻想郷は、彼女を抹消する。

博麗の巫女は務めを終えた後、幻想郷の住人の脳内から、巫女としての記憶が消去される。

思い出はうつすらと思い出せても、それが誰なのかはわからない。

まるで境界が鎖で縛られたように。

しかし3人は八雲紫によつて幻想入りした身である。

彼らの記憶にはしっかりと巫女の記憶があるが、それを村人には伝えられない。

彼女は巫女として務めを終えたあと、新しい自分として人生を楽しんだ。

鈴の事を村人に伝えることは、新しい彼女を否定することになるからだ。

3人は墓に手を合わせ、目をつぶり冥福を祈る。

剛「…もう何百年たつたんだろうな。鈴が逝つてから。」

剛は墓のある方向をじっと見つめ、静かにつぶやく。

將信「ざつと250年くらいじやないかな…。もう流石に数えるのを忘れちゃうね。」

將信は複雑な心境なのか、少し引きつった笑顔を浮かべる。

峠「今頃何しているのかな、次の人生を楽しんでくれていたらいいね。」

剛「だな。」

しばらくの沈黙の後、剛は背伸びをして2人に問いかける。

峠「ああそだつたね。急ごう」

3人は鈴の墓を後にした。

それを見ている存在がいるとは知らずに。

## 「妖怪の山」

將信「おかしいな… 確かこの辺りなはずなんだけど…。」

將信は永琳にもらつた地図を頼りに、川辺を歩き、とある人物を探していた。3人とも気配は感じているようだが、どこをさがしても姿が見えない。

剛「ううーむ…。」

剛は頭に手を当て、唸つている。

剛「… そうだ。2人とも、離れてくれ」

剛は何かを思いついたように2人に指示を出す。

その体からは既に靈力が漏れている。

將信「え？」

峠「ちよ、ちよつと待つてよ g」

剛「ハアツ!!」

剛は、北の方向に槍で薙ぎ払うようにして空を切り裂く。

その勢いに、近くの木々は倒れ、悲鳴をあげている。

その風圧に、二人はなんとか耐えるが；

??? 「きやつ！」

一つ、かわいらしい悲鳴が響いた。

「いてて……まさかバレちゃうとはね……」

は尻もちをついたのか腰をさすつて いる。

剛 「……。その道具は君が作ったのか？ 姿が完全に消えていたが。」

剛は若干警戒しつつ、緑色の帽子にリュックと少女と対峙する。

??? 「そうだよ！ あたしは河城にとり。河童の発明家さ。これは光化学迷彩。姿を完全に消せるのさ」

??? は自慢げに胸をはつて いる。

峠 「(この子が河童か……お皿つけてないんだね)」

將信 「幻想郷では常識に囚われてはいけないんだよ。！。月の使者……ではないみたいだね。特有の匂いがない。」

2人は剛をよそに、こそそとにとりの身なりを確認する。

剛「…？ それで、にとりでいいか？ 実は君に会いたくてここに来たんだが」  
剛は二人の動向に疑問を持つが、スルーして河童と話している。

にとり「あ、あたしに会いたくて？」

ふ、ふーん。なんだい？ 言つてみなさい」

にとりは剛の言葉に動搖するが、また誇らしげな顔で剛に問う。

峠「あ、この手紙読んだ方が早いかな。」

峠はにとりに一つの手紙を渡す。

そしてそれをにとりは警戒心もなく手に取つて、開けている。

にとり「えーとなになに…あ、永琳からなんだね。 ふーむ…」

にとりは頷きながら手紙を読んでいる。

にとり「よし、一度その武器たちを見せてくれないかな？」

その言葉に3人は頷き、静かに槍、双剣、弓を渡す。

それを見たにとりは驚愕した瞳で武器達を見つめ、じっくりと観察する。

にとり「これは君たちしか使ってないようだね、刃もきれいだ。

うーん… 私も本当に検討もつかないよ…。ただ一つ、わかることは…」

にとりは若干間を置いたあと、3人に語る

にとり「この武器達は…生きているね」

將信「いきてる？この武器たちが？」

將信は信じられないと言つた表情だ。

峠「ああ、やつぱり…。付喪神か何かのかい？神力は感じられないけど…」  
反対に峠はどこか納得したような表情でにとりに問う  
にとり「いや、付喪神ではない…。この武器達は使いやすかつただろう？  
この武器達が持つてるのは君たちとそつくりな靈力なんだよ…」

剛「なるほどな。この武器達は意志があるのか？」

3人はそれぞれ疑問を口にする。

にとり「…そこまではわからないね。あたしが分かるのはここまでさ。若干警戒して使うように…ね。」

いやあこんなモノ見るのは初めてだよ…」

にとりは3人に武器を返した後、キユウリを食べながらだらけている。

3人「」

3人はキユウリの音が北から聞こえていたことを暗黙の了解で黙つていた。

3人はにとりにお礼を行つて別れた後、永琳に報告をすべく迷いの竹林へと向かつていた。

紫「お久しぶりですわ。御三方」

そしてそこには、突如スキマから八雲紫が現れる。

剛「本当に久しぶりだな。聞きたいことが山ほどあるが…」

剛は少し殺意を込めて八雲紫を睨む。

賢者八雲紫でさえも、その殺意はとても強く、鳥肌がたつていることが分かる。  
扇子で顔を隠してはいるが、動搖もたまに見える。

紫「…幻想郷での暮らしへいかがかしら？」

紫は剛の殺意に耐え、一つ三人に質問した。

将信「正直楽しいよ。ただ、まだ諏訪子や神奈子に会つてないんだけど…」

打つて変わつて將信は純粹な疑問を紫にぶつける。

紫「彼女達は現人神がなんたら…なんていつてたわね。まだ幻想入りする気はない

そうよ」

將信「そう…。よろしく伝えておいてよ。」

峡「話は変わるけど、君の要求は何かな？」

峡は鋭い視線をもつて、紫に問いかける。

紫「そうね……私の要求……というかお誘いなのだけれど、月には行きたくないから？」

3人はその言葉にそれぞれの反応を示している。

剛「月に行つてなにをする？」

紫「簡単よ。戦争をして、勝つ。そして技術を得るの。そうすればより幻想郷を発展させられるわ。」

剛「……それは不可能だ。月にはとんでもない技術がある。例えどんな大妖怪でも、だ。」

剛は強めの意見を紫に言う。

紫「ええ……なら質より量。最高の妖怪軍団を大量に用意するだけよ。」

紫は扇子で口元を隠しているが、その口元からは何やら胡散臭さが滲み出ている。

峡「なら好きにすればいいさ……ただ僕達は参加しないよ。もしも、妖怪の危機となれば手助けはするけど。」

將信「うん。それがいいね。一応僕達は月の使者に追われて いる身だし。永琳にも迷惑かかつちゃうから……」

將信と峠の意見に納得した表情だ。

紫「あら、残念ね。……まあいいわ、時刻は 1 週間後の朝よ。妖怪の山の頂上に集合。ではまた後ほど……ね。」

紫はスキマを使って何処かへ消えていった。

剛はまだ聞きたいことがあつたのか不満げな顔だ。

峠「まあ、とりあえずは永琳に会いに行こうか……。」

その言葉で、三人はまた竹林へと歩き出した。

## 誤魔化しと納得

將信「あちや…」

將信をはじめ、3人は月面での戦場より少し離れた場所に、にとりからもらつた特殊な迷彩服を着て、戦争の様子を見守つていた。

河童の技術はやはり凄い。

月の技術とまではいかなくとも、幻想郷ではトッピクラスだろう。現に3人は月の使者達に存在がバレていない。

3人は紫と会つたあと、迷いの竹林へ向かい永琳と話し合つた。

戦争へ間接的に参加することについて、彼女に引き止められたものの、三人の説得に不満げながらも納得してくれたようだ。

そして紫は湖に能力を使い、月へと妖怪達を引き連れていつた。

だが戦況は圧倒的にこちらの力不足で、不利な状況だつた。

質より数を取つた紫引きいる妖怪の軍団は都に攻め入ろうとするが、それは月の近代兵器によつて防がれる。

月の技術も進歩しており、壁からは無数の極太のレーザーが放たれている。

その威力は妖怪達の力では防ぐことができず、その線上にいた妖怪達は灰すら残さず  
に消え失せる。

紫「…ツ」

流石にあの負けず嫌いな紫もまずいと思つてゐるようだ。

さらに近代兵器だけではなく、二人の女性が圧倒的な力で数多くの妖怪をねじ伏せて  
いる。

恐らく月人の中でもトップクラスなのだろう。

特に刀を持った女性は3人のほぼ同格の早さを持つており、体さばきもうまい。  
その刀からは何やらとてつもない神力が感じられる。

恐らく、神々を憑依させる能力のようなものなのだろう。

3人は戦況を中立した立場から確認しつつ、冷静に戦場を観察してゐた。  
この状況ではまずいかもしれない…：妖怪達の誰もがそう思つていた。

そして時間がかなり経過し、妖怪達も壊滅的な被害を受ける事になる。

それは3人にとっては目に見えたことではあつたが、紫は目を見開いてこの状況に驚  
いている。

剛 「… おい、こちらの敗北だ。早急に幻想郷へ戻るべきだろう」

紫 「… ツ…」

紫はまだ納得がいかない様子だ。

唇を噛み締めて悔しさを全面に表している。

剛 「… 早く行け。しばらくここは引き受ける、このままでは全滅するぞ。」  
剛は目を鋭く尖らせ、紫に強めの口調で命令する。

紫 「ツ！ … わかつたわ」

その言葉に気を押されたのか、それとも今するべき事がわかつたのか。

紫は妖怪達を引き連れて、素直に退散した。

そしてその途端、攻撃は3人に集中する。

時にはレーザー砲が、時に追尾する高速ミサイルが、3人を襲う。

その圧倒的な力を前にすれば、大妖怪でも流石に足が震えるだろう。

だがその攻撃を3人は正面から迎え撃つ。

剛はその能力で、自身の力で月の警備隊達を吹き飛ばす。

峠はその能力でミサイルやレーザーを反射、屈折し、2人を守る。將信は弓を使い警備隊を寄せ付けない。そして能力で敵を惑わす。その力は長年の鍛錬で培つた努力の証である。

戦況はガラッと一変する。

かつて全妖怪と戦つた彼らは、この程度の攻撃ではピクともしない。

戦況はこちらに傾いたかに見える。

だがそんな彼らでも疲れは見える。

近代兵器を相手にするため、予想以上の靈力を消費するからだ。

ある程度時間を稼いだ後、彼らは退散しようと考えていた。

しかし紫はまだ戻ってきていていない。

恐らく妖力不足でスキマがまだ開けないのだろう。

しかしこれでまだ時間稼ぎをすれば、靈力が底を尽きてしまう。

となれば逃げるが勝ちだが、逃げようにも四方八方を囲まれており、とても隠れることができる場所があるとは思えない。

どうするか三人が冷や汗を出し始めたその時、突如3人の武器達が光り出す…。

3人「ツ!？」

3人は思わず驚愕の眼差しで武器達を見つめる。

そして武器達は空へと高く浮かび上がり… 閃光を放った。

その光は都にまで届いたという。

|||||

3人「…」

何度のこの状況に陥つただろう。

3人が目を開けると、そこには3人の女性が立つていた。

その様子に、何か3人は懐かしさを感じる。

周りを見渡せば、白い箱のようなものの中に入っているような感じだ。

將信「こ、こんにちわ?、ここはどこ?貴方達はだれ?」

將信は引きつった笑みで3人の女性に向かつて話しかける。

3人の女性は將信を見て、一人の女性が口を開ける。

? 1 「あたし達は貴方達が使つていた武器だよ。  
といつても元々は貴方達だけどね?」

? 1 はニコッとした笑顔で3人に説明する。

剛「…すまない、訳がわからない。君達が我々が使つていた武器なのは百歩譲つて理解できる…しかし、元々は我々だつたとは、どういうことだ?」

剛は疑問を直接的に3人の女性にぶつける。

? 2 「ああ…ごめんなさい。混乱しているでしょう。まあゆつくり座つてくれてい  
いわ:」

? 2 は三人に向かつて気遣いを見せる。

? 2 「まず自己紹介から…ね。

背の高い方から、華満私、結衣、彩よ。

それぞれ、峠の使つてた双剣、剛の使つてた槍、將信の使つてた弓という立場ね、」

峠「なるほど……その姿は擬人化してゐるつて事かい？」

結衣「そうなるね！まあこの程度は御茶の子さいさいさ……」

3人はそれぞれ自身の懐を見て、納得した表情を浮かべる。  
確かに武器はなくなつていた。

華憐「それで、なにか質問はあるかしら？」

華憐はしばらくの沈黙の後、3人に問いかける。

將信「あつ……じやあいいかな。君達は僕を転生させた神と関係があるの？」  
しばらく間を置いた後、華憐は答える。

華憐「そうね……じやあ少し昔話をさせてもらうわ……」

貴方達は異質な能力を持つて偶然にも生まれてしまったの。  
これは本当に偶然ね。

そしてその頃、あの神は様々な武器を作る必要があつて、たくさんの武器を生み出して  
いたわ。

そこで生まれたのが私たち。まあ失敗作ね。私達は心を持つてしまつたのよ。  
神は私たちを捨てたのだけれど、その後私達は貴方達の生まれ持つた異質な力に引き  
寄せられたの。

暫く一心同体として貴方達の体に憑依していたわ。

だから私たちの力は貴方達の力と似通つてゐるというわけね。

だけれど、貴方達が死んでしまつた後、神が貴方達に制限をかけたせいで、私達は貴方達と分離することになった……というわけ。

結論を言うなら、関係性はありまくるわね。」

將信「ん、ちょっと待つてよ。一体何故神はたくさんの剣を作つていたの?」

結衣「それはあたし達にもわからないんだ……。憑依する前は言語が理解出来なかつたからね。」

剛「……つまり君達は我々の味方という事でいいんだな?」

華憐「一応はそう考えてもらつて構わないわ。」

峠「なるほど。だけど、何故また僕達の所へ戻つてこれたんだい?」

彩「そこは私が説明します。貴方達の能力の制限が少し解除された時に、私達の制限も少し解除されました。」

そこで私たちは能力を頼りに貴方達の元に辿りついた、ただそれだけですよ。

といつても危ないところでしたが……。」

彩は苦笑いしながら3人に説明する。

將信「その能力ってのは何なの?」

彩「それはまだ教えられません……。私達は分離してから、貴方達にとあるお願ひを持つようなり、いつかこの空間にお呼びしようと考えていたのですが、危険な状況になつておりましたので、急遽この空間にお連れしました。

剛「それは助かつたな……。ところで外はどうなつていてるんだ?」

剛は安堵した様子を見せ、外の様子を伺う。

華憐「騒がしくなつていてるけれど……。紫達は三人が自力で帰つたと勘違いして幻想郷に戻つたようね。問題はないでしよう。一部の妖怪達もきちんと戻つているわ。月人の中にも、捜索を諦め始めている者も出ているし、別にわざわざ急いで戻らなくとも問題ないと思うわよ」

峠「・ それはよかつた。

それで、君達の願いつてのは何なのかな?」

峠は一旦話題を切り上げ、気になつていてることを3人の女性に質問した。

華憐「私たちの要件はただ一つ、貴方達と手合わせすることよ」

その言葉に、3人は疑問を覚えた。

## 開始と決着

將信「手合させ……？ 一体何故そんな必要が？」

將信は華憐に向けて疑問を投げかける。

華憐「それは単純明快。勿論、私達はまた貴方達に従え、役に立ちたいと思つてゐるわ。それが剣の命だもの。

でも私達本来の力を使いこなすには一心同体、いやその時以上の、それ相応の力量がないと使いこなすことはできないわ。

だから今の制限がかかつた状態の貴方達でも、私達を使いこなせるに等しい力量を持つてゐるか見極めたいの。」

剛「ほう……俺は乗つたぞ。久々に楽しい戦いができるそうだ。」

將信「……ボクも賛成。新しい戦力が手に入れられるのは魅力的だね。」

2人は挑戦的な態度で、口元をつりあげる。

峠「2人がそういうなら…もちろん僕も参加するけど… 手合はせはどういった形式でやるんだい？」

華憐「形式は3vs3。チームワークも見ておくわ。貴方達はこれでお願い…。私達は自身の分身を武器として使うわ。」

3人にはそれぞれ、頑丈な双剣、槍、弓が渡された。恐らく彼女達の代わりといつた所だろう。

剛、華憐、彩は未知の能力に不安を持つが、意味の無い不安を振り払い、戦闘に集中するため、心を落ち着かせる。

彩「ルールは相手に降参を認めさせる、または気絶させることができたら勝ちです。金などの反則技は禁止です。それでは、：、始め!!」

その言葉が叫ばれると同時に、6人は、お互いに飛びかかった。

—————

6人はお互いに向かつて、目にも止まらぬ速さで駆け出した。

剛（とりあえずまずはリーダー格の華憐を潰す…！そうすればバランスが崩れるはずだ）

剛は華憐へと、鬼をも思わせる拳を放とうとする。

が、それはできなかつた。

剛「…」

(これは面倒だな…)

剛は思わず眉間にしわをよせる。

拳を放とうとした瞬間、彩の弓矢によつて行動を遮られてしまつたのだ。

3 vs 3はチームワークで大きく戦況が左右する。

剛「ならば!!」

剛は、ならばサポートをする彩をまず倒そと、目にも止まらぬ速さで突進し、拳を振るう。

しかしその拳は、まるで力が相殺されたかのように、動きを止め、またも剛の攻撃が届くことは無かつた。

剛「なつ!?

グツツ!  
!?!?」

剛はなにもわからないまま、彩の反撃の蹴りで吹き飛ばされる。

剛 「・・・」

彩 「私は近接戦も可能です。貴方達の戦いを常に見て、学んでいましたからね」  
 （勢いが止まつた…？まさか俺と似通つた能力なのか？…しかし風圧は受けている…と）

剛は未知の能力と、その力に冷や汗を浮かべていた。

その頃将信と峠は、華憐と結衣のコンビネーションに惑わされる。

將信・峠 「（一体どういうことだ…！？）」

將信は華憐と結衣に弓矢を当てるべく何度も矢を放つが、それは寸分の差で軌道が大きくずれる。

まるで二人を避けているかのように。

それは峠も同じで、双剣を二人の首元に向かつて振りかざすも、何故かあたらない。

二人「(何かおかしい……)

2人ともその様子に違和感を感じており、それが能力の影響だとわかつてはいるようだ。

しかしそれだけでは能力の検討がつかないようだ。

だがその間にも華憐と結衣の攻撃は止まらない。

華憐は槍で重い一撃を、結衣は双剣でふたりを切り裂こうとする。

その攻撃を峠は何とか防ぐが、弓のみの將信は呆然一方の様子で、何とか攻撃を防いでいる。

近接戦に夢中になるあまり能力を行使する暇がないようだ。

その後も何とか3人は武器達の猛攻を躊躇していたが、とうとう中央部に追い込まれてしまつた。

華憐「あら?、この程度では私達を使うことはできないわ。それに……3人とも本気じやないでしよう。」

華憐はクスクスと笑い、3人を挑発し余裕を見せる。

剛 「・・ ほう。」

剛はその言葉にニヤリと笑い、3人は何やら背中を合わせ、ヒソヒソと話し合う。  
結衣 「話は終わつた? 何を企んでるのか知らないけど・・ 私達には勝てない!」

結衣は双剣ですぐさま3人に襲いかかる

そして武器達は勝ちを確信する

が、全く違う方向へと運命は進むことになる

結衣 「ツ!!」

その刹那、結衣は剛に一瞬で吹き飛ばされた。

結衣は壁に埋まつて気絶している。

どうやら殴り飛ばされたようだ。

そして氣絶したからなのか擬人化も切れ元の双剣の姿に戻つた。

華憐「ツ!？」

(「一体何故……!?私の能力で攻撃は当たらないはず……）

華憐は攻撃が当たつたことに驚きを隠せない様子だ。

剛「……理由を教えてやろう。

俺は戦いの合間にそちらの戦いを見ていた。そして將信の話で確信した。まあズレを操る能力……あたりだろう?

彩との戦いで、その能力は俺の風圧には効かなかつた。ならばその力を認識しないと能力は使えないのうだろう。

なら後は簡単。攻撃が体に当たる前に寸前で止めて、風圧で吹き飛ばし気絶させればいい。」

華憐「……へえ、やるじやない。私の能力を見破るなんてね」

彩「しかし……私達にも通用しますかね?」

彩は数十の矢を何故か剛ではなく將信に向かつて空中に放つた。

將信はそれを射るべく弓を構えるが：

剛「ツ! 逃げる将信!」

將信「ん?、あの程度ならボクでも射ることが……ツツ!?

將信に向かつて放たれた矢は常識ではありえないおかしな挙動を見せ、將信の行動を惑わせた。

そして將信に数本が当たることになった。

彩の非常識的な動きを見せた弓矢は寧ろ素人なら躊躇したかもしれない。  
使い慣れた將信だからこそ、その動きは理解出来なかつた。

將信「…グウ…」

將信は彩の矢が足、腕などに命中し、戦闘不能の状態だ。  
ここで將信は離脱となつた。

戦況は、2 v s 2。

残るは剛、峠 v s 華憐、彩 だ。

剛 峠  
どうやら彼らは、ある程度の能力の予想が出来ているらしい。  
先ほどの弓矢の動きや剛との戦いを考慮したのだろう。

剛「…」

(ならば、一度で決める!!)

剛は一度で試合を決めようと、自身の最大量の靈力を槍の先にチャージしている。

峡「…」

その様子を見て悟った峡は、剛に自身の靈力を分け与えつつ、いつでも飛び出せるよう足に力を込める。

そして華憐と彩も、彼らと同じ行動を起こす。

どうやらお互い一撃で決めるらしい。

互いに全身全霊を込めて、自身の最大威力のレーザー光線を放った。

「「ツツ!!」」

そしてぶつかりあつた光線はその世界全てを飲み込んだ

彩「引き分け・ですね。」

將信「もう立てない・よ・」

6人は光線が世界を飲み込んだ後、恐らく永遠亭であろう場所で目を覚ました。  
恐らくしばらく寝ていたのだろう。

6人は一斉に目を覚ますが、体調に異変はない様子だ。  
靈力が寝ていたのにも関わらずほぼ〇に等しかつたが。

?? 「・・・ ?・・・ !?!! : 師匠！ 皆さんのが起きました！」

兎のような耳をつけた少女は6人が起き上がったのを見て目を見開き、大慌てで師匠と呼ぶ人の元へとドタバタと音を立て走つていった。

峠「多分永琳だね・」

將信「うん・・・ 絶対怒られるよ・！」

2人は顔が青ざめている。そういうながらもまだ体が慣れていないのか、立ち上がりれない。

剛 「何とか逃げれないか?」

剛は彼女達に向けて焦つた表情で助けを求める。

華憐 「無理ね……もし出来ても、こんな状態じや使えないわ」

剛 「これは困ったな……」

剛は自身の状態を見てため息をつく。

將信 「どうかなんで君達擬人化してるの? 精力は底を尽きてるけど……」

華憐 「私たちが知りたいわよ……」

結衣 「あたしは武器のままなんだけど……」

峠 「変化する精力すらないんじやない?」

永琳達と話し合つたら、3人の事の種を明かしてね……！」

6人はそんな会話をしても、現実逃避をして、永琳が来るまで唸つていた。

# 朝と夜

永琳「はあ……倒れてた貴方達を見た時は心臓が止まるかと思つたわよ……」

永琳はため息をつき、ジト目を三人に向ける……

將信「ご、ごめんなさい……」

体つきの良い3人の男が、一人の女性に怒鳴られる姿はいかにも滑稽な様子だろう。

永琳「……まあいいわ。それにしても永い間眠つていたものね。貴方達も何故か可愛いらししい少女の姿になつていてるし……詳しく述べて頂戴」

將信「えーと、長くなるんだけど、実は……」

（説明後）

永琳「……なるほど。大体把握したわ。まあ武器の正体が掴めたなら良かつたじやない。

でも、人里の皆も心配していたわよ？」

剛 「それはすまなかつた……。ちなみに、今は私達が倒れてからどのくらいの時間がたつているんだ？」

恐らく10年以上は経つてしまつてしていると思うが、」。

永琳 「ああ、ええと……ざつと900年ほどね」

將信 「えつ……」

(あれ、それだともう皆成仏しちやつてるんじや)

峠 「正直受け入れ難いね……。ところで、現代の博麗の巫女は大丈夫なのか？」

峠は長い間面識のない巫女について心配になり、永琳にふと聞いた。

永琳 「ああ……そこら辺はそこの妖怪さんにお聞きした方が早いわよ。」

6人は疑問を持ちつつ、一斉に永琳の目線の先を見る。

紫 「流石永琳ね♪……皆さんも無事なご様子で何よりだわ」

紫は口元に扇子をあて、胡散臭い笑みを浮かべている。

將信 「いつから聞いてたの？」

(全く視線を感じられなかつた……)

紫 「貴方が謝ったシーンからね」

將信「…」

(ほとんど全部じゃないか)

峠「… それはどうも…。それで、僕達の質問に答えてくれるのかい?」

紫「勿論… 貴方達には幻想郷の情報をある程度伝える必要があるわ。」

紫「まず博麗の巫女だけれど、今は博麗靈夢という子が担当しているわ。まだ年齢は私達に比べれば幼いけれど、良い巫女になるはずよ」

剛「その子は歴代の巫女と比べてどうだ?」

(幼い… となると今後も続けられるか心配だが…)

紫「素質は十分すぎるほどにあるわね。もしかしたら鈴の次に優秀な巫女に… とうところよ。けれど才能があるからか、修行が疎かになりがち… と言つた感じかし

ら。」

紫は少し俯いている。

どうやら巫女の今後を考察しているようだ。

將信「僕達が眠つたあとから、特に地形や生態系に変動はない?」

紫「特にない… ああ、鬼が地底へ潜つたわね。恐らく人間に愛想を尽かしたんだと思ふわ。」

だから地底には地上で嫌われるような妖怪が数多くいるわね」

紫「ああそれと、これを貴方達に伝えておかなければならぬの。」

剛「？それはなんだ？」

紫「私は前回の失敗<sup>月面戦争</sup>で学んだことを活かして、新しいルールを作つたわ。

名付けて、『スペルカードルール』よ」

剛「…ほう… 詳しく聞かせてくれ。戦闘に関する掟のような物か？」

紫「大体はそんな感じで正解。今後妖怪の力が大きくなりすぎると、当然人間の存亡に関わるわ。それは幻想郷の崩壊を意味するわよね？」

そこで対等に決着をつけるために、弾幕ごつこという遊びで決闘を行つて、揉め事の決着を決めることにしたの。

ちなみに、原則人間と妖怪で血を流すような争いは禁止にしてゐるわ。まあ従わない妖怪も多いけれど」

ある程度説明し終えた紫は近くに座椅子にすわりこむ。

峠「そのだんまくごつこつていうのは、名前の通り相手に弾を放つて殺すつて事かい

？

というか凄く幼稚な名前に聞こえるけど…」

紫 「（幼稚な名前は余計よ。）

弾幕ごつこは殺すまではしないわ。大体のことを言うと、貴方の言つた通り靈力妖力間力神力を集合させた弾を発射して、敵に何度も被弾させたら勝ちよ。

そこでスペルカードと呼ばれる物が必要になるの。これよ」

紫は6人に向かつて白紙の紙を何枚か渡す。

将信 「これがスペルカード？ 白紙だけ？」

紫 「それでいいのよ。それは言うならば必殺技。

どんな技を使いたいかそのカードに想像して念じれば、そこに思つた通りの物が描かれるわ。

ただしスペルカードは使える回数も最初に決めること。大きな力を必要とするから注意が必要よ。

弾幕は人によつて形が違うし、スペルも奇想天外なものも多いから、楽しいわよ。」

紫 「…こんな感じね。何か質問はあるかしら？」

剛 「質問だが、弾幕ごつこは近接戦闘は駄目なのか？」

紫 「別に構わないわ。ただしあくまで被弾が目的なのがほとんどという所に注意して

ちようだい。

能力も駆使して戦う事が多いわね。まだ作つたばかりだから、一部にしか浸透していないけれど。」

紫「…それじゃあ私はこれで戻るとするわ。お大事にね。」

紫は他に質問がない様子を確認し、そそくさとスキマの中へと入っていく。

そしてその様子を確認し、武器達は一斉に喋り出す。

結衣「…つはあつ…！喋つてないのに何故かやたら疲れた…」

将信「あの人独特な雰囲気があるからね…」

結衣と将信は背伸びをして気を緩めている。

峠「…よし、じやあ早速戦いの種を教えて欲しいだけど…」

峠は一呼吸おいて、彼女達に問い合わせる。

華憐「いいわよ。まず何が聞きたいかしら？」

剛「まず君たち能力の詳細を聞かせてくれ。」

華憐「ええ、まず私の能力は、距離の差を操る程度の能力よ。」

結衣「あたしは、動きを静止させる程度の能力だね。」

彩「私は、強化・弱体化をする程度の能力です。」

剛「なるほどな。だが、彩の能力の詳細がわからないんだが… それはどんなものも対象と出来るのか？」

彩「いえ、物体の強度や能力、自身の状態だけですね。他人に干渉する場合はその方に近づいていいないと使えません。」

峠「なるほど、それで華憐の能力を強化して… といった感じなんだね。」  
華憐「そういう事よ。貴方達の攻撃が当たらなかつたのは私の強化された能力のおかげね。」

結衣「あ、これでも制限されてるだよ？ あたし達は一応神に作られたから、もつともつと本当は強いんだけどね。」

結衣は自慢げに胸を張っている。それは体格と見合わさってか、子供のようにも見える。

結衣「……なによ」

将信「いやなんでもないよ」

（何か今の顔すごく似合つてたなあ…）

将信は苦笑いを浮かべて結衣からの視線をそらしている。  
もちろん、目が泳いでいることに本人は気づいてないない。

華憐「…それで他に質問は？」

（なにやつてるのよあの2人…）

將信「あ、じやあ質問。試験は合格でいいの？」

ハツとした表情を見せて、將信は彼女達に問う

華憐「構わないわ。ちなみに、本来私達の能力は武器の時でも使用できるけれど、それは制限によつて無理なようね。もう少し制限がなくなつたら、私達の能力と違つて、武器本来の能力が使用できるようになるはずよ。」

華憐「まあまだそこまで考えなくともいいわ。… これで打ち切るわね」

その数日後、3人は話し合い、とりあえず鈴の墓にお参りに行つたあと、博麗神社へと向かつていた。

剛「ふう… もう少し歩けば神社にだな。まだ体がぎこちない…。二人はどうだ？」

將信「確かに何か重い感じがするね。リハビリがもう少し必要かな」

峠「…ふう。天狗みたいに空を飛んだら楽なんだろうな… なんてn」  
ビュユユウツツー――――――――――――――――

その直後後ろから箒に乗った少女が空を駆け抜けて言つた……。

3人「は？」

思わず彼らポカーンというような表情を浮かべる。

華憐（…あれは魔法使いよ。貴方達の時代にもいたでしょ？）

華憐は少し呆れたように三人に喋りかける。

武器の状態の為か、テレビジャーのようだ。3人にしか聞こえないらしく、近くの動物は特別反応もしていない。

剛「た、確かに見かけたが…あんな少女が魔法を使えるのか？」

あの知識量を習得するには相当な鍛錬がいるはず。それに彼女は人間だが…」

華憐「（もう900年たつたのよ？魔導書ぐらいたくさんあるでしょ？）

剛「そ、そとか…」

剛はまだ900年たつたことに、慣れていな様子である。

峠「そういえば、あの子博麗神社へ向かつたよね。新しい巫女の知り合いかな？それとも参拝客？」

結衣「（とりあえず、走らない？）

将信「だね：好奇心が止まらない」

3人は深い森の中を、風のよくな速さで走り抜けていった……。

そして3人が神社にもうすぐ着くといったところ

――――――空は紅く染まつた――――――

「博麗神社」

靈夢 「……」

(今日も暇ね……)

靈夢はやる気のなさそうに、鳥居の近くの落ち葉を掃いていた。

そしてそこに、いつもの如くアイツが現れる

??? 「やつほー靈夢。遊びに来たぜー」

靈夢 「魔理沙、あんたねえ……」

(またやり直しじゃない……)

靈夢は魔理沙が全速力で神社に入ってきたせいで落ち葉が巻き散らかされたことに

静かに怒つてゐるようだが、次第に呆れ顔に変わる。

靈夢「： 縁側で待つてなさい。後で行くわ」

そして魔理沙と呼ばれる少女が浮かぶ簾から降り、縁側へ向かつた時、世界が紅く染まつた。

靈夢「…」

魔理沙「… 異変か？こんなに妖霧を作り出すつて、かなり力のある妖怪らしいな」

魔理沙は冷や汗を浮かべているが、その顔は喜びに満ちている。

靈夢「… はあ」

靈夢はめんどくさそうにため息を吐き、空へと飛び立つた。

魔理沙「ちよつ何処へいくんだ!? 発生地点もわかつてないのに…」

靈夢「あら、私の勘は百発百中よ？」

魔理沙「…」

そして二人の少女は紅い妖霧の原因の場所へと飛び立つた。  
6人がその様子を見ていたことを知らずに。

## 魔の霧と現代の巫女

6人は博麗靈夢を後からつけて、その様子を見守っていた。

だが直接異変解決をサポートすることはしない。

6人は幻想郷でも飛び抜けた力を持つているが故に、不用意に靈夢達に干渉すれば、幻想郷の力のバランスが崩れてしまうことを紫に聞かされていたからである。

人と妖怪の力のバランスは常に一定でなければならない。

少しでも天秤が揺れようものなら、すぐさま崩壊に繋がりかねないのだ。

靈夢達は霧の湖の方向へ飛んでいる。

その通り道には、人里が見えた

剛「…二人は人里を通るようだ。この霧は人間に有害だろう。人里が危ない。」

彩「おそらくこれは魔力ですね。大きな障害にはならないはずですが、早急な対処が必要でしょう。」

将信「よし、なら二手にわかれよう。

ボクと：結衣、峠一緒に人里へ来てくれ。僕達は人里へ様子を確認するよ」

結衣「うん、わかつたわ」

峡「問題ない。急ぐぞ」

將信「つ、じやあ3人とも宜しくね！」

剛「ああ！まかせておけ」

6人は將信・峡・結衣Aと、一B『剛・華憐・彩』に分かれ、それぞれ異変の解決を陰ながら手伝うべく、持ち場へと大急ぎで向かつた

i n 人里

そしてaはbと別れた後無事人里へとたどり着いた。

恐らく峡の能力のおかげなのか、6人に病の症状は見えない。

將信「… つ… はあ…。皆さん大丈夫ですか⁈」

將信は息切れしながらも、人々の様態を確認する。

村人「俺は問題ない、しかし所々子供たちが熱を出している。永遠亭に運んだがパンク状態だ。なんとかしてくれ…」

村人2 「これはこの赤い霧のせいなのか?、博麗の巫女が早く解決してくれるとい  
が:」

村人達はパニックまではいかなくとも、非常に不安な様子である。

峠「…とりあえず將信と結衣は永遠亭の子供たちの手当てを頼む。  
能力を駆使すればなんとかなるよ。」

俺は子供たちを運ぶ。能力は6人が限界だから、頼む。なるべく急いでくれ  
將信「了解!」

結衣「わかったわ!」

將信と結衣は峠の言葉に何の迷いもなく頷き、全速力で永遠亭へとむかつた。

峠「…さあどうする。現代の博麗の巫女よ」

峠は聞こえないような小さな声で呟いた

永遠亭に数分で到着した2人は、その状態に啞然とする。

永遠亭の中はありとあらゆる人々で溢れかえっていた。

皆症状はまだ軽いようだが、霧は幻想郷中に散らばっているせいか、病人の数は並ではない。

さらに、子供ばかりか大人、老人まで魔力にやられているようだ。

鈴仙「御二方！ 永琳様がお呼びです！」

3人がその光景に目を見開いていると鈴仙は慌てた様子で2人を呼ぶ。  
あの永琳のことだ。氣で2人が来たことをこの状況下で察知したのだろう。  
2人は急いで永琳のいる治療室へと向かつた。

永琳「つ、いいところに来たわね。貴方達の能力で患者達は何とかならないかしら？」

症状の緩和は簡単だけれど、数が多くて治療が間に合わない。

「このままだと症状が重症化してしまうわ……」

（全く……誰よこんな異変を起こしたのは……！）

永琳は珍しく焦った表情で2人に問う

將信・結衣「まかせて！」

2人は大きく返事をし、患者達の元へと向かつた。

將信「よし、じゃあ僕の能力の強化を頼めるかい？」

結衣「うん……よし、これでどうかしら？」

——治癒能力を派生、「症状を操る程度の能力」——

將信「うん、大丈夫だね。これは結構便利だ……」

結衣「でしょ？でもその間元々の能力は使えないから、注意してね……。この能力、利便性が良さそうで悪いのよ……」

將信「了解：とりあえずやってみる」

結衣と將信は協力し、着実に人々をその能力で救つていった。

その後、能力の使いすぎにより疲れ果てた2人は、永琳から介抱されることになつた

## in 霧の湖

霧夢達は霧の湖の方向へ空を飛んで進んでいた。  
人間がまるで常識というように空を飛んでいるのに剛は違和感を覚えていたが。

そして突如、霧夢達の行き道を塞ぐようにアイツが現れた。

霧夢「……あんた誰?」

ルーミア「さつきあつたじやない。あんた、もしかして鳥目?」

霧夢「人は暗いところじやよく物が見えないのよ。」

ルーミア「あら、夜しか活動してない人もみるわ」

霧夢「それは取つて食べたりしてもいい人よ」

ルーミア「そーなのかー」

霧夢「……で、邪魔なんですけど」

ルーミア「貴方が食べてもいい人類?」

霧夢「良薬口に苦しつて言葉知つてる?」

そう、闇の妖怪ルーミアである。

封印したことで大きく能力は下がつてているようだが、

剛・華憐・彩  
3 人は無意識に臨戦態勢をと

る。

靈夢「… 良薬つていつても飲んで見なけりやわかんないけどね」

あつやられた。

弾幕ごつこの結果は瞬殺だ。

博麗靈夢は弾幕やお札を駆使してルーミアを一瞬で撃沈させた。

3人は思わず呆気に取られるが、同時に靈夢の動きに感心していた。まさに、蝶のように舞い蜂のように刺す…といった表現がぴったりだろう。弾幕ごつこに慣れているのか、落ち着いて相手の攻撃を対処できていた。これは鈴と比べても合格点だ。

3人は靈夢達が撃沈させていく妖怪や妖精を、靈夢達に悟られないよう安全な場所に寝かせ、再び靈夢たちの元へと向かつていた。

靈夢「… 原因はあの館ね」

靈夢の指さす先には、紅が貴重の大きな館が立っていた。

その中心からは何やら魔力が出ていることから、ここで間違はないだろう。

魔理沙「こんな所にこんな館があつたか？  
それにもしても趣味が悪いな……」

靈夢「知らないわよ。さつさと終わらせるわ」

剛「（よし、どうやら靈夢達はあそこへ潜入するらしい。俺と彩は引き続き靈夢達を監視する。華憐は能力で霧を遠ざけておいてくれ……もしもの時は頼んだ。）

彩「（了解しました。）

華憐「（わかつたわ）

小声で3人は話し合い、それぞれの役割を果たそうと別れた。

?? 「… 来ましたね。」

靈夢「あら、わたしは急いでいるの。魔理沙、後はお願ひね！」

靈夢は門番を無視して簡単に門を通り、扉へと向かう。

魔理沙「お、おい靈夢…。つて、相変わらず早いな……

ええい面倒くさい！マスタースパーク!!」

そういうつて魔理沙と呼ばれていた少女はスペルを宣言し、なにやら多角形の物体から極太のレーザーを発射した。

火力重視なのか単調な技だが、それなりに威力はあるようで地面が大きくえぐり取られている。

??? 「し、しまつた……」

門番の女性は直撃を免れたが、レーザーを躲した一瞬の隙に二人を逃がしてしまい、悔しそうに扉の方向を見つめている。

そして門番はようやくこちらに気づいたようだ。

剛を見て、臨戦態勢をとっている。

剛 「……」

剛は一步一歩、ゆっくりと扉の近くにいる門番に近づいていく。

??? 「紅 美鈴、紅魔館の門番として、侵入者を排除します！」

美鈴という女性は、すばやく駆け出し、剛に強いパンチを繰り出す。

剛 「……」

(ほう…… こいつも武道家か。筋が中々通っている……)

美鈴の一撃を、剛は軽々と片手で受け止める。

しかし剛はその攻撃に同時に感心している。

美鈴「ツ!?」

美鈴はその事実に驚愕しつつも、すぐさまバツクステップし、距離を取る。そう、美鈴が弱いのではなく剛が異質なのだ。

その証拠に美鈴が攻撃した場所の前方は地面が抉られている。そのおとこを除いては。

剛「… フン！」

剛はその直後、数m離れている美鈴に向かつて腕を大きく振り上げる。それは直接当たらなくとも大きな風圧を生み、永琳を吹き飛ばした。

美鈴「グッ！…」

美鈴は飛ばされつつも、咄嗟に受け身をとる。

所々打撲し青くなっているようだが、まだ戦うのには問題ないだろう。

美鈴「なら…！」

美鈴は近接戦では敵わないと思つたのか数多くの弾幕を放つ。

剛「…。」

剛は美鈴の弾幕を無表情で、さらに寸分の差でしつかりと躱しており、その表情から好奇心や余裕が読み取れる。

美鈴「くそ！背水の陣だ！！」

美鈴はさらに密度を高くし、剛を追い詰めようとする。

剛「…お前だけで陣なのか？」

剛はふと靈夢の真似をして、手先に靈力を集中させ、力を込めた。

美鈴「なっ・！！」

そして剛の手先から放たれたのは、巨大すぎる球形の弾幕だった。

その全長は紅魔館とほぼ同じサイズで、靈力がとても濃く密集しており、当たれば気絶どころか、低級の人妖なら死は免れない。

美鈴「くっ・・・つ・・・ハツ！・・・」

美鈴は弾幕の勢いに押される。

弾幕を球状の弾幕に向けてさらに靈力を強く集中させて放つがそれは無意味だった。

美鈴「ぐつ……」

剛「……」

美鈴は剛の弾幕により呆気なく氣絶したようだ。

彩「……私は必要ありませんでしたね。」

開始前から試合の行方はわかつていただろう、武器の状態の彩はつぶやく。  
それをよそに、剛は美鈴の首元に手をやり、脈を確認する……。

剛「……」

(脈は正常……と、完全に氣絶しているな)

そこで剛はようやく警戒を解き、近くの壁に美鈴を寝かせた。

剛「……さて。」

(正体がバレてなければいいが……)

剛は立ち上がり、また靈夢達の元を目指した

# 大図書の主と完璧で瀟洒な従者

魔理沙 side

靈夢に続き紅魔館の扉をくぐつた魔理沙は、その別れ道にあつた、大きな図書館にたどり着いた。

その中は非常に広く、様々な分野の本がズラリと並んでいた。  
普通の人間なら、一生をかけても読み切れないほどに。

そしてその奥には、ベッドがあり、そこで紫色の髪の少女が横たわっていた。

魔理沙「おお……本が沢山あるな。

……ツ!? 魔導書まで……後で、ざつくり貰つていこ」

魔理沙はその少女を無視して本に夢中だ。

パチュリー「持つてかないでー」

魔理沙「持つてくれ」

パチュリー「……」

パチュリーは魔理沙の言動に頭を捻っている。

パチュリ「ええーと、目の前の白黒を消極的にやつつけるには……」

魔理沙「…」

パチュリ「うーん、最近、目が悪くなつたわ」

魔理沙「部屋が暗いんじゃないか?」

「

パチュリは目を擦つている。

パチュリ「鉄分が足りないのかしら」

魔理沙「どつちかつつーとビタミンAだな」

パチュリ「それで…侵入者、貴方をこれ以上進めるわけには行かないわ。弾幕

「…つこ?で簡単に捻り潰してあげる…」

魔理沙「へえ…でもやつてみないとわかんないぜ?」

魔理沙は挑発するようにやりと笑い、指先を曲げつつ、再び箸に乗る。

その言葉にパチュリは

パチュリ「…火符 アグニシャイン」

無表情でスペルを唱えた

魔理沙「いきなりかよ……！」

パチュリィが描く魔法陣からは、ランダムに炎の弾幕が拡散する。どうやら本物の炎らしく、炎が近くを通るととても熱い。

あまり凝つていならしく、魔理沙はその弾幕をもろともせず簡単に回避する。

魔理沙「だが、まだまだ甘いな」

弾幕が終わると魔理沙は箒を止め、ポケットから一枚のスペルカードをとりだした。

魔理沙「次はこっちの番だぜ！ 魔符 スターダストレヴアリエ！」

魔理沙の使用したスペルカードからは、星型のきれいな弾幕四方八方が放たれる。

その弾幕は綺麗に整っている、威力よりも見た目を重視したのだろう。

その攻撃をパチュリィは魔法による防壁を駆使し何事もなく回避する。体が弱いのか動きは靈夢に比べて鈍いように見える。

パチュリィ「あら？ いつ私が本気だといったのかしら

金&水符 マーキュリィ・ポイズン

金・水のスペルの合わせ技、黄色と水色のほぼ同じ大きさの弾幕が魔理沙に向かつて

大量に降り注ぐ。

追尾機能もなく特に凝っているわけではないが、密度が濃いためか荒っぽい魔理沙はどうも苦手らしい。

その証拠に腕や足にはかすり傷ができていた。

魔理沙「？：くそ！なら全部吹き飛ばす！」

等々痺れを切らしたのか、

魔理沙は隙を見つけまたあの多角形の何<sup>八卦路</sup>かをとりだし、スペルを唱えた

魔理沙「恋符 マスタースパーク!!」

魔理沙は靈力を思い切り八卦路に、込めてパチュリーの弾幕を焼き付くし、さらにパチュリーに光線が向けられた

パチュリー「ツ！日符ロイヤルフレア」

パチュリーは一瞬焦った表情を見せるが、即座に対応し次なるスペルを唱えた

そのパチュリーからは周りを吹き飛ばすような爆発音と共に豪快な弾幕が放たれる。そしてロイヤルフレアはマスタースパークを相殺した。

魔理沙「なつ：！？」

(私の最大威力のスペルが：！)

魔理沙はその事実に焦りを見せる。

パチュリ「そこよ！木符 グリーンストーム」

パチュリはその表情を見逃さずさらにスペルを唱えた。恐らく魔法の熟練度ならばパチュリが上なのだろう。

だが体力が限界なのか、アグニシャインと同レベルの少し弱いスペルを放つた。

魔理沙「くそ……まずい」

グリーンストームは名前の通り自然をイメージしたスペルなのか、弾幕は奇想天外な動きをする。

魔理沙にとつてはとても相性の悪いスペルだ。

魔理沙「……！」

(マスパが使えたら……)

グリーンストームにより少しづつ魔理沙の体力が蝕まれていく。

その時、辺りを轟音が包み込んだ

ドゴオオオオオオオオオ

パチュリ「……なつ！」

(この靈力は……こんなもの受けたら紅魔館が消滅する……!?)

魔理沙「!?  いまだぜ！」

魔理沙は困惑しつつも、

パチュリ一のその一瞬の隙をついて自身の魔力をすべて込めて、パチュリ一に無数の弾幕を向けた。

パチュリ一「し、しまつ！」

結果は魔理沙の勝利となつた。

だが魔理沙は大きく魔力を消費してしまい、どうやらもう動けないらしく、筹からゆつくりと、倒れ込むように近くの壁に魔理沙はもたれかかつた。

魔理沙「魔法が得意らしいな。まだ隠し持つてるんじやないのか？」

パチュリ一「貧血でスペルが唱えられないの……」

お互に体力切れ。息を切らしながら魔法を学ぶ者同士話していた。

魔法の知識や技術の差では圧倒的に魔理沙がパチュリ一より未熟であつたが、運が良かったのか、接戦の上パチュリ一は敗北となつた

パチュリ「…」

(レミイ、咲夜、ごめんなさいね… それにしてもあるの音は…?)

魔理沙「…」

(危なかつた… 霊夢は大丈夫なのか…?)

|||||

靈夢 side

靈夢「面倒くさいわね…」

一方靈夢は、行方をとある者に阻まれていた。

靈夢は珍しく敵に苦戦しているように見える。

靈夢と対峙しているのはメイド服を着た、靈夢よりやや身長の高い少女だった。

その少女は両手に指と指の間に挟むようにナイフを持つている。

そして縦横無尽にナイフを靈夢に向け放つ。

その腕は達人物で、とてもメイド服とは似合わない。

咲夜「… お嬢様に忠実に従える完璧な従者として、貴方を通すわけにはいかないわ

ね」

咲夜「スペル宣言…幻世 ザ・ワールド」

その瞬間、咲夜以外の時が止まつた

咲夜「…」

(まつたく… 掃除の邪魔をしないで欲しいわね… 博麗の巫女は私の種を見抜けるのかしら。)

この後の展開を予想しつつ、咲夜は着々と無数のナイフを設置する。

咲夜は時間を操るという強力な能力を持つている。

しかし時止めの能力は当然靈力の消費が大きい。

故に能力が暴走すればどうなるのか、考えれば恐ろしいものだ。

時を止めた世界は孤独な世界。精神が特に丈夫でなければ続かないだろう。

咲夜「… そして時は動きだす」

咲夜が指を鳴らすとともに、時は動き出した

靈夢「… ちつ」

靈夢は思わず顔を歪め舌打ちをする。

それも仕方が無いことだろう。瞬きをすれば目の前に無数のナイフがものすごい速さで向かってくるのだ。

それに咲夜はまつたく検討外れの場所にいる。

それは脆い人間には大きすぎるほど恐怖を抱かせる。

靈夢「…」

(瞬間移動能力…？それとも時を止めるのかしら。)

だが、流石博麗の巫女だ。

一瞬で弾幕パターんを予測し的確に、かつ最小限の動きで躱し、時には自身の弾幕でナイフの勢いを止め、ナイフの攻撃を防げている。

靈夢・咲夜「…」

時には肉弾戦も始まる。

靈夢はお祓い棒、咲夜は両手にナイフを持ち互いに攻撃する。

その場はナイフとお祓い棒が交差する音だけが響く。

その場は戦闘中とは思えないほど空気が冷えきっていた。

咲夜「… やるわね。でもこれはいかが? 幻幽ジャック・ザ・ルトビレ」

咲夜は余裕の表情を見せ、距離をとつてスペルを宣言する。

しかしその表情は少し強ばつていた。

そもそも咲夜は戦闘経験が少なく、これほどまで自身を苦戦させた敵は初めてなのだ。

それにその敵が博麗の巫女となれば尚更だ。

そのスペルを宣言した瞬間、咲夜の近辺から3つの方向に向けて大量のナイフが出 現、大きな赤い色の靈弾も発射された。

そしてそこで靈夢も殺気を込めつつ、始めのスペルを宣言する

靈夢「：舐めないでくれる？ 夢符 封魔陣」

靈夢の周りからは大量の密度のとても濃い弾幕が放たれた。

互いのスペルはぶつかり合い、大きな煙幕と爆風とともにお互いのスペルは相殺され た。

咲夜「クツ…」

咲夜は思わずマズイと直感し時を止める。

そして体制を立て直すべく足を動かそうとしたが…

咲夜「えつ… お札… !？」

咲夜の足元にはお札が絡みついていた。それは咲夜の行動を阻止する。そしてその現象に咲夜は表情が強ばり、緊張がさらに高まつてくる。

咲夜は理解した。

靈夢はあの煙幕の時に、昨夜の足元にお札を設置していたのだ。

咲夜「ならば……ツ!?」

今度こそ咲夜は大きく驚愕する。

咲夜はお札を切るべくナイフを取り出そうとポケットに手を入れようとする。

がその瞬間、咲夜の手にお札が貼られた

そして思わず咲夜は膝をつく。

靈夢「… かかつたわね。降参しなさい」

靈夢はトコトコと歩き、咲夜の目の前にお祓い棒を向け、降参の意を求める。

咲夜「何故… よ。予測できたのは流石だつた。けれど、なぜまた時動き出したのか

サツパリ」

靈夢「あら、お褒めに預かり光栄ね、完璧な従者さん。

種は単純、そのお札は徐々に靈力を吸い取るのよ。  
あなたもう立てないでしょ？靈力が尽きているわ。

それにスペルの使いすぎっていうのもあるわね。貴方も人間だから、靈力はさほど多くないでしょ。

要は経験の差ね』

靈夢は一息つき、咲夜に軽く説明をする。

咲夜「……それはもはやお札なのかしら。

……はあ……完敗よ。お嬢様に怒られちゃうわね……。お嬢様はあちら側にいらっしゃるわ……。お嬢様は強いわよ？」

咲夜はため息をつき、両手をあげて降参を示す。

そしてレミリアのいる方向を靈夢に伝えた。

そこに嘘偽りは見えない。それが幻想郷のルールである。

靈夢「そんなの知らないわよ。洗濯物が乾かなくて迷惑なの。さつさと霧を止めさせるわ」

靈夢は咲夜にはりついていたお札を剥がし、レミリアの元へと向かつた。  
咲夜も思わず地に手をつき、休憩している。

咲夜・靈夢  
といいけど)

(そういえば、あの靈力は一体誰の物なのかしら…：面倒な事にならない

# 喧嘩と仲直り

剛・彩 side

2人は美鈴を撃沈させたあと、紅魔館の長い廊下を気配を殺しながらゆつくりとした足取りで歩いていた。

彩「（本当に…氣をつけてくださいね。絶対皆さんに感づかれてますよ…）」

剛「す、すまない」

（これで何回目だ…）

武器化している彩に、剛は力の制御について説教をくらつている。

それは無理もないだろう。幻想郷の中でトップの実力の持ち主として、力の加減を間違えばこの世界を滅ぼしかねないのだ。

現に、美鈴と戦った際に剛が放つた球状の弾幕の一部は、建物の隅を大きく抉りとつていた。

美鈴と戦った場所が屋外だったから良かつたものの、これが室内であれば紅魔館自体が消滅してもおかしくはなかつたはずだ。

2人がそのままゆっくりとレッドカーペットが敷かれた廊下を歩いていると、隣の扉

から靈夢が出てきた。すぐさま剛は近くの物陰に隠れ、靈夢の様子を見る。

剛「…。所々傷はあるが、別に体調は大丈夫な用だな。致命傷もない。」  
剛は小声で呟いた

彩「（ええ…）恐らく戦闘があつたんでしょう。

靈力をある程度消費していますが、特に問題ない量ですね。

異変のボスがどれほどの方なのかわかりませんが、恐らく大丈夫でしょう」

剛「…どうする？手を貸すか？」

彩「…まだ様子を見ましょう。いざとなれば私が靈夢さんをサポートします。…

剛さんはその辺で見といてください」

彩は人間の姿に変化しつつ、ジロつと剛を見て答える。

剛「お、おう、」

剛はどこか將信と似た態度に苦笑いを浮かべる。

2人は靈夢の後をつけていった。

靈夢はメイドとの戦闘後、メイドに教えられた場所へと到着した。

靈夢「そろそろ姿を見せたら？　怖い怖いレミリアお嬢様」

レミリアは姿を現す。

少し高い場所にある窓の近くにある椅子にレミリア・スカーレットは座つていた。

レミリア「人間の咲夜を負かす人間がいるとは驚きね。まあその運命は知つていたけれど」

レミリアはやりと笑つている。

靈夢「それはどうも」

(運命…ね。未来予知の能力か何かかしら)

レミリア「これであなたは殺人犯ね？」

靈夢「殺していないわよ。それに1人だけなら大量殺人犯じやないからいいの。」

レミリア「…で？」

靈夢「ああ、そうそう。迷惑なのよ、あんたがね」

レミリア「短絡ね。それに理由がわからないわ」

靈夢「とにかく、ここからさっさと出ていいつてくれないかしら？」

靈夢は面倒くさそうに頭を搔きながらレミリアと対峙する。

レミリア「ここは私の城よ。出ていくのはあなたではなくて？」

靈夢「あら？ 何を言つてるの。私はこの世から出て行つて欲しいと言つたのよ」

レミリア「ん⋮⋮ ならしようがないわね。今お腹いっぽいだけど⋮⋮」

レミリアは椅子から立ち上がり、背伸びをして羽を広げる。

靈夢「護衛にあのメイドを雇つていたんでしょう？ そんな箱入りお嬢様なんてきつと一発で沈んじやうわね」

レミリア「咲夜は優秀な掃除係。首一つどころか血一滴すら落ちていないわ。」

靈夢「見たところあなた吸血鬼でしよう？」

ひよっこ吸血鬼さんはどれくらい強いのかしら」

レミリア「さあ⋮⋮ あまり外に出してもらえないのよ。吸血鬼だから」

靈夢「⋮⋮ 中々楽しくなってきたわね」

お互いは口を三日月のように釣り上げ笑みを浮かべている。

レミリア「こんなに月も紅いから⋮⋮ 本気で殺すわよ」

靈夢「こんなに月も紅いのに」

レミリア「楽しい夜になりそうね。」

靈夢「永い夜になりそうね」

そして、戦いの火蓋が切つて落とされた

⋮  
かと思われた。

その直後、靈夢とレミリアに向かつて突如炎の弾幕が放たれた

靈夢・レミリア「ツ!？」

靈夢とレミリアは即座に反応し、数々の弾幕をなんとか回避した。

不意打ちだつたためか所々互いに掠つてゐる。

2人は思わず弾幕の降つてきた方向を見る。

靈夢「⋮ 誰よ、今から弾幕ごっこを始めるつていうのに⋮」

?? 「貴方、人間??」

どうやら弾幕を放つた少女はこの子の用だ。

レミリアと同じようなドレスを来ており、身長も大差はない。  
しかし背中からは奇形とも言える形の羽が生えており、なにやら七色の宝石のような  
ものがぶら下がっている。

レミリア「：ツ！ フラン・： 今すぐ地下に戻りなさい」

レミリアは焦った表情でフランに強い口調で命令する

霊夢「フラン？」

レミリア「： フランドール・スカーレット。私の妹よ。地下にしばらく幽閉してい  
たの」

レミリアは唇を噛み締めて霊夢の質問に答える。  
その唇からは微かに血が垂れていた。

フラン「495年間、私はずっと暗いお部屋から出てないの。でも、今日面白そうなオトが聞こえてきた。だから出てきたわ」

靈夢「ははあーん、なるほどね。それで、何でフランドール？を幽閉したのよ」

レミリア「フランは情緒不安定な上能力があの子にとつては強すぎるわ。それにまだ

フランは子供。外に出させるわけにはいかないのよ」

靈夢「… フフ、あんたとそう変わらない気がするけどね。」

レミリア「…」

フラン「ねえ、だから、私もアソビに混ぜて欲しいな」

靈夢「… 別にいいわよ。何をするの？」

靈夢はフランの言葉を断らなかつた。

レミリア「ツフランと戦うのはきk」

(そんなことしたら皆殺されるかも知れないのに… 狂気が暴走したら終わり)

フラン「弾幕ごっこ！」

靈夢「ああ、パターん作りごっこね。私の得意分野だわ」

フラン「やつた！ ジヤあ。いくわ

『禁忌 フォーオブアカインド』

フランのスペル宣言の途端、フランの姿は4人に増える。

フラン 「「「さあ遊びましょう?」」」

靈夢 「……幻覚魔法でも扱えるのかしら」

レミリア 「……これは幻覚じやない、全て現実よ。言つたじやない。フランは本当に、危険よ」

靈夢 「はあ……流石に鬼畜……ね!」

そして4人のフランからはそれぞれ小さな粒弾が不規則に放たれる。

それぞれは小さいものの物凄い速さで放たれており、さらに密度も濃いためそこらの弾幕ごつこになれていない妖怪では一瞬で身体中が穴だらけになるだろう。

なんとか2人はスペルを使うことなく躲せていた。

フラン 「「「キヤハハ!!お姉様も巫女も凄いね!!じやあ、これはどう?」」」

フラン 「『禁弾 スター・ボウブレイク』

靈夢 「それは流石にマズイわね：しようがないわ 『夢符 封魔陣』」

レミリア 「くつ……『紅符 スカーレットシユート』」

吸血鬼は幻想郷でもトップの速さを持つ種族だ。

その吸血鬼のレミリアでさえも、フランの弾幕は余りにも速すぎた。  
靈夢とレミリアは躲しきれないと即座に察知し、スペルカードをほぼ同時に宣  
言。

なんとかスター・ボクブレイクを乗り越えようとしている。

靈夢「ちよつと！誰だか知らないけどあんたら!!隠れて見てるだけじゃないで手伝い  
なさいよ!!」

そして弾幕を避けている中、突如ドアの近くの机の近くに向けて靈夢の怒声が放たれ  
た。

剛 「…バレたか」

彩 「当たり前でしよう…」

二人は渋々靈夢達の前に現れた。

それはレミリアも勘づいていたようだ。

この戦闘の場でその事実を知らなかつたのはフランだけだろう。

フラン「あなた達も遊んでくれるんだ!!これでもつと面白くなる!!」

剛 「…こりやあ参加しないとおさまらないようだぞ。」

彩「、仕方ないですね。バレてしまつた以上我々も多少関わつてしまいますが……く  
れぐれも手加減してくださいよ」

剛「大丈夫だ。絶対……多分……きっと……もしかしたら……」

彩「……」

彩はどこか信頼できない表情で剛を見る。

彩「では、我々は靈夢さん、レミリアさんに助太刀しますね。そうすれば4vss4、公  
正でしよう?」

彩「……それでは、スペル宣言『静止 0の動き』」

彩がスペルを宣言した途端、靈夢、レミリア、フランの弾幕全てが動きをほぼ止めた。  
それは粒弾から大きな弾幕、お札関わりなくすべてだ。

3 粒弾・  
靈夢・  
レミリア・  
フラン  
人 「……え?」

思わず3人は驚愕する。

スペルの性能は理解できるとして、4人のフランを含めれば6人。

6人の強者の弾幕を一瞬でほぼ静止させたのだ。

その力が並でない事はその事実から痛いほどに理解してしまつ。

おそらくその力は大賢者の八雲紫をも超えるだろう。

彩「……じゃあ後はよろしくお願ひしますね」

剛「おう。　⋮　ハツ!!」

剛は両腕を前に突き出し、靈力を手に集中させ能力を使用した。  
その後弾幕達は静止していたにもかかわらず、急に高速でフラン達に向かってい  
く。

剛は靈力を駆使し弾幕の向かう方向をねじ曲げた。

そらはあらゆる法則を無視するに等しく、剛らしいなと思つた彩は苦笑いを浮かべ  
る。

だが何故か弾幕の攻撃対象に靈夢、レミリアも対象に入つてゐるようだ。

靈夢「ちよつ味方でしょ!?」

レミリア「ツ余所見してゐ暇はな無さそうよ」

2人は自身の弾幕を躊躇すのに必死なようだ。

フラン「凄い凄い凄い!!じやああたしは本気出すね!　『禁忌　レーヴアテイン』

フランはフォーオブアカインドを解除し、大きな炎の剣、レーヴアテインを出現させ、  
縦横無尽に振るい弾幕を溶かしている。

流石のフランでもフォーオブアカインドとあれほどの大きさの剣の両立は出来な  
かつたのだろう。

レミリア「…負けてられないわね。『神槍スピア・ザ・グングニル』レミリアはにやりと笑い、フランに負けじと、すさまじい神々しさを放つ槍を振り回し、弾幕を消し飛ばしていく。

二人の吸血鬼姉妹はどうやら勝手に仲直りしたらしく、二人共ニコニコした表情で弾幕ごつこを楽しんでいるように見える。

靈夢「…ああもう！『靈符夢想封印』」

靈夢は理不尽な攻撃の中スペルを宣言した。

靈夢の周りからは七色の大きな靈弾が出現し、剛達へと向かっていく

剛「なんか、俺達の方向へ矛先が向いていないか？」

彩「知りませんつ：よ。まあ吸血鬼達は楽しそうだしいんじやないですか？」

彩は攻撃を躊躇しながら剛と会話する。それほど余裕の戦いなのだろう。

剛「…つまり？」

彩「…もうやつちやつてください。殺さない程度に。正直、私もう眠いんですけど

よ」

剛「たしかにもう子供は寝る時間だな。」

剛はくつくつとからかつた子供のような表情を浮かべる。

彩 「…。」

剛 「すまんすまん。」

剛は苦笑いする。

剛 「… では… ほい」

剛は能力を使用した。

靈夢 「… 何… を」

靈夢は急に体中から血の気が引いて行く感覚を覚え、あつという間に地に倒れ伏せた。

レミリア 「ち、力が…」

フラン 「… もう終わっちゃうの… 残念」

レミリアは意識が薄れる事にしばらく抵抗しようと試みたが、それも虚しく近くの壁にもたれて気を失う。

フランは抵抗すること無く、レミリアの隣によりかかり、レミリアの肩に頭を預けた

彩 「…。 終わりましたね。」

剛 「… こう見たらただの子供たち… なんだけどな」

彩 「あなたも対して変わらなく見えますよ？ 本当の年齢は別として」

剛 「それはお前もだろう？」

剛・彩 「… フフフ（ハハハ）」

そこには静かな笑いが漏れた。

剛 「霧はおさまったか？」

彩 「ちよつとお待ちを… ええ、徐々に引いていっていますね。取り敢えず人里

に向かいましようか」

剛 「ああ、そうだな」

――――――――――――――――――――――――

s i d e 華憐

華憐 「うーん… なかなかキツイわね。」

いくら華憐とはいえ長い時間霧の侵入を抑えることは大きく力を消費する。

華憐もそろそろ限界が近づいていた。

?? 「おーい、大丈夫？」

華憐 「…？」 つて峠ね。」

峠 「何その反応…まあいいや。手伝うよ」

華憐 「恩に着るわ。結衣達は？」

峠 「永遠亭で治療を頼んでいるよ。僕はある程度役目が終わつたから様子を見に来た

んだ」

華憐 「そう…早く終わるといいけれど」

峠 「ところで華憐は何で1人なの？剛達も一緒にはずだけど」

華憐 「私はここで霧を抑えるよう言われたのよ。扱いが雑だと思わない？」

峠 「アハハ…大変だね」

華憐 「まつたくよ…帰つたら説教ね」

「十数分後」

華憐 「あつ…霧がひいてるわね」

峠 「ん、そうだね。じやあもう大丈夫かな」

華憐 「ええ…取り敢えず人里に向かいましよう。剛と彩もそつちに行くと思うか

ら」

峠 「了解、そうしよう。僕は永遠亭にふたりを迎えて行つてくるよ」

華憐 「わかつたわ。じやあまた」

## 結末と宴会

s i d e 靈夢・魔理沙

6人は異変が解決された後日、博麗神社へと集まつた。

6人以外の、靈夢や魔理沙、紅魔郷メンバーは勿論虫の妖怪や妖精なども交え紅霧異変の終末を祝うため宴会を行うようだ。

博麗神社を囲むように生えていた木の中には桜の木もあるようで、靈夢達は綺麗な桜を傍に花見をしつつ宴会を行つてゐる。

靈夢「本当に、あれは異変解決つて事でいいのかしら」

靈夢はどこか納得がいかないように言葉をもらす。

魔理沙「今更じやないか？まあ宴会は楽しいからいいんじやない」

桜の木の下で2人はリラックスした表情で座り、お酒を飲みながら一息ついている。博麗神社の近くでは妖精達が騒ぐ様子が良く見える。

酔つ払う天狗や音楽を引いている騒靈、どれも楽しそうだ。

靈夢「まあ、そうね。何だか今回の異変は凄く疲れたわ‥‥あの6人の人たちは何者なのかしら。

だつて私達まとめて氣絶させられたのよ?

正直私なんかよりもよほど強いと思うわ。」

魔理沙「へえ、あいつらそんなに強いのか。

(後で色々聞いてみよう‥‥)

ところで、靈夢は料理を作らなくていいのか?」

よ」

靈夢「料理? ああ、料理ならあの剛とかいうガタイのいいやつが勝手に作ってるわ

靈夢は博麗神社の厨房を指差した

s i d e 剛・峠

剛「作つても作つても終わらないじゃないか‥‥」

剛は似合わないエプロン姿で、料理を振る舞うべく必死だった。

峡「剛も大変だね……まだ疲れてるでしょ？」

峡は神社の縁側でお茶を飲みながら桜を見ている。

峡は猫舌だからか、時々お茶に息を吹きかけつつ、少しづつ飲んでいく。

穏やかな春の陽気は眠気を誘うようで、近くにいた結衣はウトウトしている。

剛「まつたくだ……そもそも宴会など行きたくはなかつたんだが……紫に言われて

は仕方が無いだろう。」

剛は魚を包丁の背で叩きつつ厨房から峡と会話する。

数え切れないほどの時を生きた彼の料理は日々上達していた。

咲夜「あら、お手伝いしますわ」

そんな事を話していた時、

いつのまにか剛の傍には咲夜が立つており、包丁を手に取り慣れた手つきで近くにおいてあつた食材を切っていく。

剛「……お前はレミリアに仕えているらしいな。せつかくの宴会なんだ。たまには休んだ方がいいんじやないか？」

人間で、まだ20にもなっていないんじやなあか？」

咲夜「…どうも癖なのよ。むしろ何かするべきことがないと退屈過ぎてどうかなりそうだわ。」

咲夜は野菜の皮を剥きつつ剛と会話する。

剛「職業病つてやつか？」

咲夜「そうかも…ね。」

ああ、そう。一応、お嬢様に代わって、今回の異変の事、改めて礼を言つておくわ。」

咲夜はペコリとお辞儀をした後、庭の様子をちらつと見る。

レミリアとフランが太陽の下きやつきやと遊んでいる様子に癒されているようだ。  
料理を作る合間にもレミリア達の様子を伺っている。

（咲夜は心配性なんだろう。これほどの美人なら言い寄つてくる人も多いんだろう  
が…）

なんてことを剛は考えつつ、そして剛も咲夜につられて、レミリア達の様子を伺う：

剛「…ああ、仲直りできたようでなにより…つて、あいつら吸血鬼だよな！太陽

出てるが大丈夫なのか?」

峡「んあ、それは僕が日光反射してるから大丈夫だよー」

峡は縁側から少し声を張り上げて剛の問いに答える。

剛「そ、そうか?」

剛はその言葉に安心したのか、また咲夜と共に料理を作り始めた

場面は変わつて、一方將信は妖精達やフランと遊んでいた。いや、絡まれていた。

チルノ「までー!逃げるなあー!」

將信「まだ死にたくないんだけど!」

チルノ「アイシクルフォール!!」

將信「いつたあ!?

將信とチルノに続き、ルーミア、大妖精など、寺子屋の生徒達が中心のようだ。その中にはフランも時に混ざつて遊んでいる。

あの弾幕ごつこの時の表情とは打つて変わつて、それは見た目相応の子供らしい笑顔だつた。

妖怪は成長が遅い。

人間にとつて495年は長い長い時間かもしれないが、妖怪にとつてはまだ短い時間なのだろう。

実は將信は生活費を稼ぐため、まだ短い期間だが、寺子屋で上白沢慧音の手伝いをしていたのだ。

寺子屋で生徒達に直接、歴史などの授業をする事もあり、人里では特に顔が広いのだろう。

いつも触れ合っているからか、將信も生徒達も打ち解けていた。

剛「おおーい將信!。一度集まるから来てくれ!」

剛は手を口に当て、大声で將信や妖精達に向かつて叫んだ。

將信「う、うーーん。妖精達が……。

峡、助けてよ~」

将信はお茶を啜つている峠に向かつて助けを求める。

峠「… しようがない。『展開 ミラーウォール』」

スペル宣言の瞬間、妖精達の周りに靈力の壁が出現し、チルノの弾幕を跳ね返す。その壁は触れることが出来る。

さらに、どうやら靈力が高くないとその壁は見えないらしく、妖精達は何度も壁に頭をぶつけ鼻を抑えている。

チルノ「くつ… 覚えてなさい！次は逃がさないわ！！」

チルノは諦めたのか、悔しそうに叫びながら何かを言つてはいる。

将信「ゞ、ごめんね！」

（ほんとに、無邪気な子だなあ…）

将信は苦笑いしながら剛達の元へと向かつた。

将信「助かつたよ… ありがとう峠」

峠「気にしないでいいよ… それで剛、何で6人を集めたのさ。せつかくの宴会なんだからゆつくりしようよ」

6人は神社の中にある和室でちやぶ台を中心に円を書くように囲み話している。

剛「いや… 宴会もほどほどに、異変の事と今後を話し合つておかないと思つてな。ほら結衣も起きろ」

結衣はまだ寝かせてと言いそうな顔で、目を擦りながら起きる。

華憐「ふーん… それで、まずは何をするのかしら?」

剛「まずは今回の異変についてまとめる。

異変主犯はレミリア。

動機は昼間でも外に出られるようにするためだ。

その際に幽閉していたフランと… まあ喧嘩のようなものをしていたが、無事に仲直りできたらしい。

じやあまづはそれぞれ役割を果たせたか報告してくれ

剛は腕を組み、5人を見渡しながら話す。

結衣「じやああたし達からね。あたしたちは峠と別れた後、永遠亭で魔霧にやられた

病人達を介抱していたわ。私の能力で將信の治癒能力を強化させたの。そうだよね?」

將信「うん。まあ終わったあと寝ちゃつて永琳に怒られたけど……」

將信の結衣はお互いを見合させて苦笑いを浮かべている。

剛「なるほど。今患者達はどうなつたんだ?」

將信「幸い皆重症にはなつてないよ。最も症状が重かつた人でも入院しなくても大丈夫といつたほどだからね。」

剛「……なるほど、わかつた。じやあ次に峠と、華憐頼む。」

峠「了解。僕は結衣達と別れた後ひたすら病人を運んでいたよ。そして運び終わったら華憐と合流して人里へ向かつたつて感じ。」

パニックを抑えるのが本当に大変だったよ……」

華憐「次はわたしね。私は剛と彩と別れた後に霧が剛達に影響を及ぼさないように紅魔館の側から抑えていたわ。後は峠の説明と同じよ。特に異常もなかつたわ。」

剛「わかつた。じやあ俺と彩の事でもだが、簡潔にいえば巫女達が異変解決するのを見守つていた。最後はバレてしまい、強引な手を使つて場を治めたが……まあ結果的には大丈夫だろう。」

彩「剛さんは間接的どころか、直接的にかかわりすぎですよ……。というか最初からバレちゃつてますしね」

剛「…」

極は彩の言葉に何も言い返せない様子だ。

峠「みんな役割を果たさせていたようだね。

ところで今日は永琳達はいないの？」

將信「一応月から隠れている身だからじやないかな？」

峠「なるほどね…。月人たちまだ諦めていらないのかな？」

彩「実際、結界の周りには2重に結界が展開されているので侵入される事はないと思  
いますよ。まあ念には念をいれておいたほうがいいでしよう。」

剛「えーこほん… 話を戻す。次に話し合いたいのは今後どうするかだ。引き続き6  
人での行動にするか、それぞれバラバラになるか…。」

華憐「それは、別に何も考えないで今まで通りでいいんじゃないかしら？あなた達が  
バラバラになつたら絶対に何かやらかすわよ」

彩「ですね、危険です。幻想郷にとつても危険です。」

結衣「あははは！本当に3人共信頼されてないんだねー」

峠「信用ないな… 僕達」

將信「だね」

剛「・まあとりあえず6人で行動で決定だな。次はどこへいく? ずっと人里にいるのもあれだろう」

将信「僕は取り敢えず妖怪の山に行つてみたいなあ。鬼達が地底に行つたつて紫が言つてたよね? あの後どうなつたか見てみたい。」

峠「すっかり忘れてた・・・いいんじやない?」

結衣「私もいいと思うよ。」

華憐「別に問題ないわ。」

剛「俺も賛成だ。腕がなるな」

どうやら、賛成意見がほとんどのようだ、

彩「私も賛成・・・ですが、少し殿方にお願いしたいことがあります。」

3人「なに? (なんだ?) (ん?)」

3人は揃つて疑問を浮かべる。

彩「妖怪の山へ行く前に、飛行する練習や弾幕の修行をされではいかがでしょうか?」

やはり飛行できないと不便でしょ? 」

弾幕ごつこのルールにもなれておかなければなりませんから」

彩はキリツとした表情で3人の顔をしつかりと見て話す。

剛 「そう言わればそうだな。」

将信 「むしろ今までなんで飛ぼうとしなかつたんだろう……」

峠 「うん、じゃあそれで決定かな。皆賛成しているようだし……。」  
峠はあくびを浮かべ、背伸びをしている

剛 「了解。詳しい日程は家で。

じやあこれにてお開きだ。各自宴会を楽しんでくれ」

## 計画と自然

宴会が終わつて数ヶ月。枯れ葉が目立つてきた。  
すっかり女性陣も人間の姿に慣れたらしく、今では必要時以外は人間の姿で日々を過ごしている。

まだ華憐や彩は人里の人々に対する警戒心を多少持つてゐるようだが、最初に比べればそれも緩まつた。

勿論3人も長い間幻想郷で暮らし、ここの人々をある程度信頼してゐる。

この数ヶ月3人は飛行練習はもちろん、弾幕ごっこになれるため、武器達との合同練習を行つていた

蝉の鳴き声が止み、少し肌寒くなつてきた頃、ある程度準備を整えた6人は妖怪の山へ飛んで向かつていた。

日の出は既に終わつてゐる。

おおよそ現在は10時辺りだろう。

6人は能力を駆使し、靈力を惜しげもなく使つてゐるせいか天狗を上回るほどの速さをで妖怪の山を目指している。

もはやこの力強さや素早さは、6人に敵なしともいつたほどである。そして妖怪の山に、特にトラブルもなく6人は到着した。

將信「よつ・・・と。やつぱり飛ぶのつてほんと楽だね」

将信はまだ慣れないのか少しバランスを崩しつつも、山の麓に無事に着地する。

剛「ん・・・たまには走ることも大事だ。筋力が落ちるぞ?」

將信「わかってるよ。んじや皆の姿は見えないようにするから・・・後は計画通りね」

5人「了解」

將信は能力を駆使し、周囲を警戒していた天狗たちの視覚・聴覚を操り、6人の姿を見せないようとした。

將信「よし、これで大丈夫だよ」

剛「・・・進むぞ。」

結衣「(おー・・・)」

それぞれは小声で話し周りを警戒しつつ、森の中へと進んでいつた

夏の終わりかけ（2ヶ月ほど前） in 家

峠「それで、將信は妖怪の山に行つて、具体的に何がしたいんだい？」

6人は家に全員集合し、妖怪の山へ行く目的や手段について話し合っていた。

將信「具体的に……っていうのは難しいかな。鬼がいなくなつたあと天狗達の様子とかを見たいとか・単純な好奇心だよ」

剛「ふむ。じゃあ、とりあえず目標は山への侵入という事でいいか？その後は將信にまかせる」

將信「うん、それが嬉しいかな。出来れば天狗達にそこで地底への行き方も聞けるといいんだけど……鬼は上司だろうしね。」

彩「ちょっと質問いいですか？　なんの計画もなく突入するのはちょっと危険だと思いますよ。」

一応天狗は幻想郷でもレベルの高い種族ですし、バレてしまえば騒動に巻き込まれか

けません」

結衣「ふつふつふ… そういうと思つて、さつきにとりに光学迷彩を借りてきたの  
さ…」

結衣は自慢げな顔で、ない胸を反らせている。

峠「これって確か敵から見えなくなるってやつだよね」

そして結衣は6人にそれぞれの分の光学迷彩スーツを手渡した

華憐「…へえ、ちゃんと出来てるのね。この時代にこんな技術を持つているなんて

驚きだわ」

華憐はスーツを触り、触り心地などを確認する。その目は僅かに見開いているようにも見える。

将信「ほんと、河童の技術には驚かされてばかりだなあ、」

6人は河童の技術に感心しつつ、それぞれ別れて服を試着する

そしてそれぞれ、スーツを試着しました集合した。

数日前

峠「着心地もなかなかだね……でもさ、これお互の姿も見えないんじや……」

華憐「確かにそうね。私達が武器化して進んだとしても、どちらにしろぶつかつちゃうわよ」

全員しつかり透明化出来ているが、同時に味方の姿も全く捉えられない。

勝手に襖が開いたり煎餅が宙に浮き無くなっていく。

事情を知らない人間から見ればそれは恐怖の対象でしかないだろう。

光学迷彩を着て山へ行くのは、一人なら問題なかつたのだろうが、今回は6人の集団で挑むのだ。

その為気配を消せば完全に互いの位置がわからなくなってしまい、危険である。

將信「ボクの能力を使つて互いを可視化させてぶつかる事を防げるけど、それはダメなの?」

剛「なるほど。だがそれだとお前は相当疲れると思うぞ?」

何せ多くの天狗の聴覚、そして私達の視覚を操るわけだならな。相當な力を消費する

はずだが」

結衣「ん、それは大丈夫じゃないかなあ。

私の能力がある限り、近くの皆は強化されてるはずだから‥」

剛「そうか‥なら大丈夫なはず‥だな。」

峡「じゃあ將信、頼める?」

將信「もちろん!僕の発案だし、これぐらい当然だよ」

將信は笑顔で剛の願いに答える。

結衣「よーし、じゃあお互いに頑張ろーう!」

將信「おーう!」

將信と結衣は仲睦まじくハイタッチをする。

剛「」

(相変わらず仲が良いな‥)

峡「あれ、そういうえばにとりつて確か妖怪の山に住んでるよね。  
光学迷彩はどうやつて貰つたんだい?」

結衣「ああ、あたしが人里で買い物してたら、にとりとすれ違つたの。

胡瓜買うため

に山からおりて来たんだって」

結衣は顎に人差し指を当てて、前の出来事を思い出している。

峡「あ、そうなんだ…」

(皿はないけど胡瓜が好きなのは本当なんだな)

剛「よし、じゃあそういう事だ。それぞれしばらく準備をしていてくれ。では、かい  
s

彩「すいません、提案ですが

天狗達の視界を操つて天狗達から私達を不可視にしたほうが早い気がします…。

私達一応大妖怪よりは強いですし、幻覚を掛けるのは結構靈力使うと思いますよ」

峡「なるほど、そつちの方がコストパフォーマンスもいいね」

華憐「…じゃあ光学迷彩いらしないんじゃない?」

4人「そうだな(ですね)」

結衣「ひどい!」

i n 妖怪の山

6人は計画通り順調に山を登っていた。

時に地面を歩く音や葉が擦れる音で天狗達に警戒されることもあつたが、時には天狗達の聴覚も操り、特に気づかることはなかつた。

そして3人は山の中腹へと到着し、その後すぐに休憩する場所をそれぞれ探し始める。

能力を物凄い勢いで駆使した將信が息を切らし始めたからだ。

もし山を登る際に將信が力尽き、能力を使用出来なくなれば、いくら気配を消したところで常に警戒している天狗達に場所がバレてしまいかねない。

数十分後そして3人は大きな滝が流れる川を見つけた

川の水は透き通り、滝からは凄まじい流水の音が響き渡つていて。

剛 「木に囲まれているから天狗たちも見つけにくいはず……ここで一旦休憩だな」

峠 「ああ。でもこれなら最初から飛んだ方が早かつたんじゃない?」

そう、6人は山の麓で歩いたあと、わざわざ歩いてここまで来たのだ。

彩 「まだ飛行に慣れていない将信くんの負担が大きいと思います。それに空は鳥が多く飛び交っていますから……」

峠 「ああ、そうか。」

6人は近くのゴツゴツとした大きな黒い岩に腰掛け、持参した竹筒で水をゴクゴクと喉を鳴らしながら飲んでいる。

峡「將信、体力はどうだい？」

將信が心配なのか峡は歩いて將信の傍に腰掛ける。

將信「今の所大丈夫だよ。ざつと靈力2割ぐらい消費したかな…。」

將信は美味しそうに水を飲んでいる。

峡「一応みんなから靈力がある程度貰つてきたから、これで後少し頑張つてくれ」  
峡は將信の背中に触れ、ある程度靈力を將信に分け与える。

將信「ありがとう：これだけあれば充分に頂上まで持つよ」

將信は純粹無垢な笑顔で峡や皆にお礼を言う。

何億という時を過ごした彼らは、前世よりも強い強い固い絆に結ばれていた。

その時

?? 「口ケツトミサ i」

峡『……ミラーウオール』

???は突如川の近くから現れ、何やら口ケツトランチャーの様なものを構え、6人に向

かつて弾頭を放つてきた。

どうやらそれを峠は察知していたらしく、ミラーウォールでその攻撃を防ぎ、???を透明な壁で閉じ込めた

???「いつたあい！」

突如ミサイルが壁ぶつかり爆風を発生したせいで???は軽く吹き飛び、後頭部に頭を打ち付けた。

血は出ていないが本当に痛いらしく後頭部を抑えている。

峠「…このスペル便利だなあ」

???はすぐに起き上がった。

青を貴重とした服に緑のリュックや帽子を身につけている。

結衣「あれ、にとりじyan・なんでここに？」

結衣は頭上に？を浮かべ???に話しかけた

にとり「にとりじyan・じやないよ…。もしかして、結衣の盟友？」

結衣「盟友・まあそんな感じ。それにしても、何でいきなりそんな物騒な物持つてるの？」

にとり「いやあこれ新作なんだけどね、丁度良い所に侵入者がいたから……つい……まあ結衣の友達にケガもないし、結果オーライって事で……」

にとりは引きつつた笑顔を浮かべながら後ずさりする

剛「…待て」

にとり「はいっ!?」

にとりは殺氣のこもつた剛の言葉にビクリと体を震わせ涙目になりながら木に隠れる。

剛「…交渉しよう。天狗達の本部を教えて欲しい。教えてくれればそれ相応の礼をさせてもらう」

にとり「へ、へえ…。それで、何を私にくれるんだい?」

にとりは苦笑いしつつも、その誘いに乗ったようでニヤリと笑い、木から出でてくる。

剛「…この胡瓜でどうだ。昼飯にたらふく食べられるくらいはあるぞ…？」

剛はどこからか胡瓜を数本取り出し、にとりの前で揺らしている。

これは策士な峠に言われたもので、一応持つておいたのだ。

にとり「… そんなんじやあ駄目だね。私と天狗の絆は強いよ?」  
にとりは溢れ出る涎をふき、まだだと交渉する。  
彩「…」（全く説得力がないんですけど…）

剛「… 今なら味噌とぬか漬けもついてくるぞ」

にとり「盟友、感謝する」

剛とにとりは悪い笑顔を浮かべ固い握手をした

にとり「天狗達の本部は山の頂上さ… ただ大天狗達も今頃集まつてゐるはず、健闘を  
祈るよ」

2人はコソコソと耳打ちしている。

剛「ふむふむ… なるほど」

華憐「あんたら何してんの…。さつさといくわよ」

華憐は5人を手招きし、6人はさらに山を登り始めた。

そこには純白の、きれいな何者かの羽が残されていた

# 天狗の山と侵入者

3人はにとりの言葉を頼りに森を進み、樂々山の頂上へ到着する事が出来た。一足先に將信も、5人の助けあつてか特に危ない様子もなく体力を十分に持つてたどり着けた。

將信「さあて……天狗達は……つと」

將信は姿が見えないにもかかわらず、それを忘れているようで茂みから顔を出し天狗達の様子を覗き見する。

將信「……あれ？」

そこには里が出来ており住居もしつかりあるが、肝心の天狗がいなかつた。

剛「どうした？」

後から到着した剛達の声に將信は振り返り、小声で話した

將信「天狗達がいないんだよ、」

剛「そんな馬鹿な……俺が見てく」

白狼天狗「聞けい侵入者!! 我らは白狼天狗!! 今すぐここを立ち去らなければ、貴様ら

を見つけ出し始末する！」

白狼天狗の大きな声が5人の頭上で鳴り響いた。

頭上には白狼天狗の集団がいた。どうやら居場所は分かつていないらしく、それぞれ四方八方を向いて我々を警戒しているようだ。

剛 「……このままだと逃げるわけにもいかない。久々にやるか？」

剛は手をポキポキと鳴らし、ニヤリと口元を吊り上げる

華憐 「これじやあ覗き見どころじやないし、どちらにしろそうなるわね」

将信 「ええ……もつと見たかったなあ」

6人は立ち上がり、それぞれ首を回すなど準備運動をする。

將信 「んじや、能力を解くよ。流石にキツイ」

5人 「」「「「了解」」」

そして能力を解いた刹那、6人に雨のような矢が降り注いだ

彩 『静止 0の動き』

だがそれらは虚しくも彩のたつた1枚のスペルによつて無意味となり勢いが急に減

速し、真下に落下した。

将信「あ、無意味な殺生はやめてよ？ 極力弾幕でよろしく」

結衣「うん。峡、新しいスペル試したら？」

峡「・あ、そうだね。 スペル宣言『風雨 ヘビーストーム』」

その途端、白狼天狗達の10mほど上から、細かい青色の粒弾が降り注ぐいだ。一つ一つの威力は低いものの数が半端ではない。

横からは物凄い強風が白狼天狗達のバランスを崩す。

あの天狗でさえもコントロールが困難な強風は、どんどん近くの木を薙ぎ倒していく。

それに足を囚われた天狗は木にぶつかつたり、あるいは粒弾を大量に受けることにより、一斉に気絶していく。

相変わらず6人は余裕そうにその光景を眺めている。

3人は長い時の中で殺生があまり好きではなくなつた。

そのため、弾幕ごつこを非常に好み使っているのだ。

そして何百といた白狼天狗が数十という人数になつた頃、鴉天狗が体格の大きな天狗……言うなれば大天狗を引き連れて、物凄い形相で大急ぎでやつて來た。

大天狗 「おい、大丈夫か!?」

仲間の命を確認し、6人を睨み臨戦態勢を取る

大天狗は酷く怒つて いる様に見える。

それも仕方が無いことだろう。

秋は食欲の秋、読書の秋と言われ記事にすることが山ほどある。

忙しくなれば鴉天狗や大天狗問わず仕事が増える。

そんな中、山への侵入者が現れ天狗達をボコボコにしていけば、それはもう怒りが噴火する。

大天狗 「貴様ら!! 今すぐ立ち去れ!!」

將信「あれ、何か怒らせちゃった?」

結衣「そりやそうか：どうする?」

彩「しかしこの状況では逃げられませんよ?」

將信「……なら仕方ない、戦うしかないでしょ『合力 マジックテクノロジー』」

將信達はいつも前向きに考える。長年騒動に巻き込まれた3人にとっては慣れっこである。

それは誇れることではないのだろうが。

將信の足元には魔法陣のようなものが描かれる。

そしてそれは次第に回転し、その勢いを高めていく。

將信「…… まだ!!」

將信は腕を前に突き出し、手で三角形を作るようにして構え、靈力を解放した。

そこからは6つの極太レーザーが飛び出し、それらは鴉天狗や白狼天狗達を飲み込み、さらに追尾して大天狗達も飲み込んでいく。  
断末魔すらあげられないまま、大天狗達は一人を残して氣絶してしまった。

結衣「なんかあつけなかつたね。私が手を出すまでもなかつたわ。」

華憐「あんただれよ……で？ そこの天狗さんはどうするの？」

剛「うーーーむ…………お？ ボスの登場らしい」

彩「……！ 速いですね。」

6人の前から、物凄い速さで黒いナニカがこちらへ向かつてきた。

それは6人の数メートル前で地面を抉りながら着地した。

周りには円状のクレーターが出来ており、どれほどの速さで着地したのかがわかる。

「……どうしてこうなったんだ？」

?????は首を唄つて呆れ顔をしている。

剛「お前は天狗のボスだろう？ まあその妖力を見れば誰でもわかると思うが」

天魔「いかにも。私がこの天狗達のリーダーの天魔さ。」

それで、君たちは何故山に来たんだい？」

天魔は若干低い声で剛達に問う。

彼女は大剣をして大天狗と同じくことらを警戒しているようだ。

天魔は剛達の側でビクついている大天狗にちらりと視線を移した後、すぐに6人に山へ入った理由を聞く。

剛「興味本位で山へ入つたら殺されかけた。以上だ」

天魔の気圧に全く動じることなく、剛は簡潔に説明する。

天魔「…そこで入る事を止められなかつたか？」

剛「いや、全くだな」

天魔「ほう…では質問を変える。貴様らはこの山をどうしたい？」

天魔は突如形相を鬼のように変え、妖力を全開にし、大剣に妖力を注ぐ。

そこらの妖怪であれば失禁してしまうだろうその姿に、思わず6人は身震いする。

天魔もリーダーとして、天狗達がやられた責任を取らなければならないのだ。

剛「我々の要求は妖怪の山の社会の情報提供。ただそれだけだ。別にお前らの部下を殺す気は無い。」

天魔「ならば私の要求は…

貴様らの命だ!!」

天魔は物凄い力で地を蹴り、剛にむかって目にもとまらぬ速さで大剣をふりおろす。

しかし、それは剛にとつて遅すぎた。

剛はそれを、華憐を武器化した槍でいとも簡単に防ぐ。

天魔「なあツ……!?」

剛「甘いな」

剛は天魔の大剣を振り払い、槍で天魔を薙ぎ払うようにして振るう。

天魔は大剣で受け止めようとするが、あまりの勢いに風圧で吹き飛ばされる。

天魔「グウツ……」

（何故……!? 何故これほどの人間が……この世に存在する……!?

天魔は何度も木を倒しながら吹き飛び、ようやく止まる。

その一撃だけで体はボロボロになつており、大剣を持つた右腕は折れたのか、ブラブ  
ラと垂れ下がっている。

頭からは血も流しており、これ以上戦えば死は確実だろう。

剛のたつた一撃、それもうかなり手加減をしてこの威力。結果は既に明らかだつた。

天魔「まだ……まだだ。」

天魔はそんな中でも大剣を杖のようにして立ち上がり、口元の血を拭う。

そして血走った目で剛を睨み、大剣を再び構える。

剛「怒りに身を任せるな熱情に、冷徹に見極め俺に攻撃を放て。俺は逃げない」  
剛は天魔の意思に答え、スペルを構える。

周りの5人は一騎打ちに介入してはいけないと、剛を見守っている。

天魔「……スペル宣言『旋風 ハリケーン』」

スペルを宣言すると、天魔の前に、大きな風の渦が出来る。

天魔の姿が見えなくなるほど巨大化した渦は高速に回転しており、触れれば八つ裂きにされてしまうだろう。

天魔「……ハアッ!!」

そして天魔の声とともに、それは剛に向かつて極太レーザーのように物凄い勢い放たれた。

剛「……！ 極符『根幹一撃』!!」

剛は足を縦に大きく開き、右腕を後ろに大きく下げ、左手を突き出して構える。その姿はまるで獣を射る弓士のようだ。

右腕に靈力をため、ハリケーンが来るギリギリまで待つ

剛「ハアツ!!」

そして剛は拳を突き出した。

拳で敵を倒すだけの単純で豪快な攻撃だが、それは風圧だけでハリケーンを消し去り、天魔に迫る。

天魔「…私の負けだな」

天魔は諦め目をつぶつた。

その時

「天魔様!!」

空から鴉天狗、白狼天狗が猛スピードで着陸し、風圧を妖力で使った壁で防いだ。

剛「…ふむ」

それだけでかなり力を消費するが、弱まつたとはいえ風圧を防ぎきつたことに剛は声を漏らす

天魔「ん…ああ、文に柵か、どうした急に」

目を開けた天魔は二人に聞いた

射命丸「どうしたもこうしたもありませんよ… あんな形相で出ていかれるなんて久々ですからついてきてみたら… 里がもうメチャクチャじやないですか…」

射命丸は周りを見渡し冷や汗を浮かべる

柵「くっ…。この犬走柵、天狗の名に掛けて天魔様の仇を… ツ！」

剛達の元へ向かおうとする柵の腕を、天魔は握る。

天魔「… よい。私の完敗だ。要求を飲むとしよう」

柵「しかし… !!」

柵や射命丸、そして天魔達天狗はプライドが高い。

負けを認めるることは人間達以上に悔しいはずだ。

天魔「問題ない。

部下達をこうされた事は納得出来ないが……戦つて君達が悪者ではないと分かつた。  
… わざと風圧を弱めただろう？」

剛「……感謝する。これ以上やればお前は死んでしまうからな。」

天魔「… ああ。だが私はこの状態だ。情報提供は文、コイツに頼んでくれるか」

天魔は左手で文を指し示し、柾に木の側まで運ばれる。

將信「もちろん。文々。新聞だつけ？

情報が早いからよく読ませて貰つてるよ」

文「…え、あ、ええ。ありがとうございます。」

文は敵だった者からの褒め言葉に困惑を抱くが、素直に受け取つたようでお礼を言  
う。

將信「よーし、それじゃあ作業にかかるよ。華憐と剛は里の復旧、僕と彩は怪我をし  
た天狗達の治癒、結衣と峠は能力で周りをサポートしてくれ。情報提供の取材は明日人  
里でお願いするね！」

その言葉で6人は作業に取り掛かつた。

文と樺は今まで呆然としていたが、やるべき事に気づいたらしくすぐさま緊急箱を取りに里の中心へと戻つていった。

峠が結界を展開していたおかげか、あれほどいた天狗達の治癒はほんの数分、村の復旧は數十分程度で終わつた。

そしてその夜。

「天狗達とも、謝罪に昔の頃の情報を提供するということで、3人は無事仲直りを果たすことが出来た」

# 天狗と新聞

峠「さて……」

妖怪の森へと言つた後日の昼過ぎ頃、6人は昼食を食べ終え、射命丸が来るのを人里の門の前でしばらく待つっていた、ら

彩「……来ましたね」

そして数分後、物凄い速さで射命丸は飛んできた。そして綺麗に着地する。

幻想郷最速を名乗つてゐるだけあつて、その姿は人間には速すぎて捉えられないだろう。

無論彼らを除いてだが。

射命丸「おつはよーございます！ 清く正しい射命丸です！ 先日は取材の承諾ありがとうございます！」

射命丸は元気そうなニコツとした表情で6人に目を向け、ペコリと軽くお辞儀をする。

將信「いやいや大丈夫だよ、家に案内するから、ついてきてね」

射命丸「はい！」

そして射命丸を含む7人はのんびりと話をしながら家へとゆっくりとした足取りで向かっていく。

將信「あ、ここからは時間が少しかかるから、先に取材始めちゃつていいよ」

射命丸「あ、いいんですか？」

剛「気にしなくていいぞ。家の話は少し長引くかも知れないからな。」

射命丸「わかりました。…ではお言葉に甘えて…。」

まずは皆さんの年齢を教えてくれますか？

」

射命丸はペンとメモ用紙を歩きながら取り出し、こちらの言葉を伺っている。  
どうやら天狗としての性はやはり持っているらしく、6人に對し少し下手に出ている  
ように見える。

將信「ん： そういえば僕達って何歳だっけ」

剛「：途中から数えるのが面倒になつたんだつたな： ザつと5億歳くらいじやな  
いか？」

將信「まあ、その辺だよ、あはは」

将信はどうやら本当に自分の年齢が本当に分からないらしく苦笑いする。

結衣「もはや人間とは思えないね……」

一方射命丸は、開いた口が塞がらないという表現がとてもしつくりくる表情で、目を見開いたまま固まっている。

結衣「おーい、大丈夫ー？」

結衣は射命丸の前で手を揺らす。

射命丸「……ハツ！失礼しました……。随分長い間生きられているんですね。女性の方々もですか？」

華憐「まあ大体同じなはずよ。

ちなみに私達は付喪神だから、基本的に年はとらないの。」

射命丸「なるほど……。女性陣の皆さん、良かつたら擬人化を解いて頂けませんか？」

結衣「ん、おつけー」

その言葉で、結衣・華憐・彩は一斉に擬人化を解きそれぞれ峠・剛・將信の手に止まつ

た。

射命丸「…！なるほど、弓、槍、双剣の付喪神ですか？」

射命丸は先程から、パシヤパシヤと6人の様子をカメラで撮っている。記事の内容を考えているのか、撮っている最中にニヤリと笑うこともある。

剛「…」（悪用されなければいいが…）

彩「…」（そういういえば月の都にもあんなモノがあつたんですよねえ…）

ですか？」

華憐「…詳しく述べはまだ言えないけど、剛の能力で彼らの体の衰えの勢いを限りなく0に近くしてゐるからよ。ほほ不老ね。まだ人間の肉体年齢的には18～20ぐらいじゃないかしら」

華憐、剛、彩はまだ警戒を解いていないようだ。

だが射命丸に特に怪しい様子は見えない。

徐々に3人も警戒を解き始めていた。

射命丸「ふむふむ…ありがとうございます。

では次に、皆さんは紅霧異変の解決者ですがよね？その感想を聞かせてください」

剛 「コウムイヘン？」

射命丸 「はい、紅の霧と書いて紅霧です。レミリア・スカーレットが起こした…」  
剛 「あああれか、普通に楽しかつたぞ。巫女の戦いも見れたし、人里が大事にならなくてよかつた。」

峡 「吸血鬼を見るのは初めてだつたけど、流石に身体能力の元が違うなあと実感させられたね。昔の僕らだつたら瞬殺だつた」

剛は腕を組みながら、峡は何か考えるように指の第一関節を顎にあてながら、紅霧異変の事を思い出している。

射命丸 「なぜ異変解決に行かれたんですか？ 解決は巫女がしてくれるはずですが…」

將信 「それはなんとなく」

彩 「それはなんと言えばいいのかわかりませんが、単純に現代の博麗の巫女の様子を知りたいと思つたからです。」

無事に戦えているようで安心しました。私達は一応里を警備しているので…」

彩 「（めんどくさい事になるからあんまり本当の事を言わない方がいいと思います…）」

將信 「（あつごめん、流石になんとなくはマズイか…）」

射命丸「なるほど！博麗靈夢は、先代の巫女と比べ皆さんから見てどう思われますか？」

結衣「正直修行不足かなあ。その分才能でカバーされてるからいいけど、まだ若いから、その内にもつと修行してた方がいいと思うけど……」

峠「だね。先代に比べると桁違いの才能を持つてる。

これだけの逸材を見つけるのは相当苦労したんだろうね。紫もよくやるよ」

射命丸「あ、スキマ妖怪とお知り合いなんですね」

將信「うん。といつても殆ど会わないけどね。会いたくないし」

將信はボソッと真実を呟き、周りを苦笑いにさせる。

射命丸「よし……じゃあこれでラストです！」

皆さん、ぶつちやけ彼氏彼女は⁈」

その言葉を言った途端、それぞれの反応は全く違った。

剛・峠「……」

結衣「あはは……」

將信「ンゴほつごほつ…」

華憐「なにやつてんのよ…」

剛、峠は無言で黙り、結衣は頬を搔きながら苦笑いし目線を外す。

将信な飲んでいたお茶が噎せて苦しそうにしており、それを華憐が摩つてている。

彩「… つて事です」

射命丸「あやややや…。なるほど、それは意外ですね…」

射命丸はニヤリと悪い笑みを浮かべ、なにやらメモしている。

射命丸「これでこちらの取材は終了です！ご協力感謝します」

射命丸は6人に笑顔を見せ、敬礼する。

将信「うん… あ、丁度いいね」

剛「… 家が見えてきたな。」

i n 家

彩「どうぞー。粗茶ですが。」

彩は6人と、射命丸の分のお茶をお盆に乗せて持ってきて、配っている。

射命丸「お構いなく・・・では皆さん、私にじやんじやん妖怪の山の事をお聞き下さい！」

射命丸はキリツとした表情で6人の質問を待つていて。

射命丸はネタが入ったからか、テンションが上がっているように見える。

華憐「ほら、將信、あんたの出番でしょ」

將信「え？ あ、うん。

えつとじやあ、まずは妖怪の山の社会について教えて欲しいかな。制度とか・・・

射命丸「はい！ 妖怪の山は、見張り役の白狼天狗、情報収集役の、私もそうですが鴉天狗、管理役の大天狗などに別れて仕事をしており、文明的な社会を築いています。

上下関係が激しいので、憎んだり憎まれたりする事はやっぱり多いんですよね・・・」

射命丸は苦笑いで頭に手を当てている。

將信「なるほどね。大変そうだけど、大丈夫なの？」

射命丸「ご心配には及びません。私は新聞を書くことを生きがいにしてますから・・・

！」

射命丸は胸を張つてその言葉に答える。どうやら天狗の誇りを持つていていることはどの天狗にも共通点らしい。

天狗は仲間意識が高いことでも有名である。

将信「なるほどね。眞面目だなあ」

剛「お前もかなり眞面目だと思うけどな……」

峠「じゃあ僕からも射命丸に質問いいかな？ 妖怪の山には河童以外にどんな人が住んでいるんだい？」

射命丸「はい。私達天狗や河童、山彦の妖怪、厄を引き寄せる妖怪や秋の神なんかもいらっしゃいますね。住民なんかわかりませんが、大蝦蟇という大きなも力エルいます。以前は上司になるのですが、鬼も住んでいましたね。の方たちには今でも頭が上がりませんよ……」

峠「なるほど、ありがとう」

射命丸「いえいえ。妖怪の山に関する質問はもうございませんかね……？」

射命丸は6人の様子を伺っている。

剛「…。妖怪の山には関連しないが、私的な事で質問していいか？」

射命丸「はい。私が答えられることならどんどん質問していただいて構いません。」

剛「鬼が上司なのだろう？鬼へ会いたいのだが、地底へと行く手段を聞きたい。我々はまだ行つたことがないんだ」

射命丸「うーん、地底ですか‥‥」

地底とこちらは行き来できないようにスキマ妖怪が決めているので、今のところ、鬼に会うことは出来ないと想います。八雲紫に直接交渉するしかないですね‥‥。お力になれず申し訳ありません」

剛「いや、そう下手にならなくともいい。

ちなみに、何か幻想郷に面白そうな所はあるか？」

射命丸「面白そうなところ‥‥ そうですね。

太陽の烟や魔法の森なんていかがでしようか。太陽の烟は妖怪の山をもう少し先に行けばありますよ。」

將信「後者は行つたことがあるけど、そういうえば太陽の烟は行つたことがないよね。」

彩「そうですね。一度行つてみたい物です。」

射命丸「向日葵が咲き誇ついてとても見事ですよ。

ただ四季のフラワーマスターがよく出没するので、気をつけておいた方がいいです」

將信「四季のフラワーマスター？」

峠「風見幽香だよ。噂で聞いたことがある。何やら花を操るとか？」

剛 「花を？ それはまた面白そうだな。」

射命丸 「峠さんの仰る通りですね。」

私はあつた事がないですが、大妖怪でなにやら凶悪だとか  
剛 「ほお… それは意外だ。機会があつたらいいってみるか。」

剛は立ち上がり背伸びをする。

將信 「うん、こんな感じで切り上げようか。もう皆疲れてるらしいし。」

長い間話していたせいか、華憐は眠そうにあくびをしており、結衣に至つては爆睡している。

射命丸 「その様ですね。では私はこれにて！ 文々。新聞、ご愛読ありがとうございます！」

す！ これからもどうぞご贊同に！」

そして射命丸は玄関から颯爽と飛び去つた。

後日

峠 「おつ、もう発行されたの？ どれどれ…」

峠は玄関にあつた新聞を拾い上げ、居間に運んで読む。

【幻想郷に新たな強者現る】 5億年を生きる者達を徹底取材!!

今回、私射命丸は6人の、5億年という長い歳月を生きる者達の取材に成功した。男女3人づつのメンバー構成で、種族は男性陣が人間〈仮〉、付喪神である。彼らは紅霧異変にもかかわっておりく

峠「ん、丁寧に書けてるじゃないか」

どうやら彼らは5億年の歳月を生きているにも関わらずその力で幻想郷をどうにかしようという意志がないようだ。

それに何故か無関係の紅霧異変にまで関わっている。

さらに人間の將信氏曰く、八雲紫と知り合いだという。

彼らは恐らく幻想郷のパワー・バランスに大きく関わっていることだろう。

私は彼らをこれからも追い続ける事にする。

峠「ん……これは……」

將信「おーい峠ー！朝食が出来た……あ、新聞届いたの？」

峠「ん、ああ、読んでみてくれ」

將信「…………なるほどね。ちゃんと本当の事を書いてくれてるけど……やつぱり大袈裟だなあ……」

將信は目を笑わせず、苦笑いした

## 時の流れと四季

妖怪の山との交流が深まつた後からさらに時は流れ、紅霧異変からおおよそ一年ほどがたつた。

木々の葉は既に落ちきつており、寒々しい冬を演出している。

幻想郷の冬景色は見事なもので、見る者を魅了させる。

妖怪の山との交流後、その間3人は特に異変に会うこともなく、平凡な、けれど充実した日々を過ごしていた。

時には魔法の森で妖怪達と腕くらべをし、弾幕ごつこの研究をする。

時には永遠亭に行き、輝夜と藤原妹紅の喧嘩を仲介する。

また、紅魔館の連中はどうやら幻想郷に正式に住むことを決定したらしく、今では人里へ食料を買いに来るなど、社交的になつていた。

だが、そんな日々も一時の終わりを告げる事になつた

（博麗神社）

剛 「… なあ峠」

剛は窓の外の雪景色を見て峠を呼ぶ

峠 「ん、呼んだ？」

剛 「… 今何月だ？」

峠 「4月だね」

剛 「… 流石にまだ雪がこんなに降るのはおかしいだろう…」

峠 「…まあ、実は僕も薄々思つてたよ。異変なんだろうけど、季節操る妖怪が  
身内にいないんだよね…」

原因の検討がつかないから、放置してたけど。

窓の外では将信や寺子屋の子供たち、結衣や彩が混ざつて、雪遊びをしている。

雪だるまを作る子もいれば雪合戦をする子、かまくらを作る子など、様々な子供たち  
が遊んでいる。

靈夢「… 何話してるのよ」

靈夢は炬燵から寒そうにしながら出てきて、障子を少しだけ顔を覗かせる。すっかり厚着をしており、その姿からは巫女の姿を全く想像させない。

剛「この雪の事でな。お前も何となく勘づいているだろう?」

わ。

靈夢「…まあ、そうね。流石にここまで春が遅いのはおかしい、迷惑極まりない

まともに外も歩けないもの」

剛「それはお前が怠けているからだろう」

剛は真顔で靈夢にツッコミをいれる。

たつた靈夢と剛は1年ほどの付き合いだが、既にお互い心を許しているようにも見える。

靈夢「… はああーっ… 魔理沙も先に行っちゃつたし、私も行くしかないわね…」

靈夢「よつこらせ… つと」

靈夢はいやいやだが、ゆつくりとした早さで立ち上がる。

峡「…（おっさんかよ!!）

そして峡は内心ツッコミを入れる。

華憐「…それで、私達はどうするのかしら？」

峡のそばに座っていた華憐は尋ねる

からな」

峡「んまあでも一応ついて行つたほうがいいとおもうけど…。首謀者がどんな奴か

気になるし」

剛「俺はそれでも構わないが…まあとりあえず子供たちを家に送つてからだな。」

將信「それで、靈夢は首謀者の検討がついているの？」

靈夢「なわけないじやない」

將信「そんな胸を張つて言えることじやないよ…。」

靈夢「まあ、魔理沙が行つてる事だし、そこら辺に落ちてる妖怪達に聞いたらわかる

でしょ」

i n. 冥界

魔理沙「さて、ここが冥界か。不気味なもんだな。」

魔理沙は怪しい妖怪達に片つ端から弾幕ごつこを挑み、偶然首謀者と関係があつた人物から冥界に首謀者がいるという情報を入手し、冥界へとやつてきた。

荒い調べ方で非効率的だが、それが魔理沙のやり方なのだろう。

そして上へと続く長い階段を一段一段歩いていく。

かなり魔理沙は戦闘しており、これ以上魔力を消費するとまずいからだ。

数分後、魔理沙は階段の中腹あたりで、なにやらふよふよ漂う魂を持った少女と対峙することになった。

?? 「…ここは冥界、者が集う場所ではない。今すぐ立ち去れ。さもなくばお前切る」

魔理沙「手荒い歓迎だな。この異変の首謀者……ではなさそうだが、お前の仕える奴はどこだ？」

??「…ほう、異変解決者か。であれば尚更、この先を通すわけには行かない。  
…貴様の春度も、西行妖の贊となるのだ」

妖夢はコツコツと足音を鳴らし、魔理沙にゆっくりと近づいていく。

魔理沙「うーーん…これ以上戦いたくないんだが…」

咲夜「…ここは私にお任せあれ。」

その突如咲夜は魔理沙の傍に瞬間移動したかの如く現れた。  
いきなりの現象にビクリと魔理沙の肩が震える。

魔理沙「驚かすなよ。」

それで、異変解決を手伝ってくれるのか？」

咲夜「手助けしてあげるわ、あなたは先に行きなさい。

さつさとこの異変を終わらせないと、お嬢様が外に出られないのよ、。」

咲夜ははあ：とため息を吐き、俯く

魔理沙「恩に着るぜ!!」

その言葉に魔理沙はに等に跨り、全速力で妖夢の隣を抜き去った。

妖夢「ツ!?逃がすか!」

妖夢は拔刀し魔理沙に向かつて銀色の刃を向けようとする。

しかし妖夢の刀は、咲夜の銀色のナイフで弾かれた

咲夜「あなたの相手は私ですわ。」

咲夜と妖夢はギリギリと互いの刃を交じわせ、一旦両者ともに後方へと退避する。

妖夢「…まあいい、貴様の春度を全て頂き開花させるまで。

妖怪が鍛えたこの楼観剣に斬れぬものなど、少ししか無い!」

そして、もう一度お互いの銀の刃が衝突しあつた。

妖夢「フツ!!」

妖夢は物凄い力で地を蹴り、長刀の楼観剣を咲夜の首目掛けて薙ぎ払うように何度も振るつていく。

妖夢は弾幕より近接戦闘が得意のようだ。

その刀さばきは見事なものである。

咲夜「⋮」

咲夜はその妖夢の剣を、体力を消費しないようギリギリで躱しつつ、隙を見計らって時止めの能力を使い、妖夢に目掛けて大量のナイフを放つ

妖夢「ハツ!!」

妖夢はその手数に危険を感じたのか、短刀白楼剣を取り出し、楼観剣と共に二刀流の構えで、数々のナイフを全て弾き返す。

咲夜「⋮（やるわね）」

咲夜「なら、これはいかが？『幻符 殺人ドール』」

咲夜のスペル宣言後、咲夜の周りにはさらに大量のナイフ型弾幕が展開され、妖夢に向かって一直線上に降り注ぐ。

変則的な動きではないものの、その数はかなり多い。

妖夢「つならば！『餓王剣 餓鬼十王の報い』」

そして妖夢もすかさずスペルを宣言する。

そのスペルは咲夜の弾幕を横一文字の斬撃で薙ぎ払いつつ、周りには弾幕が展開される。

そして隙が見えれば、すかさず妖夢は咲夜との間合いをつめ、積極的に攻撃してくる。

咲夜「……（このままでは…何か考えない）」

恐らく技術でいえば妖夢はまだまだ半人前。

咲夜が妖夢に勝つことは簡単なはずである。

しかし冥界に来るまでに靈力を咲夜は少なからず消費している。さらに妖夢とは種族も違い、体力の差はやはり現れているようだ。

そのような原因で、咲夜は体力を消費した咲夜は一旦距離を取り、息を切らしている。戦況はら若干妖夢に勝利は傾いているように見えた

妖夢「っ！隙あり!!『天界剣「七魄忌諱』』」

妖夢はその隙を見逃がさず、さらにスペルを宣言する。

妖夢の前からは七色の弾幕が大量に展開された。

今体力がギリギリな咲夜にとつ、てそのスペルはかなり厳しいはずだ。だが咲夜は必死にそのスペルを時には時を止め、なんとか躱しつくした。

妖夢「…！」

スペルが終了すると、妖夢は猛スピードで駆け出した。

間合いは急激に縮まる。

妖夢「ハアッ！」

そして妖夢は楼観剣を咲夜に向かつて思い切り振り下ろし、そこで決着がついた  
そこで、つくはずだったのだ。

咲夜「かかったわね！時符『プライベートスクウェア』」

その瞬間、一瞬だがスペルの影響で妖夢の動きが急激に遅くなる。  
しかし時止めとは違い、昨夜の周囲の時間も動いている。

妖夢「ツ!?」

妖夢は急に体が重くなる感覚に襲われ、目を見開いた。

なんとか手足を動かそうとするが、まるで水中にいるように動きが鈍い。

咲夜「今つ！」

———咲夜は数本のナイフを二つの刀に向かつて物凄い勢いで放った———

勝敗からいえば、咲夜の勝利で終わつた。

最後の咲夜の放つたナイフで、妖夢の手から樓觀劍、白樓劍が弾かれ空を舞つた事が勝因である。

ただし両者力、体力を使い果たしボロボロの状態。  
お互に切り傷からは血が溢れており、致命的な傷では無いもののもう動けないようだ。

咲夜「… はあ。もう動けないわ…。」

咲夜は地に倒れ伏せ、腕を目にあててふと呟く

妖夢「… お嬢様は強い。きっと貴方達では勝てはしないわ」

咲夜「… あら、私のお嬢様だつて強いわよ。幽靈風情に負けないわ」

妖夢「あの方は本気での桜を咲かせようと考へてゐる。

もし、もしも幽々子様が負けても、西行妖が咲き誇れば、博麗の巫女にだつて止められはしない。」

咲夜「あら、私は博麗の巫女になんてはなから期待なんてしていないわよ」

妖夢「… ?」

## in 白玉楼

魔理沙は咲夜と分かれた後、妖夢がついてこないのを確認すると箒からおりて、また階段を上り頂上へとたどり着いた。

冥界の入口付近とは違い、周りの空気がさらに暖かくなつた気が魔理沙はしていた。それは幻想郷中に春度を集めていることを表している。

魔理沙「… それにもどの桜も満開だな…」

魔理沙は満開の桜達を見つめつつ、見事に飾られた屋敷の庭を歩いていると、とある人物を見つける

??? 「まだまだ……あと少しなのよ」

魔理沙「?」

魔理沙は扇子を持つた女性に目を向け、箒に乗り警戒する。

幽々子「後少し春があれば、この西行妖も満開になるのよ。」

幽々子は傍にある大きな巨木の桜木を見つめている。

魔理沙「そのなげなしの春度とやらならここにあるぜ。」

魔理沙はニヤリと笑い挑発する

幽々子「あら… あなたは妖夢の後継ぎか何かかしら」

魔理沙「まさか。私はこんな辺鄙な屋敷で一生を終えたくないぜ。それに、私はまだ生きてる」

幽々子「じゃ、代用品?」

魔理沙「話を聞いているのか?」

幽々子「聞いてるわよ。死ぬ時はこの桜の木の下がいい……って話でしよう?」

魔理沙「何を訳分らんことを言っているんだ?」

魔理沙は?を頭上に浮かべる。

幽々子「とにかく、どうしてもこの桜の封印を解きたいのよ。紫も教えてくれないし……」

魔理沙「だからさせてやるぜ。何か私にいい事があれば、な。ただじゃ渡せないな」

幽々子「花見なんてどうかしら?」

うちの花見は賑やかで楽しいわよ」

幽々子はどこか紫に似た胡散臭さで、扇子を口元に当てる。

魔理沙「ちよつと前にその賑やかな連中を倒した様な気がしないこともない……」

幽々子「なんにしても、この冥界の桜は人間にとつてどう見えているのかしら、気になるわー」

魔理沙「この辺は死臭だらけだな。最悪だぜ」  
魔理沙は早く戦いたいのか、またじれつたいのか、足を小刻みに動かして戦いたい意  
思を表している。

幽々子「あら、あなたは目で匂いを嗅ぐのね」

魔理沙「ああ、よく臭うな。こんな辛氣くさい春は生まれて初めてだぜ」

幽々子「失礼ね。ここはあなた達の住む幻想郷の春と同じはずだけれど」

魔理沙「失礼な！誰が目で匂いを嗅ぐ！」

幽々子「会話がずれてるわよ！」

魔理沙「まあ、ついでに」

幽々子「でも、折角だし：」

魔理沙「辛氣臭い春を返して貰うぜ！死人嬢」

幽々子「なけなしの春をいただくな！黒の魔」

—そして戦いの火蓋が、切って落とされた—

# 妖桜と亡蝶

魔理沙と幽々子は互いに言葉を交わし、大きく距離をとる

魔理沙「先手必勝!!『魔符ミルキーウエイ』」

そして魔理沙はいきなりスペルカードを宣言した

魔理沙の前には魔法陣が現れ、そこから数々の星屑型、大小様々な弾幕が幽々子に向かって降り注ぐ。

弾幕は隙間があまり見えないほどに密度が濃く、まるで天の川のようだ。いかにも魔理沙らしいスペル。

幽々子「あら…『亡郷　亡我郷　—自尽—』」

幽々子は魔理沙のミルキーウエイを見てクスリと扇子を口で隠しながら妖しい笑みを浮かべ、スペルを宣言した。

幽々子からは多くのカラフルな弾幕やレーザーが放たれ、魔理沙のミルキーウエイを相殺する。

その弾幕は決して特別密度が濃いわけではない。しかしその威力は魔理沙のスペルを相殺するには充分だ。

激しく吹く爆風と共に両者は視線を交わして言つた

魔理沙「…いくぜ！」

幽々子「まだまだよ」

魔理沙は幽々子の弾幕を警戒し、幽々子の周りを球を描くように旋回し、軽々と幽々子の弾幕を躲していく。

しかし魔理沙の表情は苦々しいものだつた。

魔理沙「(くそ…隙がないな)」

幽々子の弾幕は特別威力や速さが優れているわけではない。

しかし蝶型の弾幕はゆっくりとしたペースでも奇想天外な動きをする。

その上大玉やレーザーが交じると、非常に避けにくい攻撃となる。

そのため魔理沙は解決策を見い出せないでいた。

その密度の濃さに、魔理沙は圧倒されていたのだ。

幽々子「こないの？なら遠慮なく…召符『蝶の扇』」

魔理沙「……！」

魔理沙は幽々子の攻撃に静かに驚かされる。

幽々子の数メートル頭上には、紫色に輝いた大きな蝶が出現し、羽ばたいている。その全長は魔理沙の身長の二倍ほどはあるだろう。

幽々子「……発射」

そしえ幽々子がそつと口づさむと同時に、蝶の羽にあつた円状の鱗粉から、青、黄色のレーザーが発射された。

さらにそのレーザーは枝分かれしながら直進していく。

幽々子は蝶の行動に囚われることなく自身で弾幕を発射しており、かなり厄介だ

魔理沙「……仕方ない、恋符『ノンディレクショナルレーザー！』

（あまり使いたくはないが……）

魔理沙は魔力を惜しみながら、スペルを宣言する。

そして多数のレーザーと共に星型の弾幕を発車された。

威力はなかなかで、蝶と幽々子の弾幕を返り討ちにした

幽々子「……中々できるじゃない」

幽々子は一旦弾幕を止め、魔理沙の様子を伺い、笑みを浮かべる

幽々子「でも、、、終わりなようね」

幽々子は目を鋭く変え、空中にふわりと浮き上がつていく。そこには余裕が見られた  
魔理沙「……はあ……はあ……」

魔理沙は冥界に来るまでにかなりの体力が失われていた。威力重視の弾幕を放つ魔  
理沙故のミスだろう。

また、スペルも魔力が少なくなつており、後1回分ほどしかない。  
どんな人が見ても魔理沙が圧倒的に劣勢の状態だつた。

幽々子「終わりにしましよう：『反魂蝶／参分咲』」

幽々子は扇子を高々と上に挙げ、スペルを宣言された。  
恐らく魔理沙との決着をこれでつける気だろう。

魔理沙から見て前方、また斜めからは  
蝶弾がヒラヒラと舞い、その間からは大玉やレーザーが魔理沙に放たれる。  
数々の種類の弾幕を無事躱すだけの体力は魔理沙にはもうない。

魔理沙「くつ… そお!! マスタああああスパあああああク!!!!」

魔理沙は攻撃回避の無理を悟り、やけくそなのか力技で幽々子の弾幕を消し去るべくスペルを宣言した。

そしてマスタースパークは激しい光熱を出しながら幽々子の弾幕をあつという間に相殺した。

そして魔理沙は八卦路を幽々子に向ける。あわよくばこのまま幽々子を倒してほしいという希望を込めて

幽々子「残念ね、楽しかったわ。

召符『妖々しい風』

だが、それは更なる幽々子のスペルで崩された。

幽々子はもう一度あの妖蝶を召喚したのだ。

その妖蝶はものすごい勢いでその大きな羽をさらに巨大化させ、羽ばたき始めた。蝶からはものすごい強風と共に、まるで鱗粉のようにたくさんの黄色の弾幕が魔理沙

に向かつて吹かれる。

魔理沙は何か弾幕を躲そとするとも、嵐のような風圧で動きが大きく鈍り、その力を発揮できない。

魔理沙「…」

魔理沙は何も言わず篠を止め、自身の負けを認めたのか、目を閉じた

その時だつた。

靈夢「なーにやつてんのよ!!」

靈夢が魔理沙の後方から門を突き破りながら全速力で魔理沙の方へ向かつてきた。

靈夢「封魔陣!!」

靈夢は素早くスペルカードを宣言し、幽々子の弾幕を相殺。魔理沙の危機を救つた。

魔理沙「……つと、靈夢か。助かつたぜ。……すまない、一度眠る」

魔理沙は靈夢を見て安心したのか、そのまま目を閉じて箒からバランスを崩し、靈夢の元へ倒れ込む。

靈夢「魔理沙!…………つて寝てるだけじゃない。焦らさないでよ。」

靈夢は魔理沙の頬を軽くビンタし、白玉楼に寝かせる。

幽々子「……來たわね。紅白の蝶」

幽々子は口元を扇子で隠しながら妖艶な笑みを浮かべ、靈夢に強烈な殺気を向ける。それは幽々子の能力も関係してか、より強く靈夢は感じているようで、顔には表さないものの全身に鳥肌が立ち、体中が警告を発している。

靈夢「……アンタの企みもこれでおしまい。さつさと春を返しなさいよ。こつちは寒くて迷惑してるの」

靈夢はそんな状況でも苛立ちを幽々子に向かって表し、お祓い棒を向け敵意を顕にして挑発する。

幽々子「… 私はこの桜を満開にさせたいだけ…。あなたが私を邪魔をする以上、私もあなたを邪魔させてもらうわ。」

幽々子は更に深い笑みを浮かべ、妖力を体全体から放出していく

幽々子「…（もう私も危ない… 1発で蹴りをつける。」

靈夢「（これを防ぎければ私の勝ち… なら）」

幽々子「ラストスペル 桜符『完全なる墨染の桜 —開花—』

靈夢「… 夢符『二重結界』」

2人はほぼ同時にスペルを宣言する。

幽々子は巨大な弾幕を靈夢に向け発射した。

それは靈夢に近づくにつれ少しづつ分裂して小さくなり、靈夢の前につく頃にはそれぞれ粒弾ほどの大きさになっていた。

密度が中でも特に濃く、さらに靈力を惜しげも無く使つたためか粒弾でさえも威力も申し分ない。

靈夢「… !!」

その弾幕を見て靈夢は策を閃いた。

靈夢は自身の周りに大きく展開していた結界の範囲を狭め、狙われる範囲を限定することで靈力を1点に集中させた。弾幕は拡散しており、結界を大きく展開すれば靈力を無駄に使ってしまうからだ。

その策のおかげで結界の強度が上がり、靈夢は何とか幽々子の弾幕を防げる。

そんな攻防をしていた矢先突然幽々子が突然バランスを崩し、地に落ち始めた

靈夢「!?

靈夢は驚きつつも幽々子に向かつて全速力で駆け寄り、落下を止めようとする

が、その心配はなかつた。

幽々子の落下地点にはスキマが展開され、幽々子がその中にスッポリと入つたからだ  
そしてその後スキマは閉じた。

靈夢は走り出した足を止め、その犯人を見て一言言い放つた

靈夢「… 紫、何のつもり？」

靈夢は明らかに態度が急変し、敵意をむきだしにする。まるで親の敵に会ったように。

紫 「… 幽々子は弱っていたのよ。あのままでは成仏しちゃうわ。だから気絶させた」

靈夢「… あの桜のせいね」

靈夢はほぼ開花してるといつてもいいような西行妖に視線を向ける。  
そこからは見たくもない莫大な妖力が溢れている。

紫 「ご名答。

さて話し合っている時間はないわ。あの妖怪の開花を止めるまでよ」

靈夢「…。

靈夢は何かいいたげだつたが、それを飲み込み西行妖に視線を向け、力を集中させる

西行妖

!!!!!!

妖力・靈力を高めている2人に、声にならない咆哮がこだました  
耳を破壊するような咆哮は、まるで悲鳴のようにも聞こえる。

紫「ツ！ 脣膚『二重黒死蝶』」

靈夢「博麗奥義『永獄結界』」

2人はそれぞれかなりの大技を繰り出した。  
靈力の消費が激しい分その効力は計り知れない。

西行妖はこれまで叫んでいた咆哮を突如やめた。

靈夢と紫の周りは、結界のジリジリとなる音以外聞こえない。辺りは静けさにつつまれていた。

西行妖「つつ!!!!!!」

そう思つたのもつかの間。

西行妖から伸びていた数々の枝はあつという間に巨大化し、そこに妖力が集中され始めたのだ。

そして枝先には妖力であろう球状の塊が出来ていた。それらはどんどん巨大化していく。

紫「ツ！来るわよ!!」

靈夢「言われなくとも！」

紫と靈夢は危機を察知し、さらに結界に靈力を加える

そして、凄まじい光熱と共に、濃い紫色のレーザーが西行妖の複数の枝から放たれた。

靈夢「グウっ……」紫「……！」

紫と靈夢は苦しそうに呻く。それもそのはず。一つ一つのレーザーはあまり太くない。しかしそれぞれ魔理沙のマスタースパークを少し上回る程度の威力を持つており、大妖怪から見ても高威力だ。

それを同時に複数受け止めるのは、二人がかりでもかなり厳しいはずだろう。

靈夢「……まだまだ！」

しかし、靈夢と紫は意地で何とかその攻撃を防ぎきる。

ただ、2人は今の攻撃だけでかなり体力を使つたようで、それぞれの腕がプルプルと震えていた。

それほどまでにこの西行妖は恐ろしいのだ。

西行妖「!!!!!!」

そして西行妖はさらに2人に攻撃を仕掛けるため、枝先にまた妖力を溜め始める

紫「……流石にキツイわよ！」

靈夢 「… でもどうすれば… !!」

2人はエネルギーを溜める音に負けないよう大きな声で話している。  
だがお互い結界維持が精一杯で攻撃弾幕を放つ余裕はない。万事休すだつた…

妖夢 「お待たせしました！」

咲夜 「結界に人が入れるほどの穴を！」

## 冬と春

靈夢 「!?あんたら傷は大丈夫……ではなさそうね」

そこに2人の救世主が現れた。咲夜と妖夢は傷だらけながらも膨大な妖力を感じ取り、何とか駆けつけてくれたのだ。

靈力はまだほぼ尽きていたが、体力は何とか復活しているのか、全速力で靈夢達の傍に駆け寄つてくれた。

そして紫と靈夢は咲夜に言われた通り人が通れるほど穴を開けることに成功。

その中には咲夜と妖夢が入り、目が追いつかないほど素早い早さで西行妖の枝を切つている。

枝はすぐににょきによきにすごい勢いで再生しているのに、だ。

妖夢達はそれでも攻撃止めない。

なんとか西行妖を倒す手段を思いついてもらうべく、少しでも時間を稼ごうとしているのだろう。

靈夢 「……紫！ 式神はどうにかならないの！」

紫「…っ、わかつたわ！少し結界を強めてくれる!?」

靈夢はその言葉に頷き、一時的に自身の結界をより強く強化する

紫「…藍！ 6人を至急探してきて!!」

紫はスキマを開き、式神である藍を召喚した。

藍はその紫の様子に酷く驚いていたが、

妖桜を見て、すぐに自分のやるべきことを確認した

藍「…わかりました。何とか持ちこたえてください!!」

藍は自身の妖力の8割ほどを紫に託し、全速力で6人の元へ向かつた。

その時

突如西行妖の枝が再生しなくなつた。

咲夜「!? チヤンス‥」

妖夢「今です!」

妖夢と咲夜はその機会を見逃さず、より攻撃を速くしていく。

靈夢「駄目つ!? 戻りなさい!」

その時咲夜たちの頭上数メートル、つまり西行妖の中央部からは、巨大な球状の黒いエネルギーが出現し、辺りの石や土をまきこみながらどんどん大きくなつていった。

その大きさは既に紫の身長を超えている。

それを見て、慌てて紫は妖夢達の足元にスキマを開け、妖夢達を自分達の近くに落とした

妖夢「うわっ!?」

咲夜「つ‥ たあ‥」

2人は尻もちをついたのか、腰を擦りつつ妖桜の様子を見て驚いている。

紫「境符『4重結界』」

紫は二人の安否をチラツと振り返り確認し、すぐさまスペルを重ねて掛ける事にする。

そしてそれ妖力を大量に使うにもかかわらず無事に成功した。  
藍の支援によつて紫の妖力はある程度回復しているからだ。

咲夜「後は頼むわよ、靈夢」

妖夢「貴女に託します……！」

咲夜と妖夢は靈夢の両肩に手を当て、自身の靈夢にほぼ全ての靈力を与える。

その量は確かに少ないものの、靈夢の持つ靈力と合わせれば、スペル発動には十分な量になる。

靈夢「……夢境『二重大結界』」

靈力を受け取つた靈夢は2人の靈力を使い、紫と同じく結界を重ねがけする。

西行妖「ウウウウウツ……！」

そのスペル4枚に流石の西行妖も苦しんでいるようで、唸り声を上げる。

しかしそれでも西行妖は妖力のチャージを止めない。そこにある何か強い邪念を靈

夢達は感じとつていた。しかしそれを言葉に出す余裕はない。

一方咲夜と妖夢は靈力、体力共に限界に達し、とうとう近くの壁にもたれかかったあとゆつくりと目を閉じ、気絶した。

ここまで靈力と体力を酷使すれば、気絶も仕方の無いことだろう。  
寧ろここまで戦えるとは誰しもが予想していなかつたはずだ。

西行妖 「!!!!!!」

西行妖は咆哮と共に、妖力の塊が突如紅い魔法陣に変形させ、そこから謎の黒いレーザーを発射した。

太さは魔理沙のレーザーのおよそ2倍ほど。  
だが威力は桁外れで、あつという間に紫と靈夢の結界が合わせて二つ、一瞬で破壊された

靈夢「くっ、あんたの式神はまだ!?」

靈夢は一つの結界に必死に力を込め、なんとかレーザーを封じ込めようとしている。

紫「… 多分桜の妖力が邪魔しているのね…！もう少し持ちこたえるわよ！」  
紫も靈夢と同じく、結界にあるだけの妖力を込め、藍の到着を待つている。

しかしその努力も虚しく、結界には徐々にヒビが入っていく。

靈夢「… つ… なんて化物桜よ。これはおかしいわ」

靈夢は唇を噛み締め、時に血を出しながら西行妖の攻撃を耐えている

紫「… これはもうダメね… いい。よく聞くのよ！一旦退避するわ！」

3… 2… 1!  
！」

その瞬間、結界がパリンとガラスのような音をたて崩れ落ちていく。  
キラキラと光る結界の破片が空中を舞つた。

レーザーはさらに高速で突き進む。2人は全速力で遠ざかるが、その予想以上の速さ

に、距離をあつという間につめられる。

靈夢 「… 何したのよ、あんた」

紫 「知らないわよ… はあ、こんなはずじゃなかつたのに…」

空を浮かび二人の顔は、笑っているようにも見えた。

そしてレーザーが2人を飲み込んだ

はずだつた。

將信「真打ちとうじよーう。なんてね」

なんと急遽駆けつけた將信は、西行妖のレーザーを、たつた1本の矢で相殺したのだ。

靈夢「……ふふふふ、遅いわよ。」

思わず靈夢は待ちかねた英雄の登場に安堵を覚え、笑みを浮かべた

將信「…？、じゃあ峠お願ひねー」

將信は何故靈夢が笑ったのか困惑している。

峠「了解。展開『ミラーウォール』

峠は西行妖の全方角に結界を展開。西行妖の動きを封じた。

剛「…さあて、どうするんだ？これ」

剛は西行妖に目を向けながら、將信に打開策を求める。

將信「うーん……早くしないと流石に峠も辛そうだよね……」

紫「……話を遮るようでごめんなさい。藍はあなた達の元に来たかしら？」  
紫は剛に目を向け、藍の安否を心配する。

剛「ああ、アイツなら今人里だ。華憐と結衣にも手伝つて貰つて、こここの近くの人を避難させてる。外まであの妖気が漏れてるからな……」

それで、お前はこの西行妖について倒す方法を知つてるのか？」

將信「僕達は結界の展開は出来ても封印は出来ないからね……。このまま倒しても妖力が爆発して危険だし。」

紫は胸をなで下ろした後、剛の問い合わせに対ししばらくうつむいて考えた後、言葉を発した

紫「……わかつたわ。出てきていいわよ」

そしてそこには、いるはずのない人物が現れた

靈夢 「…… 博麗の巫女…… !?!?」

靈夢は思わず驚愕に目を見開き、口が半開きの状態で固まっている。

峠 「んー？…… あ、鈴か、久しいねえ」

峠は結界を展開しつつ、少し大きめの声で初代博麗の巫女に話しかけた

鈴 「あ、あんまり皆さん驚かないんですね……。靈夢さんみたく驚くかと思つてまし

た……」

鈴は下手な苦笑いで、恥ずかしそうに頬を人差し指で搔きながらメンバーに目を向ける。

剛 「それで？ なんでお前生きてるんだ？ あらかた『未練があつたから』とかだろうが」

鈴 「……！ とりあえず西行妖を封印しましよう」

鈴は図星なのか目を一瞬見開いた後真顔になる

峠 「（ゞ）まかしたな」 將信 「（ゞ）まかしたね」

鈴 「うう……いいです、封印するので待つて下さい……」

靈夢 「……あの、初代さん、幽霊になつてもスペルが使えるの？」

鈴 「あ、初めまして。ええ使えますよ。ただ人型にならないと使えませんが。意識しないとただの浮遊霊に戻っちゃいますし。」

スペル？ てのは私達の頃はありませんでしたが。」

彩 「かなり前から私達のことを見ていましたよね？」

鈴 「お恥ずかしながら……。皆さん健康的で安心しましたよ」

つと、そろそろですかね」

鈴は急遽お札を地に並べ、何やら読唱を始める

西行妖「ウウウウウウウウウウウウウウ

!!!!!!!!!!

紫「あれは…」

峠「…始まつたね。展開止めつと…」

そうだ。彩は、咲夜達の応急処置手伝つてもらえる?」

彩「ええ、わかりました。…とりあえず白玉楼の中に運びましょう」

彩と峠はそそくさと白玉楼の中へ2人を抱えて入つていつた。

靈夢「…あれ何よ。なんで結界を貼つてないのにあの桜はあんなに苦しんでるの？」

紫「あれは初代が生み出した奥義。妖怪封印の為しか用途がないから、よほど強い力を持つていらない人間じやないと見えないわ」

鈴「……はつ！」

そして鈴が大きく靈力を爆発させた途端、全てのお札が空中に浮かび上がり、西行妖の木の周りを回転するようにして動き始めた。

お札との間には黄色の線が見える。

鈴「これで、終わりです！」

鈴は両手をごちそうさまのようにして叩き、術を終了する

西行妖「キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ……」

鈴の言葉と同時にお札達はそれは木に括りつけられ、西行妖を締め上げる。そしてその断末魔を最後に西行妖は動かなくなつた

剛「よし、色々聞きたいことはあるが、これで一旦終了だな」

剛は息をつき、その場に座りこんだ。

妖桜はすっかりその妖力を失い、静まり返つていた

峡「ああ……疲れた。」

峠は手をブラブラと振つてゐる。

將信「うわ、大丈夫だつた？ 汗かいてるけど」

峠「大丈夫だよ。ただ暴れてたから結構靈力使つちゃつたなあ。」

將信「ならいいけど……あ、靈夢達はどうする？ 皆自力で帰るのは無理だとと思うけど……」

紫「私はまだ幽々子と話さないといけないから、ここに残るけれど……」

剛「スキマは開けなさそうか？」

紫「残念ながら、幽々子の分くらいしか妖力が残つてないわね」

靈夢「私は体力はあるから、一人で変えられるわよ？」

剛「……もう夜だからなあ。」

俺は料理を作るから家に戻るが……咲夜と魔理沙は2人に頼めるか？

彩も一応、靈夢について行つてくれ

將信「大丈夫だよ」峠「了解」

i n 紅魔館

將信「……よつ、と。美鈴さんは……うん。」

將信は紅魔館の門の前に着陸し、美鈴の姿を確認する。

美鈴 「…… Z Z Z . . .」

將信 「相変わらず羨ましいぐらいぐつすり寝てるなあ……うーん」

美鈴の気持ちよさそうな寝顔を見た將信は美鈴を起こすべきか躊躇うが、結局美鈴を起こすことにした。

將信 「おーい、美鈴さん?」

將信は美鈴の肩を揺すって、声をかける

美鈴 「…… ハツ! 寝てませんよ!」

美鈴は寝ぼけているのか目を擦りながら辺りをキヨロキヨロ見回している。

美鈴 「…… つてなんだ將信 s . . . 咲夜さん! ?」

美鈴は將信がお姫様抱っこしえ抱えた咲夜を見て、驚きを隠せない。

將信 「まあ色々あつてね……」

レミリアに聞けば分かると思うよ。咲夜さんは気絶してるだけだから大丈夫。けど一応今日はゆっくり寝かせたほうがいい

美鈴 「…… ! わかりました。將信さんすみません。咲夜さんを運んでくるので、しばらく門番を変わって頂けませんか?」

將信「ああ、全然構わないよ」

美鈴「咲夜さんをありがとうございます‥‥！」では少々お待ちを」

美鈴さんは門を開け、急いで紅魔館の扉を開け、中に入つていつた

i n 魔法の森

峠「‥‥ ここか。」

峠は魔理沙の家の前に無事到着した

峠「‥‥ 鍵がないな。えーっと‥‥」

峠は魔理沙のポケットをガザゴソと探り、魔理沙の家の鍵を探す

??? 「え、え？ 魔理沙？」

峠「ん？」

峠はふと探すのをやめ声の響いた方向を向く。そこには金髪で、まるで人形のような

顔立ちをした少女が立つていた。

峠「知り合い？ なら後はt」

アリス「え、泥棒？ 山賊？ それとも‥‥まさか‥‥」

アリスは傷だらけ魔理沙の体に触れている峠を見て、魔力を一気に爆発させる

峠「ちよ、誤解があ r」

アリス「問答無用!!」

# 異変と宴会

i n 紅魔館 門前

美鈴「お待たせしました。」

美鈴が將信に門番を任せて数分、美鈴は駆け足で將信の元へと戻ってきた。

將信「いや全然大丈夫。んじゃ僕はこれだ」

美鈴「あ、待つてください。お嬢様がお呼びしているんですけど……何やら話があると  
か」

將信「……話？明日じやダメかな？」

美鈴「うーん、すぐに済むそうなので、出来ればお願ひしたいなあ……って」

美鈴はぎこちない苦笑いを將信に向ける。美鈴は幻想郷の中でもかなり温厚な方な  
のだろう。

將信「ん——……わかった。部屋にいるんだよね？」

(少し遅れるだけなら許してくれるだろうな……)

美鈴「はい。ありがとうございます！」

ほんの数秒將信は悩んでいたが、結局レミリアの元に向かうことにした。

i n レミリア自室

レミリア「…来たわね」

レミリアは少し背丈の合わない大きめの椅子に座つて、將信を迎えた。

紅を貴重とした部屋で、目が疲れそうだと將信はふと思う。

將信は紅魔館には特によく顔を見せており、それなりに信頼されており、顔も知られているため、妖精メイドにばつたり会つても追い払われることはない。

將信「お邪魔するね~」

將信はドアを丁寧に閉め、レミリアの向かい側にあつたソファに腰掛ける

レミリア「時間もなさそうだし、簡潔に話すわね。… 咲夜は何故傷だらけに? 異変解決だけでここまで酷いと思うんだけど…」

レミリアは咲夜の体調を心配しているのか、少し表情が暗いように將信には見えた。能力故なのか、將信は相手の心情の変化に敏感になつていたのだ。

將信「ああ… 異変解決自体はすぐに終わつたんだよ。犯人は冥界の者。西行妖を咲かせかけたから、苦戦して傷だらけになつたんだと思う。レミリアは西行妖を知つてゐ

？」

レミリア「…ついさつきね。買い物から帰ってきた妖精メイドの顔が青ざめてて  
びっくりしたわ。人里の近くにまで妖気が広がるなんて、正直勝てる気がしないわ。」  
将信「実際僕らもびっくりしたなあ。あの紫と霊夢が二人がかりでも負けかけるぐら  
いだからね」

レミリア「へえ…そこで将信達が登場したのね？ 流石ねえ、将信様？」  
レミリアは頬杖をつき、ニヤニヤとしている

将信「あはは…」

レミリア「あなたには紅魔館のメイドにぜひなつて欲しいわね。主に護身用として」  
将信「どつちかつて言うと執事じやない…？まあ、執事は遠慮する。もうしばらくは  
のんびりしたい」

レミリア「あんたは何億年のんびりしてるのよ！」

レミリアは机に頃垂れた。その姿は最初のカリスマ溢れる姿とはまるで違う。それ  
は心底将信への信頼を表現しているようにも見えた。

将信「まあまた遊びにくるから…」

将信は背もたれにもたれかかり、欠伸をした

レミリア「そうねえ。… これで私の話は終わりよ。將信も早く帰つた方がいいんじゃない？」

レミリアは時計をチラツと見る

將信「確かに、じゃあそろそろ帰ろうかな。… ああそう、今度異変の終了を祝して宴会があるけど、レミリア達も来るかい？」

レミリア「是非行かせてもらうわー。フランも喜ぶかしら」

將信「了解。じやあまた今度」

レミリア「ええ、また今度」

——將信はレミリアの元を後にして——

i n 空 彩・靈夢 s i d e

靈夢「… 大丈夫よ」

靈夢と彩は上空を高速で移動している。天狗には届かないものの人間は本来空を飛べない。人間としてはトップレベルの速さを持っていた。3人を除いて

彩「念には念を、ですよ」

彩は靈夢の顔にある小さなかすり傷に絆創膏を貼つてある。誰に似たのか、彩は気遣いをよく見せる。それが不快に感じるものはいるだろうが。

靈夢「……そういえばあんた、付喪神でしよう？ いつからここにいるのよ」

彩「……正直覚えてないです。外の世界の古代から生きていますから、記憶もかな

り曖昧になつてきます」

靈夢「ふーん……」

靈夢は再び前を向き、飛行に集中している、

彩「……靈夢さんは、西行妖に何があつたのか知っていますか？」

靈夢「……そんなの私が教えて欲しいわ。紫が何か企んでたんでしょうけど」

彩「私にも分かりませんが……とにかく今回の異変は予想外な展開でした。まさかあんな木が冥界にあるとは誰しも流石に思いませんよ」

靈夢「冥界といえば、鈴？ とかいう初代巫女さんは何故まだこの世にいるのかしらね。心残りがあるとかいつてたけど。歴史書には特に悪い事は載つてなかつたけど

靈夢は半月を見た後速度をさらに上げていく。

幻想郷

彩 「何か心残りがあるんでしようね。あらかた予想はつきますが」  
彩は頬に両腕をあて、乙女のように赤面する。正直面目な彼女とのギャップは半端ない。

靈夢 「…？あんたわかつてるの？」

靈夢はポカーンと疑問を浮かべている。

彩 「そりや、まあ、わかりますよ。3人にあつた時の表情見ました？」

靈夢 「…………まあ、照れてたわね。それがどうしたの？」

彩 「…。もういいです」

思わず彩は真顔になり、話題を無理やり打ち切った。

靈夢 「な、なによそれ…。気になる」

彩 「もう神社に着きますね。ではこれにて」

彩は逃げ出すようにその場を去つた

靈夢「あつまちなさ……つて私より速いじゃない……はあ、なんなかしら」

靈夢「…ああ、宴会の準備もしないと…」

靈夢は食材の少なくなつた河童特性の保管boxを見て、呟いた

i n 魔法の森

アリス「よくも魔理沙を！」

アリスは様々な武器を持たせた何体もの人形を自在に操り峠を攻撃している。

峠「だから誤解だつて！」

峠は解決策が見えていないようだが、人形がアリスのものである事は明らかなため、傷つけないよう結界を開け攻撃を防いでいる。

アリス「それなら：操符『乙女文楽』

アリスは人形達の攻撃が効かないことを把握し、すぐさまスペルを宣言する

赤色と青色の様々な形をした弾幕が峠を襲う。この魔力を見た峠はようやくアリスが魔法使いだという事に気づいた。

峠「…つ」

(魔理沙より魔法量が多い…魔法使いの種族か。)

す

峡は人形を壊さないよう弾幕を屈折させながら、情報をもとに考察、最適案を導き出す  
 峠「…（この感じだと魔理沙とは友人同士だろうな……すまない魔理沙。あと  
 は頼んだ）

アリス「… 消えた？ 一体どこに… みんな、頼むわよ」

アリスは人形を分散させ峡を探す

峡「…」

峡は視線を反射させ、身を隠した。

そして峡は魔理沙に心の中で謝りつつ、家へと戻った

数十分後

魔理沙「… 私の家…？ 確かあの後気絶して… いたたた」  
 魔理沙は頭痛により、包帯で巻かれた頭を押さえている。

アリス「あ、魔理沙起きた？もう少し寝てた方がいいわよ」

アリスは紅茶を入れながら、魔理沙に話しかける

魔理沙「ああ、アリスがここまで運んできてくれたのか？」

魔理沙は再びベッドに横になつた

アリス「？」、あなたさつき森で倒れてた所を変なやつに襲われてたのよ。大変だつた  
んだから」

魔理沙「え？ 私が？ 私は異変解決してた途中で気絶しちやつたんだが……」

アリス「あら、そうなの？ ならアイツは一体何を……」

魔理沙「アイツ？」

アリス「背は靈夢より高いくらいの、和服で、灰色の髪。私は盜賊か何かだと思つて  
弾幕ごっこ挑んだんだけど、逃げられちゃつて……」

魔理沙「…… 峠だな。それ。」

峠は苦笑いしてアリスに話しかける

アリス「あ…… もしかして知りあい？」

魔理沙「そうだぜ、私の家の鍵探してたんじやないか？ まあ帽子の中に隠してたから

アリス以外は教えてないし、分からなかつたと思うが。」

アリス 「… いつか謝らないといけないわね」

魔理沙 「アリスは思い込み激しいからなあ。あの冥界の庭師みたく」

アリス 「そりやあ目の前で友人がが体触られてたら抵抗するわよ…」

アリスは紅茶を魔理沙に手渡し、自身もまた紅茶を飲む

魔理沙 「まあ勘違いは誰にでもあるぜ。あまり突発的に行動しないようにな」

アリス 「… 魔理沙にそれを言われる日が来るとは思わなかつたわ」

アリスは思わず深いため息を吐く

魔理沙 「まあ、宴会もあるだろうしその時に謝ればいいさ」

アリス 「… そうね。」

# 酒と鬼

春が来ない冬も終わり、短かかつた、けれど壯大だつた春も終わりを告げ、緑が生い茂つた頃、一部の者達は再び異変が起こつてゐる事に気づき始めていた

峠「……ねえ剛、気づいてる?」

剛「……何がだ?」

峠「宴会だよ。流石に開きすぎだと思わない?」

剛「ああ、皆気づいてるんじゃないか?俺は宴会好きだからこの異変はしばらくこのままでいいが」

二人は白玉楼の庭で將信と妖夢の稽古の様子を見ながら、この異変について話し合つてゐる。

峠「流石に1週間に3回以上やるのはキツイよ……主に準備手伝わされるから」

剛「ははは、そうだな、違ひない。」

將信「何の話?」

將信は一旦稽古をやめ、水をたっぷりと吸つたタオルで体を拭きながら、二人に近寄つた。どうやら会話の内容に興味を持つたようだ

峠「この宴会の多さだよ。將信は気づいてた?」

將信「んー、まあね。ただ動機がわからない。宴会をこんなにさせて主犯は何がしたいんだろう?」

妖夢「あ、皆さんも気づいてらつしやつたんですか?」

妖夢は將信と剣の鍛錬をしていたからか、汗で所々服が体に張り付いていた。人によればそれは色欲を搔き立てる

剛「ああ。紅魔館と白玉楼のメンバーは大体気がついているらしいな。靈夢達が気づいているか気になる所だ」

將信「そうだね。後妖夢、一回お風呂に入つて来たら?しばらく休憩しようよ」

妖夢「?: ?: あ、そ、そうですね。少し失礼します」

妖夢は自身の状態を見て静かに赤面しつつ、急ぎ足で屋敷の玄関へと向かつて行つた。

峠「、それで、今回は参加する?」

彩「……今回はあまり大掛かりな異変でもないですし、幻想郷への影響は少ないので参加しても……だとは思いますが……」

剛「じゃあ決定だな！俺は犯人の検討がついている。宴会好きでここまで妖霧を分散させられる力を持つのは、あの種族のみだろう」

剛は口元を三日月のようにニヤリと吊り上げた

3日後 in 博麗神社

3人は再び始まつた宴会を見つからぬようこつそりと神社から抜け出し、博麗神社の近くにある大木の近くに向かった。

皆酔つていたせいか抜け出すのは簡単だつた。

将信「……はい」と

将信は両手どうしをパチンと合わせる。そうするとみるみるうちに霧が引いていき、とある人物の姿が顕になつた。

??? 「!?'私の変化が解けた……？」

将信の能力の行使により3人の前には背が低めで、2本の角を生やした鬼が見えるようになつた。

峠「この妖しい霧の原因は君か……」

峠は鋭く目線を変える

??? 「よく分かつたね。まあ他にも気づいてるのはいるっぽいけど……」

萃香は大きな切り株に腰掛けながら、腰にかけている瓢箪の中の酒をゴクゴクの飲んである。

峠「それで、何度も宴会を行わせるわけは?」

??? 「そんなの単純。ただ宴会が好きだからさ、私ら鬼は宴と喧嘩が大好きだからねえ」

剛「……お前のことは知っている。山の四天王、伊吹萃香」

萃香「……へえ、あんた出来そうだね」

その一言で萃香は剛を観察し、立ち上がった後、剛と同じように口元を吊り上げる

剛「その為にきたからな。お互い弾幕なしの真剣勝負だ。能力行使はありでな」

萃香「…いいだろう。久々の強敵じやないか。腕がなるねえ?」

剛と萃香は互いにある程度距離を取り、それぞれが構える

剛「悪いが2人とも、手だしは無用だぞ」

峡「…了解。展開 『ミラーオール』

將信「隠蔽 『不可思議な境界』」

峡は2人の近く一帯に大きく結界を展開した。

剛と萃香が戦えば森が粉々になる事は目に見えているからだ。

そして將信も峡に続き結界を展開した。

それは峡の結界を覆うように広がった。

結界によつて、周りの人からはこの一帯には立ち入ることが出来ず、ここを認識する事もできない。

結衣「じやあ合図は私がするね! 3、2、1、始め!!」

互いはほぼ同時に踏み出した。

萃香「はっ！」

剛「…」  
まず仕掛けたのは萃香だ。鬼の剛力を活かすため、顔に向かって物凄い勢いで拳を剛に向つて振り下ろした。

剛「…」

剛はそれを首をずらし寸前で躱す。どうやらその判断は間違つていなかつたらしく、剛の後ろの木は衝撃波だけでなぎ倒され、地面が大きくえぐれている。

どんなに靈力で体を強化しても、人間と鬼では体の丈夫さが違う。靈力を大きく行使すればその後の戦闘にも影響するため、身体能力の強化は最小限で行わなければならぬ  
い

萃香「まだまだあ！」

萃香はさらに畳み掛けるように胴体に連続でパンチを繰り出したあと、回し蹴りで剛を狙つた

剛「…」

剛はそれを無表情で後退しながら躱していき、回し蹴りを両腕でクロスさせるようにして受け止める。

どうやら靈力を1点に集中させて強化したため、腕も壊れずに済んだようだ。

剛は大きく後方に吹き飛ばされるが、後方に体を回転させ、無事着地する

萃香「へえ… やるじやん」

萃香は一度後方に下がり、剛の出方を伺っている

萃香「じゃあ… これはどうかな」

萃香は自身を分散させ、霧と化した。この能力を使い異変を起こしたのだ。

剛「…ここまで広がれば見つからないはずだな」

霧は四方八方、縦横無尽に結界中全体に広がっている。

これでは死角が多くなる。単独の人間では防衛が不可能だ。

そう、ただの人間なら。

萃香「…（よし…）」

華憐「將信には萃香がどこにいるのか見えるのかしら？」

5人は少し離れた場所で2人の一騎打ちを観戦している。

將信「なんていうか、あの霧全部萃香だからねえ。まさに油断大敵…。どこからでも攻撃できるよ」

彩「…それは面倒ですね。こちらからも攻撃出来ないんですか…」

峠「…あの目は、何か企んでるようだけど」

萃香「神出鬼没ってね！」

そして突如、萃香は腕に妖力を込めた状態で剛の頭上数メートルに出現した。流石の剛も頭上を警戒する事はないだろうと考えたのだろう。

萃香は思い切り剛に腕を振り下ろした

が、結果は空振り。剛が目の前にいるにもかかわらず、だ。

萃香「!?

剛はニヤリと笑い、萃香を見て胴体めがけて腕を振るい、そのまま上向きに吹き飛ばした

萃香「ぐあつ‥」

思わず肺の中の空気が吐き出され、苦しそうな声がもれる。萃香は両腕でその攻撃を受け止め、鈍い音がした後また霧に紛れた。

そして数秒後、剛の数メートル前方に萃香は現れた。腕や拳が血だらけの状態だ

萃香「今のは流石に効いたよ‥。あらかた能力は、時間‥速度を操るつてところかい?」

萃香は攻撃をもろに受け、両腕が折れたはずだが、妖怪の再生力のおかげで8割方回復しているようだ。徐々に血は止まつていく

剛「‥大体あつてる。お前は、集と散を操る能力つてところか?それで皆を集めたんだろう。散らして見えなくした」

萃香「大体あつてるね!」

萃香「でも、まだ人間に負けるわけにはいかないのさ！ 鬼神『ミツシングパー・プル・パワー』」

萃香はスペルカードを宣言した。突如みるみるうちに萃香は巨大化する。最終的にその全長はおよそ剛の二倍に到達した

萃香「これで終わり 鬼技『デーモン・パワー』」

萃香がスペル宣言後右腕を頭上に上げると、周りの岩が旋風のように萃香の腕周りを回つっていく。

そしてそれが同時に萃香の右腕に付着し、それらの岩は萃香の妖力に反応し、赤く光る。

萃香「ハアアッ！！」

巨鬼と化した萃香はそれを思い切り剛に叩きつけた

剛 「・・ 極符 『根幹一撃』」

―――互いの拳がぶつかり、地上には凄まじい砂嵐が吹き荒れた―――

萃香「……つ、負けちやつた…悔しいなあ」

その後萃香は衝撃波で巨大化が解除されながら吹き飛び、木に何度もぶつかった後に静止し、動けなくなつた。

しかし流石鬼と言つたところか。

數十分経つただけで立てるよう今まで萃香は回復していた

剛「…久々に疲れたな。体も傷だらけだ」

剛は一応人間であるため、靈力強化を意識しなければ体中傷だらけになつてしまふ。剛の拳は血だらけで、腕や頬には岩石の破片によるかすり傷や打撲がある。靈力を行使して治癒しても萃香に比べれば圧倒的に完治に時間がかかるだろう。

萃香「…それでも力を加減してたよね？」

まさか私以上化け物が居るとはねえ。驚いたよ」

剛「…といつても半分以上力を使つたがな。  
明日は休むか…」

將信「二人共お疲れ様♪」

將信は萃香と將信に水筒やタオルを渡した。

しかし何故か將信を含む他のメンバーにも所々かすり傷が見える。

剛「なんでお前らまで怪我をしているんだ?」

華憐「あのねえ… 流石にあれだけの力を使つて喧嘩をしたら、風圧で大量の岩石が吹き飛んでくるのよ。流石に怖すぎるわ」

結衣「そうそう。数が多くすぎるし…」

剛「…そりゃあ悪かつたな」

剛は苦笑いして目を泳がせる

峠「…それで、異変は終了…でいいのかな?」

峠は結界を解除して、剛たちの元に歩み寄る

剛「別に俺はまだ終わらせなくて構わないと思うぞ。靈夢達には鬼の力を是非見ても

らいたい」

将信「僕も剛に賛成がなう。紅魔館白玉楼問わざいい経験になると思うよ。」

萃香「そ、そう……ならまだ続けようかな。剛？でいいのかな。負けたけど、楽し  
かつたよ」

剛「……おう、手合わせ感謝する」

2人は握手を交わし、それぞれ宴会へと戻つていった

|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|

i  
n  
???

??? 「……師匠、大変です！こちらを……」

???? 「……早急に対処しなくちやならないようね」

# 日向と日陰

i n 上空

約三週間後、萃香が起こした異変も終了し、また平凡な日常が始まった。

その頃は剛の体調もほとんど回復していた。そこで退屈だった6人は太陽の畠へと向かっていた。

結衣「太陽の畠つて妖怪の山と真逆なんだ。フЛАワーマスターを除けば安全地帯だつたり?」

剛「そうかもなあ……つて、見えてきたぞ」

将信「向日葵だらけだね」

6人は畠の傍に着地し、太陽の畠を観察しながら見て歩く。

そこには多くの向日葵が咲き誇っていた。

それらは全て規則正しく太陽ある方向を向いている。それは恐らく妖精のしわざ、もしくは……

「あら、私の畠に用事でも？」

畠???「あなたが突然現れた。

将信「…あなたが四季のフラワーマスター？ですか？」

幽香「その呼び方はやめてほしいわね。私は風見幽香。…それで、要件はなにかし

ら」

幽香は女性としては背が高めだ。ちょうど将信と同じくらいだろう。

剛「特に用事はない。ここには来たことがなかつたから、退屈しのぎにでもなればと  
考えていたんだ。」

幽香「そう…あなた達はこの畠がどう思う？」

幽香はふと6人に問いかけた

結衣「向日葵達が綺麗に咲き誇っているのもあるけど、虫達もすくすく育つてるよね。  
植物達だけじゃなくて、虫達にとつても楽園なんだろうな。」

峠「手入れもちゃんとされているし、見事だと思うよ。これは君が…？」

幽香「ええ、そうよ。普段はこの近くに私の家があるから、そこで暮らしながら畠を手入れしてゐるわ。よく旅に出てゐるから、いない時も多いけれど」

幽香はニコッとした笑顔を浮かべる。その容姿はまさに花顔柳腰。種族問わずその酔がに惚れる者も多いはずだ。

その周りから放つ妖気を除けば、だが。

その妖力は彼女が紛れもない大妖怪であることを見せつけている。

これではあの記者でさえも近づきづらいだろう……

數十分後

剛「……中々のものを見させてもらつた。……そろそろ失礼させてもらうぞ」

幽香「ええ、ありがとう。それと、今度そつちにお邪魔してもいいかしら」

剛「？ 誰かいるだろうし、来てくれて構わないが」

ある程度畠やその周りの地形を確認し終えた6人は幽香に礼を言い、その場を立ち去つた

さらに数日後

i n 家 a t 夜

彩「ぶつちやけあの方相当な時を生きられますよね…。凄まじい妖氣でした」

將信「だね。なんていうか、凶惡だと新聞では書いてたからビックリしたよ。普通の

美人さんだつたね」

結衣「射命丸ちゃんも相変わらずだな」。

6人は風呂から上がつたあと、それぞれ多目的部屋に集まつた。

剛「…えー、言いづらいんだが、実はまた異変が始まつたらしい。」

華憐「知つてるわ」

峠「まあ、妖怪達の様子が変だし…」

近くの妖怪達は何故か辺りをウロウロしており、なにやら焦りの表情が見えていた。

彩「今年は異変が多いですね…。面白いので私は好きですけど」

將信「ええと、犯人の検討は…つて、まあ紅魔館と…永遠亭、紫ぐらいかな。企

みそなのは

華憐「もし私たちの知人が犯人なら、そんなところでしようね。」

剛「…さつき会つた天狗によると、今回の異変は月が偽物になつてゐるという事らしい。」

人間はともかく、妖怪には影響が強いだろうな。」

彩「月が消えるまで…つまり朝までに解決しないといけないんですか」

彩はふと時計を見て焦つた表情を浮かべる

結衣「まずいじやん…。時間がない。早く分かれ方決めようよ」

峠「…じゃあ早速、対紫班、対紅班、対永班にわかれようか。犯人だと確定すれば上に弾幕でも放つて教えあおう。制限時間はあと数刻だ。」

剛達は立ち上がり、出かける準備をする。

剛「了解。じゃあ俺と華憐は紫を見る。力技が一番だ」

彩「それなら私と將信は紅班ですね。鍛錬にもなりますしいいでしよう」

峠「僕と結衣は永遠亭だね。相手に不足なし、かな」

剛「…よし、じゃあ各班頼んだぞ。健闘を祈る」

i n 紅魔 s i d e      將信 a n d 彩

將信・彩「…………」

將信は紅魔館の傍の木の影に隠れて数分、館の様子を伺っていた。

將信「……別に怪しい所はなさそうだね」

紅魔館の様子は至つて普通通りで、特に異常に警戒している様子も見えなかつた。

彩「妖気も溜まつていませんし……外れでしようか。ですが、これだけだと判断は難しいです」

將信「どうかこの状況、ボク達ただの不審者じやない？」

彩「たしかに……まあ、とりあえず美鈴さんに会つてみましよう」

將信「こんにちは」

將信と彩はコツコツと足音を立てながら、門の前に堂々とたつてゐる美鈴の元へと歩いていく

美鈴「あ、將信さんと・ 彩さんですね。ここにちはう。どうされたんですか？」

珍しく起きていた美鈴は2人に笑顔を見せ、挨拶をする

彩「すみません、早速で悪いんですけど、異変起こしたりしてますか？」

美鈴「??? 私は何も聞かされてませんよ…… 異変つてもしかして、この月のことですか？」

美鈴は月を見上げ、その違和感を口にする

將信「そうだよ。レミリア達はいる？これについて話を聞きたいんだけど。」

美鈴「ああ、ごめんなさい。お嬢様なら、咲夜さんと一緒にどこかへ行かれました。お嬢様がピリピリしてて怖かつたですよ……」

美鈴は手を後頭部にあて、苦笑いを浮かべる

將信「… わかつた、ありがとう。それじゃあまたね」

彩「失礼しました」

美鈴「はい！、どうぞお気をつけて！」

対紫班　　剛・華憐　　i n 人里

剛達は紫を探して、まず人里に辿り着いた。異変の影響もあるため、人間達の様子が心配だつたのだ。

剛「…特に異常なし、か。」

華憐「やっぱり人間には特に害がないようね。どうやら攻撃する気はないみたい」

剛「…となれば後は永遠亭が疑わしいだろう。どうする？向かうか？」

華憐「そうしましよう。急がないと、つて、あなたのお友達がいるわよ」

華憐が地上に目を向けると、人里の側に魔理沙とアリスが並んで立つており、なにやら話している

剛「…？、あれは魔理沙と、アリスだつたか。あいつらも異変解決組だろうな」

華憐「とりあえず異変の情報でも聞いてみる？」

剛と華憐は魔理沙の元へ向かつた

剛「おい魔理沙」

魔理沙「うお！……って剛か。驚かせないでくれよ」

剛「悪いな。それでなにしてるんだ？こんな夜中に」

魔理沙「そりやあ勿論異変解決だぜ。途中でアリスと会つてな。一緒に犯人探しをしてるところだ。」

アリス「……魔理沙の知り合い？」

剛「ああ。宴会にいたよな？峠の友人だ。よろしく頼む」

剛はアリスに握手を求める

アリス「あ、ああ、ええと、よろしく」

アリスは戸惑いながらも、握手を交わした

魔理沙「剛達も異変で来たのか？真夜中に迷惑な話だよなあ」

華憐「まったくね……ちなみに私達も異変解決よ。」

魔理沙「そりやあ心強い。あ、それなら人里の事はなにか知ってるか?」

魔理沙はふと人里に目を向ける

剛「人里? 人里がどうかしたのか?」

アリス「? 消えてるじゃない、ほら」

アリスは人里の方向を指さす

剛「??」

華憐「……恐らく能力かなにかで人里が見えなくなつてるんじやないかしら。私達には効いてないらしいけど。」

魔理沙「その通りだぜ。二人には見えてるのか? 人里が」

剛「ああ?: ところで魔理沙は今までどこに行つたんだ? 情報が欲しい。」

魔理沙「私達はまず白玉楼にいつたぜ。留守だつたし、異変とは無関係らしい  
剛「なぜ白玉楼に?」

魔理沙「片つ端から調べれば絶対見つかるから」

華憐「そ、そうなの?:」(魔理沙らしいわね)

剛「じゃあ後は頼んだぞ」

魔理沙「ん？」

つて、あぶなつ!」

刹那、魔理沙とアリスの足元には青白い弾が放たれる。魔理沙達に当てる意思是は無かつたらしく、地面に数弾全てが命中していた。

そしてそれを見越した剛と華憐は永遠亭へと飛び去る

アリス「…あら、慧音なんのつもり？」

アリスは人形を散らばらせ、臨戦態勢を取る。その目は月光にあたり、鋭く輝いていた

た

慧音「…ここに近づくな。今人間達のパニックを防ぐことが私の勤め。誰であろうと容赦はしない。」

アリス「…人里が見えないのは慧音の仕業みたいね」

魔理沙「剛のやつ…宴会で絶対に懲らしめてやるからな…」

# 種族とモノ

i n 迷いの竹林の近くにある山道

迷いの竹林へ行く途中の山道、そこで剛・華憐チームは將信達と合流した。

華憐「あら、彩はどうしたの？」

將信の傍には彩ではなくレミリアが並んでおり、肝心の彩の姿が見えない。レミリアの傍にいつもいる咲夜の姿もまた見えなかつた。

將信「えつと、途中でレミリア・咲夜に会つて、一緒に竹林へ向かつてたんだけど、螢の妖怪とかのあまり凶暴じやない妖怪から何故か奇襲を受けてね……そいつらを引き受けてくれてるよ」

レミリア「そう……話は聞いているわ。あなたたちはなにか収穫があつたの？」

剛「わかつた。俺が知つているのは、白玉楼も異変解決に携わつてゐるということ。この異変での人里に対する影響はなかつたこと。

これぐらいだな。魔理沙達と合流したが、今はハクタクと戦つてゐるだろう。」

華憐「今回はやけにみんな異変解決に積極的じやない？」

華憐はふと疑問を抱き呟いた

レミリア 「… 妖怪にとつては今回の異変はかなり冷や汗が出るものよ。力の根源である月が隠されたのだから」

將信 「だからあんなに凶暴に… 残すは永遠亭だけかな」

將信は拳に顎を乗せ、さらに現状から状況を考察していく。

レミリア 「永遠亭？」

剛 「ありや、レミリアは知らないのか。」

華憐 「… 永琳が外から見えないようにでもしてるんでしょう。… にしても峠達の合図が出ないわね」

將信 「… 確かに見てない… ボク達も早く行こう。」

i n 迷いの竹林

峠 「… これはやばい。迷った。完全に」

一方峠達は、長い時間迷いの竹林を歩き回っていた。

結衣 「あちやう方向感覚狂つてゐるなあ。なんで？」

峠 「…普段は將信が能力行使して感覚が惑わされないようにしていたんだろう。…どうするべきか」

??? 「迷い人さんたち、案内するよ」

將信と結衣の後ろから現れた白髪の少女は結衣の肩を叩く。  
一瞬ビクリと肩が震えた結衣は、そつと後ろを振り返った。

結衣 「… だれ？」

結衣はまだ彼女を警戒しているようで、目を細め声のトーンを低くし、敵意を顕にしている。

妹紅 「まあそう警戒するなよ。私は藤原妹紅、竹林 こここの案内人さ。永遠亭に向かつてゐるんだろう？ 私もそこに用事があつてな」

結衣 「… あなた、永琳の知り合い？」

妹紅 「… まあそうだな。お前らは何故真夜中にこんなとこに來てるんだ？ 今夜は妖

怪も多いし危険だぞ」

そして結衣はある程度警戒心を解いたのか胸をなで下ろしている。

峠「異変解決だよ。君もそうだろう？蓬莱人さん」

妹紅「…へえ、随分お前も生きてるんだな。同じ類か？」

妹紅は少し引きつったような笑みを浮かべながら、怒りを表情に出さないようにしているが、周りからは嫌悪な雰囲気が滲み出していた

峠「不老とだけ、ね。」

結衣「…それはそうと、私達囲まれてるけど…」

そうのんびり話している時間はないようだ。結衣達の周りには大きいものは2mを超え、小さいものは手のひらにおさまるほどの大小様々な妖うさぎ達が、三人を囲んでいた。

それぞれ強い敵意を剥き出しにしており、今にも攻撃してきそうだ。

てゐ「やーいひつかかつたー！」

てゐは何度か飛び跳ね、いたずらが成功したからか、三人を見てからかつてゐる。

妹紅「…またお前か…。」

妹紅は拳を握りにつこりと笑顔をうかべてゐる。

峠「どうだ？吹き飛ばすか？」

峠も同じように拳を握り、血管が浮き彫りになつた  
てゐ「…え？」

妹紅「まあまで。ちょっとコイツにも恨みがあつてな…あとは任せろ」

(ホントは輝夜を殺すつもりだつたけど…まあこの際どつちでもいいか)

峠「…そうか」

てゐ「え？ちょっと、え？」

妹紅は両手から業火を出現させる。

その勢いは燃焼物も見えないのに勢いが無くなることを知らず、どんどんその炎は大きくなつていった。

峠 「こりや大技… 退散するぞ結衣」

結衣 「おつけい！後は任せた！」

妹紅 「……っ！」

二人が飛び去つたのを合図に、妹紅はスペル活動を発動した

妹紅 「焼き尽くせ『蓬萊凱風快晴 — フジヤマヴァルケイノー』」

妖しい満月が浮かぶ中、その夜空には、フェニックスが激しく輝いた

――――――――――――――――――――――――――――――

そして二人は妹紅と別れた後、さらに竹林の奥に進んでいく。

二人は僅かに立てられた松明と偽物の月光を頼りに、障害物竹を切り裂きながら進んでいった。

そして、二人の前には制服姿のうさ耳をつけた少女が現れた。

鈴仙「… 峠さんですか。てつきり協力してもらえると思つていましたが」

峡「… 何がしたいのかわからないけど… 月を隠されちゃ困る人が多いんだよ。」

鈴仙「それは百も承知。それでも私達は逃げなければならぬんです」

鈴仙は耳を上にピンと立て毛並を逆立たせた。

静かに両手を銃のようにして二人に向ける。

峡「…」

(だけど傷つけるわけには…)

結衣「… 本気っぽいね」

峡と結衣も両足を開き、拳を前に向ける

鈴仙「… 容赦はしません!!」

鈴仙は赤と青の薬莢型の弾幕を両手から放つた。

それは密度や威力を重視した弾幕で、弾幕自体の大きさは小さいものの速度が速く、

人間離れした動体視力が要求される。

峡はそれらをバリアを使いつつ巧みに躱していく。

そして結衣も、化け物じみた運動神経を活かし、とても器用に弾幕を華麗に躱してい

く

鈴仙「…！」

そして突如鈴仙の目が紅く輝く。

弾幕達は動きを変えないものの、なにか違和感が生まれる。

結衣「…!?」（音がおかしい…）

結衣は明らかに違和感を覚え、咄嗟に周囲に結界を張る。

そうすると案の定、あるはずのない場所から弾幕が結界に当たつていた…

結衣は横目で峠も同じようにバリアを貼つていて確認する

峠「鈴仙の能力は波長を操るんだ！」

峠は一度鈴仙と手合わせをしており、大体の能力は分かつていた。その額からはほんの少しだけ汗浮かんでいた。

耐久性が低い人間にとつて、一度被弾すれば靈力で体を強化していくもそれなりにダメージを受けてしまうからだ。

さらに波長を操る能力は手強い。幻を見せることで音、自分、そして弾幕の位置さえも見せかける事が出来るからだ。

靈力や運動神経は大きく峠達が上回っているが、ここであまり力を消費したくはないだろう。永琳との戦いもあるのだから

峠「… 展開 「ミラーウォール」

峠は当てずっぽうに撃つのは無駄だと悟り、結界を展開。密度の濃さが逆に出るから

だ。

今の鈴仙の攻撃には有効な手段だろう。

峠の結界によつて弾幕は跳ね返り鈴仙に向かう

鈴仙「…なら！波符『赤眼催眠』

鈴仙はそれを見て、咄嗟にマインドシェイカーを発動した。

鈴仙を中心に全方位に弾幕が展開されながら、峠達に近づくにつれて拡散していく。自身の弾幕を相殺して進み、峠達の結界に降り注いだ

峠「結衣！能力強化を！」

結衣「わかつた！」

——一能力の一時的向上指示を確認。靈力を增幅します——

峠「反射『弾には弾を』」

峠はさらにスペルを宣言した。鈴仙の周りからは半透明の大きな球が一つ出現した。鈴仙がボールの中に入るような形になる。

鈴仙「なつ…！」

そして鈴仙の放つた弾幕は峠の結界にすべて跳ね返されるのはもちろん、ランダムに鈴仙とほぼ同じ形状の弾幕が出現し、鈴仙に向かつて直進する。

違う箇所といえば、その色が白黒だということだけだ。

鈴仙は自身の弾幕を相殺しようとさらに弾幕を放つが、外した弾幕は自身をまた攻撃し追い詰める。

悪循環に陥っていた

鈴仙「くっ…」

鈴仙はそれを必死に躱していくが、徐々に疲れが見え始め、動きが鈍っていく。次第に鈴仙に弾幕が掠るようになってきた

このままいけば勝ちが見える。： その時だつた

ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん!!!!!!

鈴仙「きやつ！」

鈴仙の横側から突如凄まじい機械音のような咆哮が響き渡った。

耳を粉々にするかのような激しい咆哮に、鈴仙の軽い体は簡単に吹き飛ぶ。

峠「つ!?」

結衣「まかせて！」

結衣は鈴仙を素早くキヤツチし、抱えて峠の側へと戻った。  
鈴仙は先ほどのショックで気絶している。

結衣「あれって……」

結衣は唇を噛み締めていた

峠「一体あれは……つ!? 来るぞ!!」

## 夜明けと決着

靈夢「… 紫、逃げないでよ」

紫「分かつてゐるわよ…」

永琳「姫様、お怪我はありません」

輝夜「… わたしは大丈夫よ。

それよりとりあえずあの鉄屑を潰しなさい… といつてもわたしはもう動けなさそ  
うだけど」

永琳「… 承知しました。少し休まれてください。」

永琳は輝夜を抱え、屋敷の中へと運んだ。

同じ月に住む輝夜と永琳は、今はひつそりと同じ永遠亭で暮らしていた。  
もつとも、永遠亭は目立たないよう加工してあるため見た目はよろしくないが。

妖夢「… 一時休戦のようですね。」

妖夢は刀をチャキンと音を立てて鞘に刀をしまう。

幽々子「… あら?、紫、異変解決いいのかしら?」

幽々子は壁にもたれかかり、意氣消沈の様子だ。  
ヒラヒラと扇子で自身を仰いでいる。

紫「・別に勘違いしてただけのようだし構わないわ。問題は“アイツ”よ」  
靈夢・紫・永琳・妖夢・幽々子・輝夜は異変解決のため、弾幕ごっこをしていた。  
しかしその時、突如アイツが姿を現したのだ。  
鉄屑を倒すべく、ダメージが深い幽々子、輝夜を除いた4人は静かに臨戦態勢を取る。  
どうやらこちらにはまだ気づいていないらしい

その時

剛「おーい！大丈夫か!!」

そこに、さらにメンバーが加わることになつた。

騒ぎを見つけた剛・華憐、戦闘が終わった魔理沙・レミリア・將信・彩・咲夜なども  
参戦。

ここでメンバーはキマイラと戦っている峠・結衣を含め13人。

靈夢「つたく… アイツなんなのよ!?」

靈夢はアイツの姿を見て苛立ちと、不安や焦りを覚える。

なぜなら、アイツには妖力も靈力も感じられなかつたからだ。さらにただの巨大生物なのに、それがまるで意思を持つているかのように動いている。

近代的な技術を知らない靈夢に取つては恐ろしいモノの対象だろう。

キマイラは二人を見逃したらしく、あたりを探している。

華憐「… あいつはキマイラね。伝説の生き物。もつともレプリカのようだけれど」

將信「… 確かに姿は一致するけど、力が感じられないね。何で今ここに…」

華憐「詳しいことはあとよ。今はアイツを潰すことだけ考えなさい」

こんな状況でも華憐は冷静に判断を下し、みんなをみちびく。

しかしキマイラはライオンの頭、山羊の胴体、毒蛇の尻尾。全長は妖怪の山に匹敵するほどの大きさ。

放置すれば確実に幻想郷は消滅してまうだろう。

静かに華憐も汗を浮かべていた

峡「みんな!!」

峡と結衣はスキを見計らつて11人と合流した。

結衣「なにか策はあつた?!」

彩「策という策はありませんが……やはり身体が重い様で、動きが鈍いですよね」

レミリア「でも、攻撃が効くとは限らないわよ?」

峡「……とりあえずは結界で幻想郷を保護していく!!結衣、靈夢、紫、頼む!」

靈夢「仕方ないわね……わかっただわ」

紫「了解♪」

結衣「もちろん!」

4にはキマイラを囮るように空中に広がった

峡「展開『ビッグミラーウォール』」

紫「境界『永夜六重結界』」

靈夢「博麗奥義『永獄結界 確』」

結衣「強化『プロテクション』」

そして結界スペルが宣言された。

峠、紫、靈夢の発動したスペルカードを、結衣がさらに強化することによって、莫大な力を持つ真四角の結界がキマイラを包み込んでいく。

靈力妖力神力の結界は膨大な力を放つ。幻想郷が揺れ動くほどに。

しかしあのキマイラは生物じゃない。あくまでも鉄屑のレプリカだ。意志のないものを、結界は封印する役目を果たさない。

だからこの結界は防護のみしか役目を持たないので。

アイツを倒すには直接攻撃して壊すことしか方法がない。

結界班の4人以外の9人はキマイラの様子をうかがっている。

妖夢「隙有りっ!!」（足元を狙えぱ・・）

レミリア「神槍『スピア・ザ・グングニル』

そしてキマイラが結界に夢中になつて警戒を解いているうちに、妖夢とレミリアは自身の愛着のある武器を行使しほぼ同時に斬りかかつた。

しかし、その攻撃はまるで無意味だった

妖夢「なつ！……きやつ」

レミリア「ぐつ……」

（どれだけ硬いのよ……これじやあ傷がつかないじやない）

レミリアと妖夢の攻撃は鋼の体に簡単弾き返されてしまつた。警戒して一旦少し後方に下がる。

妖夢「まだまだ！人符『現世斬』」

レミリア「……『スカーレットディスティニー』」

妖夢はキマイラに一太刀浴びせようと素早く突進し、特徴的な動きで妖夢は目にも止まらぬ速さで力強く楼閣剣を斜めに振り下ろした

レミリアはそれを援護すべく、自身の中でも高威力なスペルを宣言した。  
レミリアが他人を自分から護衛するのは珍しく、知人は目を見開いていた。  
それはそれまでに事態が深刻なことを実感させられる。

だがそれらの攻撃は意味をなさなかつた。

あつけなく弾かれた攻撃に二人は目を見開くが、すぐに目を鋭く切り替え大きく後方

に下がる。

キマイラ 「…… 機符 『流星群』」

それを返り討ちするように、キマイラは感情の籠つていない機械の声を響かせた。

キマイラの頭上に大きな赤いひし形の魔法陣が突如出現し凄い勢いで回転する  
キマイラ 「グオオオオオオオオオオオオ!!」

そしてキマイラの咆哮とともに、魔法陣からは様々な大きさの隕石が出現した。  
大きいものなら1kmほどに達する隕石が地に降り注ぐ。

その神秘的な光景は、世界の終わりのようにも見えた。

しかし、それでも彼女らは諦めない

妖夢 「まける……つかあ!! 『待宵反射衛星斬』」

レミリア 「! 紅符 『不夜城レッド』」

永琳 「……つ、覚神 『神代の記憶』」

魔理沙 「いくぜ! 恋心 『ダブルスパーク』」

咲夜「デフレーションワールド」

5人はそれぞれの広範囲な弾幕を放つ技を使い、隕石を粉々にしていく……が

レミリア「…ぐうつ…………くそ……」

妖夢「…！…無念・ごめんなさい」

レミリアと妖夢は小型の隕石をモロに受けてしまった。二人共に靈力、妖力でコ一  
ティングした腕に隕石が直撃した。

致命傷とまではいかないが、戦闘は確実に不能な状態になり、戦闘力が削られてし  
まつた

将信「（まずは避難させないと…）咲夜！レミリア達を！」

咲夜「っ！わかりました！！」

咲夜は判断に迷いを見せない。

レミリアと妖夢を抱えて、二人を治癒するために人里へと消え去った。

これで戦えるメンバーは剛・華憐・魔理沙・将信・彩・永琳だけになつた。

キマイラ 「… 機符『爆炎放射』」

キマイラはさらなる追い討ちをかけ畳み掛けるべく、熱エネルギーを自身の口に集中させ始めた

魔理沙 「そんなのありかよ…なら…」

魔理沙はキマイラを見て八卦路を構え、八卦路の前方に大きな魔法陣を展開しダブルスパーク以上のエネルギーを消費し、魔法陣に魔力を注ぎ込んでいく。

自身のほぼ全ての魔力を使い切るつもりなのだろう。微かに腕が震えていた。

将信・永琳・彩 「…」

3人も全員がそれぞれの弓矢を構え、矢先にエネルギーを充填させる。

剛 「…あと…あと少し、耐えてくれ…」

華憐 「なんとか持ちこたえて…お願ひ」

剛は何やら先程からものすごい量のエネルギーを腕に込めていく。  
少なくとも自身の7割以上を使つていてるだろう。

華憐はキマイラの咆哮や弾幕から自身の槍を使い剛を守りながら、結界の保護を手助けしている。

靈夢「ちよつと… これで大丈夫なの!?」

紫「… あの人達を信じなさい。… 悪いけど、私たちにはこれしか手がないわ」

靈夢「…」

靈夢は紫の様子を見て唇を噛み締める。

あれほどまでに胡散臭い、計画的だつた紫から策がないという言葉が出たのだ。  
一体あれはなんなんだ、と靈夢は不可思議に思つていた

峠「…（剛達、頑張つてくれ…）」

キマイラ「グオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!」

キマイラはまたも凄まじい咆哮のとともに極太の豪快な火炎を放射した。それは剛に  
向けられたものだつた。

そしてすかさず4人は剛を守るべく行動する

魔理沙「魔砲『ファイナルマスタースパアアアアアアク!!』

永琳「弓符『アローキヤノン』」

彩・將信「弓符『アローカノン』」

魔理沙と3人は一斉にスペルを宣言する。

5つの光線がぶつかり合い、凄まじい破壊力を生んだ

魔理沙「ぐつ……うわっ!?」

永琳「……くつ！」

その爆風に体力が尽きた永琳と魔理沙は吹き飛ばされてしまう。

そして永琳と魔理沙は結界にぶつかり静止した

将信「二人共、大丈夫!？」

将信は焦った表情で慌てて駆け寄った

永琳「……大丈夫よ……ああ、まだあの技を覚えててくれたのね」

永琳はそんな状態でも嬉しそうに笑っていた。昔を思い出して

将信「……当たり前だよ。とりあえず、紫、頼むよ」

紫「……」

紫は無言で二人の下にスキマを展開し結界の外へ2人を送る。これで安全は確保された。

無言なのは、喋る余裕もないからだろう。いくら峠達がついているとはいえ、あの凄まじい爆風を全て受け止めなければならないのだから。

そう、もし結界がなければ今頃幻想郷中全てが焼け野原になっていたのだ。

靈夢達も必死に結界を安定させる

一方キマイラは、ぶつかりあつた時に生まれた爆風と高熱で体のアチコチが傷つき、所々はドロドロに溶けていた。

そのせいかキマイラの動きは自身の重さもあつてなのか、かなり鈍っているように見える。

將信「……よし、華憐は剛と防護を中心！二人共結界の手助けをお願い！！」

彩「ですが！剛さんが危険です！！」

將信「そこは僕がなんとかする！だから、お願ひ！」

彩・華憐「……わかりました……！（…！わかつたわ！）」

彩と華憐は將信を信頼し、紫のスキマに吸い込まれていった

將信「さあて…」

剛「必殺…」

剛はスペルを宣言しながら左足を前に出し、後ろ足を下げ腕を思い切り後ろに引き下げる。

キマイラ「機符『ポイズンテール』

その時だつた。キマイラの蛇のような尻尾が妖しく紫色に輝いた。

刹那、それは剛に向かつて振るわれる

將信「させるか!! 封鎖『攻撃封じ』」

將信は反射的に反応し、スペルを宣言。キマイラの周りからは無数の繋がれた鎖が出現し、尻尾はもちろん、キマイラの体を締め上げる。

キマイラ 「グオオオオオオオオオオオオオオ!!」

が、尻尾から放たれた棘に、將信は反応が遅れた

將信 「まずつ・・・!?」

將信 「つ・・・、ありがと！」

峠 「どういたしまして。」

將信は思わず目を瞑るが、峠が片手で弾幕を放ち、キマイラの尻尾から放たれた棘を  
消し飛ばした。

結果的に將信は守られたのだ。

華憐 「今よ結衣！ 結界の強化よ!!」

彩 「紫さんたちもお願ひします！ なんとか持ちこたえて!!」

華憐と彩は自身の神力を結衣に分け与えつつ、4人が作つた結界をさらに強固なものにした

剛 「必殺!! 『諸刃の一撃』」

辺りには凄まじい嵐が吹き荒れた

# 過去とお見舞い

後日談

峠「……で、結局あのキマイラの正体はなんだつたの？知ってるんでしょ？」

峠の言葉を最初に、一昨日の異変について6人は集まって話し合いはじめた。將信と華憐は何かデジヤヴを感じているが、峠は気にせずに話を勧めていく

華憐「……ええ。けれど、知つたら後悔することになると思うわ。覚悟は出来てるの？」

華憐は峠から目を泳がせて、少し俯き気味に峠の言葉に応答した。

峠「……僕は別に構わないよ。二人は？」

將信「峠と同じく大丈夫だよ。僕も覚悟ぐらい決めてある」

剛「……勿論俺もだ。だからありのままを話してほしい」

華憐「… そう」

華憐は彩に素早くアイコンタクトを送る

彩「では… 今回の、偽キマイラの出現についての理由を大体お伝えします。

まず聞きたいのですが、皆さんはあるの神をどう思っていますか？」

剛「神？ 諏訪子か？」

結衣「いや、剛達が生まれた時に転生させた神のほうだね。」

彩「伝え方が悪かつたですね。結衣さんの通りです」

峠「ええと、気迫が凄かつたってことしか… 僕は覚えてないかな」

將信「なんていうか大物感があつたよね。でも昔だから峠が覚えてないのも仕方ない  
と思うよ」

剛「… 前はあの膨大な神力の源は何なのか気になっていたものだ。

… もしかしてあの神が関係しているのか？」

（だとしたら相当厄介だが…）

彩「…ええ。実を言うと、あの神は貴方達を意地でも殺そうとしているんです。将信さん達に過度な負担がかかるのは避けたいので、今まで黙っていましたが…どうやらその必要はなさそうですね。」

彩は少し苦い顔をした後、キリツとした表情に戻つて胸をなで下ろす

将信「…僕達を殺す？どうしてそんな必要があるの？」

聞きなれたはずの殺すというワードに、将信はさらに神への警戒心を増幅させる

彩「えーと、私達があの神のもとによつて作られた事は以前お話しましたよね？」

将信達は軽く頷いた

彩「…実は創造神の中には位のような物があるんです。昔々のとある日、次世の最高神を決めるべく、大会のようなものが行われました。

そしてその大会にあの神は参加したんです。そこまでは問題ないんですが…」

剛「…そこで神は何かを犯したつてことか」

彩「その通りです。神は様々な兵器、武器を大量に創造しました。私的 lý do で物体や魂を創造することは捷で厳重に禁じられています。しかしそれをあの神は無視した、

と。

そしてその神は結果的に大会に勝つてしまつた。

ただし許されるべきことをした神は、事実を抹消すべく、創造した武器達や事情を知つた神をすべて自身の手で壊そようと企てていました。

意味を持つており、その事実を知つた私達は逃げ出した… というわけです

結衣「正直今でも彼らの犠牲は悔やみきれない… ね」

峠「… 犠牲？」

峠は思わずその単語に目を細める。

彩「… 他の剣にも私達のように魂を宿しているものはありました。彼らは団結して私達3人を逃がしてくれたんです。  
(おそらく私達が剣の中でも神力が優れていたからでしょう。)

私達はその後偶然貴方達に憑依しました。そしてあの神によつて分離された後  
は…」

華憐「そこは前に言つたわよ」

彩「あつ、そうでしたね。」

まとめると、あの神は事情を知つてしまつた私達、そして貴方達を殺し、事実を消し去りたいんだと思ひます。」

峠「…そこで偽キマイラを想像して僕らを殺そうとしたつてことか…なるほどねえ」

将信「でも、あれだけの被害を出せば、ほかの神も黙つてないと思うけど、どうなつてるの？」

彩「…貴方達は前世で罪を負つていますから、貴方達への試練として他の神に言い訳をしているんだと思ひます。これはあくまで私の予想ですがね」

彩「…以上です。何か質問はありますか？」

剛「ああ、試練で俺達を殺そつとするのは分かつたが、それは定期的に起つるのか？」

彩「皆さんを一齊に叩ける機会は…異変の時が確実ですよね。基本的にはランダムです」

将信「ふーん…あ、そういうえばボクらの能力が長い間変わつてないけど、これは何

か試練に関係してゐるの？」

彩「……それはわかりません。私達の情報源は神の会話を盗み聞きしただけですか  
ら……細かい所は」

華憐「ところで、能力なら既に変わつてるとと思うわよ。貴方達気づいていなかつたの  
？」

將信「え……？あ、ほんとだ。感覚が操れない」

將信は手をグーパーして能力が使えないことに驚愕している。

剛「……（いつの間に変化していたんだ……）

（～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～）

数分後

剛「大体異変の内容は掴めたな。といつても試練が来るのに備えてまた鍛えるだけだ  
が」

剛は首をポキポキ鳴らしながら立ち上がる

峠「剛らしいねえ。」

華憐「試練も徐々にレベルが上がるわ。油断大敵よ」

彩「…とりあえずあれやりませんか？能力紹介。このままだと不便ですから」  
剛「そうだな、まずはそうしよう」

將信「でも、どうやって能力みるの？」

剛「：声を聞き忘れてたんだつたな…。靈夢なら分かるんじやないか？あれでも巫女だし」

———  
in 博麗神社

靈夢「…で、私のところに来たと。ま、当然できるわよ」  
靈夢の横には鈴が座つており、二人並んでお茶を啜つていた。  
博麗神社に二人の巫女がいるのに違和感を覚え、何人かは苦笑いする

彩「御三方、どうぞ。」

剛「じゃあ、まずは俺から頼む」

剛は座つた靈夢の前に片膝を立てて座る。

靈夢「…いくわよ」

靈夢は剛の額に右手をあて、静かに目を閉じた。

靈夢の右手からは赤い光が溢れ始める。

そして数秒後、靈夢は再び目を開けた

靈夢「…あんたの能力は、強化・弱化を操る能力…ね。」

剛「…なんか劣化してないか?」

華憐「能力もランダムで決まるわよ。といつてもそんなあほらしい能力は持たないはずだけど…」

將信「…つて、ボクの番か」

そして將信も剛と同じく、靈夢のそばに座り、じつと言葉を待つ

將信「…どう?」

靈夢「…能力は、ありとあらゆるものを使ふ程度の能力ね。便利な能力じやな

い

峠 「じゃあ僕も、頼むよ」

靈夢 「はいはい……：えっと… 念動力を使う程度の能力、ね。これで終わり？」

剛 「そうだな… 感謝する」

靈夢 「別に構わないわ。ちなみにお賽銭はそこよ」

6人は靈夢達としばらく雑談をした後に、にとりたちのいる、妖怪の山へと向かつて  
いた。

昼食をミステイアの屋台で終えた6人は、少しゆっくりとしたペースで空を飛んでい

た

剛 「そういうえば、お前らの能力はなんなんだ？」

結衣 「? 私達の能力はないよ？」

華憐 「元々の能力は制限が外れて使えるようになった。だから前の能力は消えたわ。」

剛 「ああ、なるほどな。武器化した時だけ使用出来るんだつたか？」

彩 「そうですね。見るより慣れろ、ですよ。後で使えるか試してみましょう」

峡 「そろそろ着くよ！」

峡の声が空に響き渡った

i n 河童の里

にとり「うーー…んつと、これは初めて見る物質だねえ。幻想郷にこんなのがあつたのかな？」

にとりは難しい顔をしながら6人が持つてきただキマイラの破片を注意深く観察していく。

にとり「これすつゞく頑丈でもあるし、加工出来たらすつゞく面白そうなんだけど…。一度地底のメンバーと話し合つてみるよ。こんなに頑丈だと、並の攻撃じや傷一つつかないだろうね」

将信 「ありがとう！妖夢達の攻撃が弾かれたのも納得がいくよね…。」

剛 「次は紅魔館だな」

i n 紅魔館

將信 「おはよー」

美鈴 「あつ！ おはようございます。すみませんが今は立ち入り禁止です……お嬢様

が：」

剛 「何かあつたのか？」

美鈴 「いや、その、二日酔いだと思います……。ちなみに怪我はもう殆ど治っているようなので、安心してくださいね」

峠 「そりやよかつた。じゃあ失礼するね？ レミリア達によろしく」

美鈴 「あ、お早いんですね。では！」

i n 白玉楼

幽靈に案内された6人は白玉楼の庭へとやつて來た。

妖夢「…」

妖夢は無表情でひたすら料理を作つてゐる。

目線の先には…

魔理沙「おつ、昨日ぶりだな！」

魔理沙は白玉楼の中から6人に向かつて手を振る。

剛「おーう。なにしてるんだ？」

魔理沙「いや、別になにもしてないぜ。ちょっと遊びにきただけだ」

魔理沙の周りには異変に關係した慧音やアリス、幽々子などのメンバーが寬いでいた。

魔理沙「お前らは何でここに？」

將信「お見舞いだよ。みんな元気そうでよかつた」

(なんか珍しいメンバーだな…)

幽々子「貴方達も無事で何よりね！」

幽々子は扇子で自分を仰ぎながら、6人に笑顔を向ける

峠「お気遣いどうも。鈴は神社にいたけど、冥界から出ていいのか?」

幽々子「構わないわよ、映姫から許可を…つて、そういうえば貴方達映姫が探してたわよ?」

結衣「えーき?」

華憐「たしか地獄の閻魔様。あのお説教大好きだとかいう噂の…」

結衣「ああ、お説教は嫌だなあ」

結衣はわざとらしく泣く素振りをする

幽々子「まあ早めに会つてあげなさい。地獄に落とされるわよ」

彩「…(…!すぐ…理不尽です…)

# 幽靈と花

結衣「いやああああああああ

前回の異変から数ヶ月後、閻魔様は来る日も来る日も6人の自宅を訪ね、説教をしにドアを叩いていた。

諦めた5人は、結衣を説得……もとい捕まえて、三途の川へと続く分かれ道へとやつてきた。

剛「うーん、やつぱりここも……か」

現在、幻想郷には異変が起こっている。

といつても何故か人妖問わず実害は無かつたが。

ちなみにその異変の内容は、『春夏秋冬の花を一度に、そして大量に開花させる』だ。本来見られない、咲く季節が違うはずの花達が咲く姿に、喜びを覚える者や不安を覚える者が多数いるという現状だ。しかし特に気にしていないものが過半数を占めていた。

警戒心の強い彼らは当然気にしているわけだが……。

將信「とりあえず、二手に分かれよう。そつちの方が効率いいだろう」  
將信は6人に指示を出す。

(將信、彩、結衣、峠) グループ、(剛・華憐) グループにわかれ て6人は搜索を開始した。

結衣も諦めがついたのかテンション低めに、仕方ないと言つた表情で將信の言葉に軽く頷いて応じる

———  
in 太陽の畑

剛「…やはりここもか。パチュリーの言つた通りだな」

剛は太陽の畑に咲き誇る様々な花を見て、ふとパチュリーの言葉を思い出した。

華憐「…たしか靈の仕業なんですって? 一体なんでこんな事が起こってるのかしら」

6人は閻魔様（四季映姫）、そして幽香を異変の首謀者だと疑つてゐる。

幽霊や花に関係するのはこの2人に関係する場所に違いないと考えたのだ。ちなみに冥界は既に行つており、異変の犯人でないことは確認済みである。

そして数週間前から、閻魔様は途中からばつたり6人の前に姿を見せなくなつた。そのため6人はあちら側の方が怪しいとにらみ、4対2というバランスの悪い分け方を選択したのだ

剛「…さて」

2人は前からコツコツと音を鳴らして歩いてくる人物、否——妖怪を見て足を止める

幽香「あら…久しぶりね。元気だったかしら」

幽香は剛達と数ヶ月：いや数年ぶりに顔を合わせた。

互いの距離は2mほど。

普通、人間から考えればその距離は遠いと感じるかもしれないが、幽香の瞬発力があ

ればこんな距離、あつてないようなものだろう。

剛「ああ、久しぶりだな。こちらの要件は…」

幽香「大体察しがつくわ。この花達のこと……そうでしよう？」

剛「つ、ああそうだ。……で、お前が犯人か？」

剛は单刀直入に問いただした。

幽香「違うわ」

幽香はキッパリと断言した

華憐「……何か証明できるものとかはないわよね」

幽香「そんなものあるはずないわ。まあ、私は花達に誓つても、私は犯人じやないと  
言えるけど」

華憐「……ふーん……」

將信は顎に手を当てて唸る

幽香「執拗い女は嫌われるわよ？」

幽香はそんな状況下でも、クスクスと將信に冗談を言う。

3人は幻想郷の中でも最も戦闘力が高い。最強にもつとも近い奴らだ。そんなヤツ  
らから懲らしめられるとわかれば、もう少し動搖するはずだ……そう剛は考えていた

剛「……うか。すまないな疑つて」

どうやら剛は幽香を信じることに決めたらしく、幽香に軽く謝罪をして、すたすたと  
元来た道を戻っていく

幽香「まあ」

剛「？」

クツ!？」

幽香の言葉に剛はゆっくりと振り返った。  
そしてその瞬間、幽香の傘が剛を真横に薙ぎ払うように振るわれた。

剛「…なんのつもりだ」

(なんとか発動してくれたか…)

剛は咄嗟に両腕を新能力で強化し幽香の攻撃を防いだ。どうやら剛も奇襲を予想していなかつたのか、その身体からは汗が流れ落ちている。

幽香「あら、これは”ただの遊び”よ。久しぶりの…ね…。久々の再開だもの、楽しみましょう?」

幽香は口元を釣り上げて再度剛に勢いよく突進し、傘を槍のようにして連続で突きを繰り出す。

剛「問答無用かよ…華憐頼む!」

華憐「はいはい」

剛は地面を殴った。その衝撃波で剛は大きく後ろに後退しながら、槍と化した華憐を右手にキヤツチする事に成功する

幽香「休ませないわ!!」

幽香は化け物じみた脚力で、剛の元へと一瞬で現れ、剛に傘を振るう。

剛「ハツ!!」

しかし剛はその行動を見切つた。幽香の攻撃を横に受け流し、右回転するようにして幽香に槍を振り回す

幽香「グアツ!!」

幽香はそのまま剛の攻撃を傘でしつかりと受け止めたが、あまりの威力に肺の空気が押し出され呻き声をあげる。

幽香はそのまま剛の攻撃に吹き飛ばされるが、なんとか空中で体制を立て直した

幽香「… 流石にやるわねえ。楽しくなつてきたわ」

幽香は口元の血を拭いながら、さも面白そうに言葉をもらす。紫がこの幽香の姿を見れば、さぞ驚愕することだろう

幽香「… 貴方はこれを耐えられるかしら。

恋符…」

幽香は傘の先を剛に向け、黄色の妖力エネルギーを充填していく。あまりの膨大なエネルギーに辺りの草花は揺れ始める

剛 「それは、魔理沙の……」

幽香 「残念だけど私が”オリジナル”よ。

マスタースパーク」

幽香は極太のレーザーを発射した。

形は魔理沙とほぼ同じだが、明らかに威力が違うことはそこらの子供でも理解出来るだろう。

レーザーはゆっくりと辺りを飲み込みながら剛に向かってくる

華憐 「……残念だけど」

剛 「俺達も使えるんだがな」

剛は赤く、そして冷たく輝いている槍を幽香と同じように幽香に向け、こう言い放つ

た

剛・華憐 「合業 『鬼神砲』」

その刹那、幽香を赤黒いレーザーが包み込んだ

i n 三途の川

結衣「や、やつとついたー」

結衣は思わずその場に座りこんだ。どうやら予想以上に分かれ道からは遠かつたようだ。

將信「なんか、凄く渋滞してるね」

将信達の目の前には、恐らく靈と思われる行列が並んでいた。その数は計り知れない。

彩「… 何があつたんでしょう。ここまで死人がいるとなると… やはり…」

彩はその光景に目を細める

???「はいはい。ここは死人以外立ち入り禁止。帰った帰った」

突然、4人の前から赤髪のツインテールをした背の高い女性が近づいてきた。その女性は大きな鎌を持っていた。つまり、それから連想するのは…

峠「あんた小野塚 小町か？」

小町「ん? どつかで会つたかい? その通りだよ。」

峡「ああ・ そうか」  
峡は小町を知っていた。時折閻魔の口からその言葉が聞こえてきたからだ。

彼女は死神。といつても人の魂を狩るような係ではなく、ただ魂を運ぶだけの係のようだ

小町「つてあんた、四季様が探してた奴じやないか。危うく追い出す所だつたよ・」

小町は冷や汗を流しながら苦笑いを浮かべ、安堵している。

峡「(わかりやすい人だな・)」

閻魔はどこにいるんだい?」

小町「アタイが案内するよ。船は使えないから、能力を使わせてもらう」

小町は手首を何度も曲げ、4人にこつちに来いと合図をする。

そして小町が目をつぶった途端、三途の川の先にうつすら見えていた建物に一瞬で到着した。若干気持ち悪さが残るが、あの距離を一瞬で移動できるのは非常に便利だ。

小町「ここだよ。この先にいる」

小町はあの建物を指さした

将信「そう・ ありがとね」

小町「礼には及ばないさ。四季様もやりたくて説教やつてるわけじゃないから・ 憎

まないでやつてよ」

小町は後ろ髪に手を当て照れ隠しをした。小町はこれでも四季様を信頼してるので  
ろう。

將信「うん… ありがと」

そして小町は元の位置へと戻つていった。

どうやら他の死神に任せてまた昼寝をするらしい。

彩「…（寝るの早すぎませんか…！？）」

峠「… じゃあ行こうか」

—————

映姫「大体ですねえ、異世界から来るってなんなんですか!? まず閻魔たる私の元へ来  
るべきでしよう。しかも貴方達は…」

数十分後……もしくは数時間後、すっかり四季映姫の説教に疲れた4人は剛達と川の近くで合流した。

剛 「……ずいぶんお疲れだな。峡」

峡 「そつちこそ腕から血が出てるけどね……」

華憐 「それで、この異変の原因はわかつたの？」

將信 「映姫さんによると、幽霊の仕業らしい。」

剛 「……パチュリの言つた通りだつたな。だが何故こんなに増えたんだ？」

彩 「どうやら60年に一度ほどの周期でこのような異変が起ころるそうです。外の世界で大きな震災か戦争が起こつたんでしょう……との事です」

華憐 「だからこんなにパンクしてるのね。初めて見たわよこんな光景……」

將信 「……詳しくことは後にして、とりあえず帰らない？ 疲れた」

辺りは既に日が暮れていた。

——新たなる異変にも気付かずに、今夜6人はグツスリと眠りに落ちた——

i  
n  
???

???

「… 懐かしいねえ、この風景。何千年ぶりかな？」  
「この地で再び… 信仰を取り戻さん。」  
「また… 会えるといいね」

## 再開と暴挙

剛 「は？ 神が暴れだした？」

花が咲き誇った異変も終わりを告げて2ヶ月ほどたつ頃、射命丸は剛達の元へと突如焦った様子で駆けつけてきた。

それはもう、鬼のような形相で。

射命丸 「は、はい。これを……」

射命丸は乱れた髪も気にせず、6人に神が暴れているらしい写真を取り出して見せる。

將信 「どれどれ…… っ、あちゃ～」

將信は何故か頭を抑えて項垂れる。その様子に射命丸ははあくつと深いため息をついて、床に腰を下ろす。

射命丸 「ほんとに困つたものですよ…… 急にやつてきて、山を乗つ取ろうとするなんて…… 幻想郷といえど、非常識すぎますよねえ……」

將信 「あ、いやそうじやなくて」

射命丸 「ん？ どうかされました？」

峠「この人たち……僕らの知り合い」

i n 妖怪の森

諏訪子・神奈子「無駄無駄ア！」

諏訪子と神奈子はそれぞれ、ミシャグジさまや御柱を使い、暴挙を止めようとしてくる天狗たちを追い払っていく。

何故こんなことをする必要があるのか分からぬ天狗達は疑問を浮かべながらも、上司の天狗の命令で仕方なく二人を……

いや、”3人の神”を止めようとしていた。

剛「……おーい、やめろやめろー！」

そして数分後、その三神の元に6人は急いで駆けつけてきた。

射命丸は少し後ろで剛達を追いかける。相変わらず6人は着々と成長していた。

諏訪子「お、將信じやん。久しぶり！」

諏訪子は剛達に向けて笑顔を見せながら子供のように両手を振る。力に鈍感な人間

から見れば見た目相応だが、アイツはかなり古参の神だ。そう考えるとシユールにも感じる。

將信「久しぶり……じゃなくて、なんで暴れてるんだよ」

將信が呆れた顔をしている中、峠はふと、諏訪子の周辺を見回して言い放つ。

峠「……そこの緑の髪の子は、だれ？」

峠は靈夢と同じくらいの背の、巫女服を着た少女を見て困惑していた。何故なら峠達が諏訪子達と暮らしていた時、まだ守矢神社には巫女がいなかつたからだ。

また、理由はもう一つある。

緑髪の女性からは神力が溢れ出ていたからだ。

峠（もしや子供を……！？）

諏訪子「……何勘違いしてるか大体想像つくけどさ……この子は現人神の東風谷早苗。今はこここの神社で3人で暮らしてるの」

峠「あー、いや知つてたけどね」

峠は真顔にもどつて、東風谷早苗という少女に注目する

東風谷「：はじめまして！守矢神社の巫女をやらせてもらっています。東風谷早苗です。宜しくお願ひします」

東風谷早苗と名乗る少女は一步前に出てお辞儀をする。とても丁寧な仕草だ。

（ああ、靈夢とは大違ひだ…）

そんなことを6人は考えつつ、それぞれ自己紹介を済ませた。

華憐「外の世界出身なのね…今はどんな感じなの？」

華憐はふと疑問を口にする。

早苗「私の世界は、科学技術がもつと発展していましたよ。どんなに遠いところでも会話ができる機械や、文字を打てばその情報が出てくるという機械まで、」

早苗は外の世界出身だ。幻想郷の暮らしにもう適応出来たらしい。若いんだろう

なあ

剛「ほう…また外にもいつてみたいな。まあ叶わないだろうが」

早苗「ところで、皆さんは何処から来たんですか？：もしかして外の世界出身で？」  
峡「―――うん。少し遠くにある村だよ。今はもう無くなってるけどね」

峡は一呼吸おいて――――嘘をついた――――

警戒心は数億年たつた今も強い。

それはそれまでに過去の経験がトラウマになつてゐる事を示している

早苗「‥‥つ、そうなんですか：ごめんなさい‥」

早苗は峡の暗い様子に空気が重くなつたのを感じたのか、即座に謝つた。

峡「‥いや、構わないさ」

峡はふと空を見上げながら、虚ろに呟いた。

彩「‥それで、なぜ貴方達はそんなに暴れてるんですか？」

彩が話題をキツパリと転換する。

諏訪子「將信達がいるつて八雲から聞いたから、騒ぎを起こしたら来るかなあつて思つたの。それと‥あとは力の為だね」

諏訪子はあつさりと告白した。何か戻でもあるのかと勘違いするほど、素直に

将信「‥力の為？」

神奈子「ああ。外の世界は今では神仏を信仰する者が僅かでな。この通り神力がもう僅かだ。」

神奈子は神力を見せつけるように手の平に力の塊を浮かべる。以前と比べその威力は少なく見えた。

早苗「だからここで再び信仰を集めることになつたつてわけです。」

早苗はお祓い棒を構えた。その行動に、9人が一斉に戦闘を予感し構える。

諏訪子「残念だけど、話はまた後でね！」

三神は一斉に弾幕を繰り出した

その弾幕を天狗達は必死に避けている。というか逃げ出した。  
だが、その攻撃が將信達に届くことは無かつた

將信「うつわあ……なにそれ、強すぎない？」

峠「結構疲れるけどな……。主に精神的に」

峠の新能力、——念動力を使う能力——

これによつて敵の攻撃の動き方を自在にコントロール出来るため、実質峠は無敵だ。

ただ、問題は精神面の負荷が大きいこと。テレキネシスを使う際は常に迷いを見せてはならないのだ。

剛「まあいい機会だろ。能力でも試そうk」

將信「おつけー！」。

剛！地面お願ひ！ 峠はそれを前方に打ち出して！」

剛「んん、あ、ああ。———フツ!!」

剛はいきなりの指示に困惑しながらも地面を叩きつけた。辺りには大きなクレーターができ、勢いよく浮かび上がった大小様々の岩石が空を舞う

峠「・・ハツ!!」

さらに峠がその岩石を念動力で諏訪子達の元へと吹き飛ばした。それは音速をも超える凄まじい勢いだ。

諏訪子・神奈子「ツ！ 神術 『お祭り騒ぎ』

早苗「させません！ 秘術『忘却の祭儀』

諏訪子と神奈子はその行動に何らかの意図があると考え、咄嗟に合体スペルを発動した。

それに合わせて早苗も大掛かりな防護スペルを発動する。

諏訪子の周りからは巨大なミシャグジさまが、神奈子の周りからは巨大な御柱が3人に向かって降り注ぐ。早苗の防護スペルも展開しており、三神の周りからは莫大な神力が溢れ出ている。

そして岩石が諏訪子達の目の前に迫った時、わざとらしく將信は咳きながら、指をパンと鳴らした。

將信「大当たり…ばあん」

その刹那、あらゆる岩石は木つ端微塵に破裂し、凄まじい熱を発しながら三神を襲つた。

三神「つつつつ!!」

思わず後方に早苗達は退避する。

それぞれ足や腕に軽いやけどを負つていた。傷つくことのない神の胴体が血を吹いている。それが先ほどの攻撃がどれだけの威力かを思わせる。

諏訪子「…おつかしいなあ。こんなこと出来たの? 將信」

諏訪子は負荷により口から零れ落ちそうな血を拭い、昔と似通つた笑みを見せる。

將信「…はは。昔のままじゃないからね。————お願い、彩」

彩「…仰せのままに」

弓と化した彩は將信の手元に戻る

峡「結衣、僕達もいこうか」

結衣「だね。さつさと終わらせるよ」

結衣は黒色の双剣と化して峡の手元に戻る

神奈子「…いいだろう。——先手必勝」

神奈子は剛の気が緩んだ一瞬の隙を見逃さず、剛に拳を振りおろした

剛「…まだまだだな。劣化したか?」

神奈子「ツ!?

神奈子は剛の拳を軽々と片手で受け止め、不敵な笑みを浮かべた。

その表情にゾワリとした何かが背を通るように感じた神奈子は、本能的に剛から強引に距離をとつた

神奈子「…へえ、てつきり剛の腕は消し飛ぶかと思つてたけど」

神奈子はそれでも表情を崩さず、平静を保つてゐる。… ように見せてゐるはずだ

剛「…近接戦闘を俺に挑むのが間違いだろう?」

その一瞬で、神奈子の目の前には剛が現れた。まるで瞬間移動でも使つたかのように。

嘲笑いながら剛は言葉を発した

剛「… チエツクメイト」

そのたつた一度の蹴りを神奈子は腕で辛うじて受け止めるものの、衝撃で大きく後方に吹き飛ばされ、肺の中の空気が全て押し出される。思わず過呼吸になつた神奈子は、悔しがりながら戦闘続行不能の意思を示した。

剛「… 後は頼んだ、あんまりはしやぐなよ？」

剛は5人を見て神奈子の治癒に向かつた

一方早苗と諏訪子は、峠と將信の圧巻のコンビネーションに苦しんでいた。

諏訪子「…！」（やつぱり手強いか…）

思い思いの攻撃をまるで綿毛のようにふわふわと躲す峠と將信に、早苗と諏訪子は焦りを隠せなかつた。

なぜなら、この戦いは自分たちの運命もかかっている。いくら親友との戦いとはいえ、負ければ大きな損失が生まれるからだ。

將信「甘いよ！」

將信は、彩：元い弓を使い大量の矢を空中に乱射した。それは雨のように早苗と諏訪子に降り注ぐ。

諏訪子「そつちこそね!! 土着神『ケロちゃん風雨に負けず』」

諏訪子はそれを見越していたかのように水弾を発射し、將信のスペルを打ち消していく。

そして矢の相殺を確認した諏訪子は鉄、の輪を大量に峠達に向かって放つ。

その光景に懐かしみを覚えながら、將信は笑顔を浮かべた。

峠「… それ待つてた」

峠もニヤリと口元を釣り上げ、鉄の輪をコントロール下におく

諏訪子「…」

諏訪子はそれを見て、右足を後ろに下げ防御の姿勢を見せた

峠「… Go」パチン

峠の合図と共に、大量鉄の輪はものすごい速さで回転し始めた。それらは峠の頭上を浮遊している

峠「… ハアツ！」

峠は一斉にそれらを投げ飛ばした。

鉄の輪は木々を1寸も動かず切り裂いていきながら、ものすごい回転で諏訪子の元へと突っ込んでいった

# 風と神

早苗「つ!? 奇跡『紙一重』」

その言葉で、諏訪子の周りの——空間が歪んだ——円盤はありえないような動きで方向を転換させ、諏訪子の大きく左右にそれた。それによつて諏訪子は危機一髪、難を逃れた

峠「‥ふーん」

峠はそのスペルを見て無意識に言葉をもらした。

あの威力の、そしてかなりの和の円盤を逸らすとなれば、それなりに力を使うはず。

峠は早苗の強さを見余つていたのかかもしれない

早苗「諏訪子様、お怪我は‥！」

早苗は諏訪子に駆け寄る

諏訪子「大丈夫大丈夫。‥さて、こつちは準備が整つたよ」

そして突如諏訪子が手を翳すと、そこにいたミシャグジさまがどんどんと巨大化し始めた。

その大きさは最終的に巨木ほどにもなつた。

まるで龍の如く、その迫力は計り知れない。

神力も十分だ

諏訪子「実はさつきからこつそりミシャグジさまに神力を預けててね‥バレンなくてよかつたよ」

諏訪子はミシャグジさまに手を当て、少しづつ力を込めていく

將信「‥」

將信はそれを澄ました顔で何も言わずに見つめ、あの桜を思い出したのか険しい表情に変える。

諏訪子「まだまだ甘かつたね、將信。これで終わり!!」

諏訪子が片手をパーにして前に突き出すと、ミシャグジさまは大きく赤い口を天に向けて開き、水色の神力の球を巨大化させていく。辺りにはエネルギー音が響き渡り、周囲の木々を震わせる。

峠「‥そろそろ?」

將信「だね」

將信は先ほどの峠のように口元を吊り上げ、こういった。

將信「まだまだだね。諏訪子ちゃん」

峠「修行がたりないねえ」

なんと、將信が指をパチンと鳴らした途端、近くの風景が移り変わった。  
そこには先ほどまで倒れていたはずの剛も何故か立ち上がり、神奈子と戦っている。

諏訪子「…つ、神奈子が戦っている!?」

諏訪子はそれで全てを察したのか、顔を青ざめさせながらミシャグジさまに止めると  
合図するが、もう遅い

ミシャグジさま「グワああああああ!!」

咆哮と共に放たれた青空のような色をした極太光線を峠と將信は容易に躱す。威力  
が半端ではないといつても単調な攻撃だからそれと容易かつたのだ。

そしてそれは仕組まれたかの如く神奈子に追尾する形で向かっていく。

神奈子「ちよつ!?

神奈子は急な攻撃に躱せないと悟り、なんとかその攻撃を何とか防ごうとするが、そ  
れも虚しくあっけなく撃沈。追尾性能は峠の仕業だ。

早苗「キヤツ!?」

そしえ早苗も一瞬の出来事に戸惑っているところを剛に後ろから奇襲され、なんとも可愛いらしい悲鳴をあげて気絶した。

剛「そんな時間稼ぎする必要あつたか?」

峠「はあー、帰つてお風呂入ろう‥‥泥まみれだ」

剛と峠はストレッチしながら、何事も無かつたように話を進めていく。

將信「後はお願ひねーーー華憐ーーー」

將信は弓を空上に向け、一つの矢を打ち出した。

その矢はパンツ!と風船が割れたような音で爆発する。

その矢の近くにいたのは、さつきから姿を見せていなかつた華憐だった。

華憐「はいはい‥‥おしまいね」

華憐は両手で神力を波のようにして強烈な勢いで地に向かつて放つた。

諷訪子「ああ‥‥やつぱりすゞいね、みんな」

諷訪子は全てを理解し、安堵した表情でバタンと地に倒れた

—— 博麗神社——

靈夢「つたくねえ・ 異変起こしそぎなのよ。年に1回ぐらいでいいのに・ たまつた  
ものじやないわ」

靈夢はテキパキと宴会用の料理を作りながら愚痴をもらす

將信「あははは：」

將信達は博麗神社を掃除しながら靈夢の言葉に答えていく

靈夢「： 悪いわね。迷惑かけてて。異変解決出来なかつたし」

3人「：」

3人は互いに顔を見合わせ

將信「ふふ： ふふふふ：」

峠「あははははつ！」

剛「： くくく：」

一齊に笑いを噴き出した

靈夢「え、にやなによ!?」

將信「あはははつ！」

靈夢は赤面しながら3人に向かって声を発するが、そこで囁んでしまいさらに笑いを

誘つてしまふ

靈夢「…」

靈夢はムスツとした表情で3人を見る。その表情はゲームで負けて拗ねている子供にも似ていた。

剛「ふふ… 悪かつた悪かつた。あんなことを靈夢が言う日が来るなんてなあ」

剛はまだ笑いがおさまらない様子で口元を抑えている。

魔理沙「邪魔するぜー」

靈夢「邪魔するなら来ないでいいわ」

i n 博麗神社 宴会

剛「うつぶ…」

剛は飲みすぎたのかゲップを思わず出した。酒に強くかなりの本数を飲んだのにまるで酔っていない。永琳から貰った細胞の劣化を防ぐ薬を一口飲んで、ふうと息を吐く。

その目はどこか遠くを見ているようで、どこか楽しくも、悲しくもさえ見えた

ルーミア 「どうー。だいちゃんが呼んでるー」

剛 「…ん、ああ、わかつた」

剛はよつこらしょ、なんておつさんくさいことを言いながらルーミアの言葉で立ち上がり、大妖精達の元へと向かつた。

剛 「…すっかり酔いつぶれてるな」

ナルノ 「ごう！ああたいとおお、しょおうぶだあー」

ルーミア 「勝負だー」

ナルノはふらつきながら立ち上がつて口元をだらしなく開けたまま笑つてゐる。それに便乗したのかルーミアも笑顔だ。ルーミアはほろ酔いほどの様子で酒に強い事が分かる

大妖精 「そなんですよ… その、酔い醒ましつて出来ますか…？」

剛 「うーーーむ…」 剛は頸に手を当てて考える

剛 「出来るぞ、ほい」

剛が両手をパチンと音を鳴らしながら合わせると  
チルノ「ふにゃ……」

チルノは剛にもたれかかるようにして気絶した。

大妖精「ええ!?」

思わず目を見開く大妖精。

剛「それで……ちよつと待つてろ」

剛はチルノのお腹に手を当て、能力を行使している。辺りからは僅かな靈力がもれだしていた。

剛「……よし、出来たぞ。目が覚めたらほろ酔いぐらいだろう。」

大妖精「ありがとうございます!ところで何故気絶させたんですか……?」

剛「寒苦しかつたから」

華憐「……ホント便利よね。それ」

華憐は峠を横目でじろりと見ながら言葉を発した。

峠「でしょ?最初は難しかつたけど慣れたら案外いけるものだね」

峡はお皿や料理を念動力を駆使して、なんとも器用に机の上を移動させて食べ物を動かしている。

結衣「ああ：きもちー」

将信「…」

峡達の隣で結衣は將信に背中や肩をマッサージされて樋をほぐされ、極楽といった表情を浮かべる。

一方將信は何故自分が結衣のマッサージをしないといけないのかと疑問に思つていた

将信「…えいつ」

結衣「!? ちよつあははははははははやめてあはつはははつふふふふふふ…」

將信のやり返しに結衣は思わず笑い転げた。6人は完璧に互いを信頼しあつていた

宴会には様々な者がいた。様々なグループが出来た。仕事の事で愚痴り合う妖夢と咲夜や、外の世界の事について話す、そしてそれを取材する早苗とにとりとそして射命丸。

キヤツキヤと燥ぐ妖精達とフラン。

今夜は新しい仲間も加わり、とても賑やかな宴会となつた

後日 in 家

將信・峠「うつ…」

すっかり二日酔いになつた2人を置いておいて、剛達は今回の異変についてまとめていた。

結衣「それで諏訪子達はここにきた…と」

峠「うん。そういう事だね」

彩「あれは、えーと信仰の問題は解決出来たんですか?」

峠「博麗神社の近くに分社を置くことで合意したらいいよ。」

彩「なるほど…。よかつたですn」

射命丸「失礼します! 清く正しい射命丸ですつ。今回の異変について」

剛「帰れ」 將信「帰つて」 峠「帰ろ」

面倒くさいのか剛達は思わず嫌な顔をする

射命丸「酷い!」

彩「ま、まあまあ…。」

射命丸「え、えっと… 取材は…？」

射命丸は恐る恐る將信に尋ねる。

將信「… しようがないな。受けるよ」

射命丸「ありがとうございます！今回の異変は大体展開が分かつたのですが…」

剛「のぞき見は趣味が悪いぞ」

射命丸「… それで、何故剛さんと神奈子さんはまた戦っていたんですか？結界？」

射命丸は剛を横目で真顔で見たあと、將信にまた笑顔を向ける

將信「そうだよ。僕のーー不可思議な結界ーーで幻覚を見せただけ。彩が途中で抜け出したの気づいた？彩にはもう一つ音を遮断する結界を作つてもらつてたからね」

射命丸「な、なるほど…。ところで、今回戦闘といった戦闘はほとんどありませんでしたよね」

峠「だね。最初はやる予定だつたけど、友人傷つけたくないでしょ？気が変わったから指示した」

数分後

射命丸「ふむふむ… ではこれにて、です。ありがとうございました！」

# 昔と今

i n 白玉樓

妖夢「…あら、珍しいですね。靈夢さん、ここは基本的に立ち入り禁止ですよ？」

靈夢「んな事知つてゐるわ。先代さんに話があつてきたの」

靈夢は手をひらひらとふりながら、やる気のない態度で妖夢と話す

妖夢「ああー、鈴さんですね…しばしお待ち  
を」

（本当はあまり外と関わつてはいけないけど…）

妖夢はタツタツタツと駆け足で鈴の元へと向かつた  
靈夢「…」

靈夢はその間、ふと3人のことを考える。今更だけど、あの人たちが何者なのか検討  
もつかない。

閻魔は異世界がなんたらなんて言つてたけど、詳しい事は教えてくれなかつた。

今考えれば、靈夢は3人の過去のことをほとんど知らない。

そうして靈夢はそんな歯がゆい感覚に嫌気がさし、詳しく述べを知っている可能性のある鈴の元へとやつてきたのだ。

鈴「・おまたせしました。中へどうぞ」

———  
in 白玉楼内客室  
———

畳のいい匂いが香る、屋敷の角にある客室にから案内された靈夢は、鈴としばらく談笑していた。

やはり博麗の巫女を経験している2人だ。性格は正反対でもやはり共通する部分はあるのか会話も弾んでいるようで、靈夢自身も驚いている。

それは何故か。

靈夢は基本的に人に平等に接する。良きいえば面倒事に巻き込まれにくく、悪くいえば”靈夢としての友達”は幻想郷では少ないことになる。

だからここまで深く会話を掘り下げるのは久しぶりだつたんじやないだろうか  
コンコンコン

妖夢「失礼します。……どうぞ」

妖夢はノックをした後、鈴の応答に応じて丁寧にドアを開けると、お茶とお茶菓子を置いた。

鈴「ありがとうござります」

靈夢「ん、ありがと」

妖夢「いえいえ・ゞゆつくりどうぞ」

妖夢は再びドアをパタンと閉めた。

靈夢「…あの子も大変ね。こんなだだつ広い屋敷の隅々まで、やることだらけじゃない」

靈夢は同情した。いや頬杖をついている辺り他人事のように捉えているのかも知れないが  
…。

鈴「そうですねえ…。幽靈さんたちがよく家事を手伝ってくれてますよ。妖夢さんああ見えて普通の人間が亡くなるぐらいの年にはなつてるでしようし」

靈夢「…はあー。そんな長い間、退屈せずに過ゞせるのかしらね」  
靈夢はふと三人と妖夢と、そして自分を照らし合わせて、靈夢はお茶を一口のみ、大

きくため息をついた。その目は近くを見つめているようで、どこか遠くを見ているようで……。

鈴「……あ、それで、私に何のご要件ですか？……ちなみに神社のお手伝いはしませんよ？私もう卒業しましたし」

靈夢「流石に違うわよ。……あの3人のことを聞きたくてきたの。」

——辺りが静まり返る——

鈴「3人：峠さん達ですか。」

靈夢「うん。あんたなら何か知ってるんじゃない？」

鈴「……えっと、実は私、生前は今の靈夢さんみたいになにも知らなかつたんですよ。あの人達のこと」

靈夢「……」

そう話す鈴から靈夢は目を離さず、じつと堪えて静かに話を聞く。

鈴「でも死んで、つい最近分かつたことがあるんです。」

靈夢「……分かつたこと？」

鈴「……あの人たちは、——純粹過ぎる——って事です。だから閻魔様は仰つてました。「絶対に彼らを裏切つてはいけない」と」

靈夢「……何言つてゐのかサッパリなんだけど」

鈴 「まだ分からなくていいんです。孰れわかる時がきます」

鈴 「…過去を教えましょう。…彼らは、実は、過去に××

×××

数十分後

靈夢 「…」

その頬には、うつすら涙の跡が浮かび、目が充血していた。それもそのはず、三人の過去は子供にはあまりにも重すぎる。それも抗いようのない運命なら尚更だ。

鈴 「…貴方はこれを知つて、どうしますか？」

靈夢 「…どうするって、今まで通り、よ。」

鈴 「…そうですね。彼らの事を知つた今、貴方が出来ることは今まで通り接することだけ。そして貴方は彼らを支援して行かなければならぬ」

靈夢 「…要是その神つてやつをぶつ潰せばいいのね？」

靈夢の拳に力が入る。

鈴 「…それには沢山の力が、仲間が必要です。まだその時じやありません。」

ちなみにこの話は他言無用で。やはりそういう人”もいるでしようから。”

鈴はいかにも冷静に振る舞う。が、その声は震えていた。

鈴「とりあえず、剛さん達を裏切らない。誓つてくださいね」

霊夢「…ええ。」

i n 永遠亭

鈴仙「捕まえた… わよ… 覚悟しなさい…」

てゐ「ぎやー！」

てゐは鈴仙にイタズラがバレ捕まつた。

妹紅「筍はさつさとくたばれえええ！」

輝夜「あんたは焼き鳥にでもなつてなさい!!」

妹紅と輝夜は相変わらず意味もなく殺し合いをする。”殺し合うほど仲がいい”のか…?

峡 「… 騒がしいな」

剛 「いつも通りでなによりだな」

峡 「… そんなもんだつけ」

將信 「そんなもんだよ」

3人 「… ハア～」

3人は永遠亭の縁側に腰掛けて、竹林の風景をのんびりと眺めていた。

將信 「… この何億年かさ、色々あつたよね」

剛 「… 急にどうした」

將信 「でも得た情報が「とりあえず敵を倒していく」だけって、相当焦らないといけないん場面じや～」

峡 「それも今更、じやない：？」

將信 「そうだけど… また修行した方がいいかなあつてね。ほら、敵との戦いに備えて彩たちの使い方の確認とかさ」

峡 「まあ、やることも無いしやつてもいいんじゃない？」

剛 「俺も全然構わないぞ。まあとりあえずは女性陣と話さないといけないだろ

i n 山奥

剛 「さて、まず誰からやる？」

人里からかなり離れた山奥、ここなら誰にも見つからないと踏んだ剛達は強力な結界を張つた。修行で周囲に被害を与えないためだろう。

峠 「あ、僕先でいい？まだ結衣との戦闘に慣れていいから…」

剛 「そうだな。じゃあ俺と華憐が相手をしよう。弓と双剣は相性が悪いだろうし」

華憐 「――それもそうね。じゃあ彩と將信は結界強化を頼める？」

彩 「はい。お二人もあまり無茶はされないようにしてくださいね…」

將信 「了解」

彩 「それでは… よーい、始め！」

その合図と同時に、結衣は双剣へともどり、峠とともに駆け出した  
そして一方の華憐も槍へと姿を変え、剛と駆け出す

剛と峠は互いに地面にクレーターレを浮かべながら走り出し、――そして刃が混じり

あつた——

峡「さつすが……」　剛「……ほう」

峡は両方の剣で剛の重い一撃を受け止める。ギリギリと音を鳴らしながら、それでも互いは攻撃の手を緩めない。

その刹那、峡は急に体制を変え、剛の懷に潜り込むようにして右手にある真っ黒な剣を横に切り裂くようにして振るつた。

剛「……」

ガギインという音を響かせ、それを剛は表情一つ崩さず槍の柄の部分で受け止めた。辺りにはそれだけで凄まじい風が生まれ、木々を揺らす

峡は剛の防御の硬さを再確認したのか、さらに攻撃を加速させる。まるで踊っているかのように、連続で攻撃を繰り出していく。

双剣から繰り出される無数の連撃はあまりの速さにスローモーションにすら見えた  
だが突然、峡は攻撃をやめ1度後方に退く

峡「うーん……？ やっぱりなんか左のほうが軽いな……全然攻撃が響かないんだけ

ど：

峡は左手に持った、真っ白な剣を素振りして違和感を口にする。

華憐「気づいたわね。それは結衣の能力よ」

華憐は武器化した状態のまま、テレパシーのように音声を伝える

峡「あ…なるほどね。それでその能力っていうのは？」

結衣「実はあたし、それぞれ剣で敵に対する効き方が違うの。白い方の剣は妖怪なんかに対して、黒い方の剣は神とかに対して威力が強くなるの。今回は白だつたから威力も落ちて：」

峡「ああ、だからか」

華憐「そういう事よ。」

峡「両方の色は変えられないのかな？」

華憐「まだ試したことは無い、はずよ。あなたの精神状態に影響してくるから、詳しく述べる」

峡「ふーん：なるほどねえ」

剛「…んで、修行続行か？」

疲れを切らしたのか、剛は腕立て伏せをしながら峡達の会話に入ってくる。

やはり剛は体力が既に化け物なのだろう。戦っている本人は短く感じているのかも知れないが、ここまでで数分は経過しているはずだ。

峡「色々考えたいんだけど、うーーーん……。あ、一つだけ試したいことがある」

剛「別になんでも構わない。かかつてこい」

剛は槍を斜めに持ち、防御の姿勢を見せる

峡「了解。ーーーこうして、こうか」

しばらくの沈黙の後、峡が双剣に手をかざすと、二つの双剣は柄と柄を近づけ合い、浮遊しながら回転し始めた。

それは急激に加速し、あつという間に、巨大な回転する円盤にもなつてしまふ。

將信「あれ……諏訪子のやつだよね」

彩「そうですね、ただあの威力、剛さん達大丈夫でしょうか？」

峡「ーーツ、いくよ!!

ハツ!!」

峡の声と共に、円盤は横回転の状態で猛回転しながら剛達へと衝突した。

剛「グツ……」

甲高い金属音が結界中に鳴り響く中、剛はそれを槍で受け止めようとする。

しかし

# 天気と気質

華憐「んぐっつ・・・――」

華憐は苦しそうに喘いだ

剛「・・ まづいかーー フツツ!!」

すかさず剛は左手を槍の先端部分にあて、大きく靈力を使つた。それが何を意味するのかはすぐに分かることとなつた。

その瞬間突然とそれは華憐（槍）から滑るように外れ、軌道が変わつた。  
その先にいたのは・・・

将信「ちよつ!? 彩お願い!!」  
円盤

彩「は、はい!？」

そう、後ろで結界強化をしていた將信達だつた。

彩は急な事に混乱しつつ、すぐさま將信の言いたいことを理解したのか、大きく將信から見て右側に移動した。

結衣（円盤）と彩との距離は遠いせいか、まだ少しだけ時間がある。

彩は弓を素早く構え、ゆっくりと矢を引いて慎重に狙いを定める。

將信「…。」

そして將信はもしものことに備えて結界の力を一部に集中。加えて能力で靈力を神力に変更し、彩にそれを渡す。

——そして円盤は空を切りながら將信へと迫る——

彩「… ハアツ！ 光弓『サンライトレイ』!!」

彩の放った弓矢は、目にも留まらぬ早さで円盤のど真ん中に直撃した。

円盤は大きく斜めにバランスを崩し、軌道を大きく変え回転を急激に減速させながら地に墜落することになった

？

彩「―――皆さん大丈夫ですか!?――」

剛達は、急いで倒れた結衣と華憐を巨木の傍に横にさせた。

その時にちょうど日陰になつてゐる場所を見つけられたのは幸運だろう。

華憐「・――――ええ。久々に怪我したわ!」

華憐は寝かせられるとまず人間化した。脇腹が抉られるように切れていた。全長2

0 cmほどの傷口からは血が溢れ出している。

臓器には当たらず筋肉だけを傷つけたことが唯一の救いか?。

もし人間であれば生死の間を行き来していただろう。

結衣「ん!……」

一方の結衣は彩の光線によつて胴体の真ん中に小さな3 mmほどの穴があいていた。

これは臓器を傷つけているのか結衣は若干汗をにじませてゐる。しかし6人に焦りは見られなかつた。

剛「彩はまず結衣の治癒を、將信は彩に神力を与えてくれ」

彩・將信「了解しました(了解)」

剛「峠と俺は將信に靈力をやるぞ」

峠「了解」

剛の的確な支持により、治癒は順調に進められていく

剛「ところで……峠、あれは止められなかつたのか？」

あの円盤は結衣であり、それを放つた峠であれば通常は止められるのだが……

峠「放つたのはいいんだけど……思つた以上に回転速度が速すぎたんだと思う。制御が出来なかつたよ。結衣、ごめん……僕の力不足だ」

結衣「…………いや、あたしは大丈夫だよ！、気にしないで。もつと修行しないとねー」

將信に治癒を施されながら、結衣は涼しい顔で手を振り、笑顔を作つてゐる。  
そして見る見るうちに傷は塞がつていった

將信「まあ大事に至らなくて良かつたんじやない？あの威力はもう勘弁して欲しいけどね」

（数分後）

峠「……ところで剛、攻撃を受けた時どうやつて円盤の起動をすらしたの？」

治癒を終えた6人は座り込んだ。

華憐「あ、それ私も気になつてたわ」

華憐は峠の質問に同意する

結衣「？ 能力じやない？」

結衣は人差し指を頬にあてながら自分の意見を示した

華憐「私が強化されたようには感じなかつたのよ。」

剛「ん、ああ、あれは——摩擦力を弱化——しただけだぞ」

結衣「……ああ、そういうことね」

彩「なるほど……」

皆納得した表情で頷く。

將信「いい感じの判断、剛らしくない」

剛「ああ、？」

將信「冗談冗談！」

將信は立ち上がり、剛から人間離れしたスピードで逃げ回る。

それはただの人間からみれば風にしか見えないだろう速さで、だ。

峠「……で、もう今日やることは尽くしたけど、後どうする？」

峠は半目で2人をチラ見したあと、結衣達に向かつて笑顔で言葉を投げかける

彩「…………あ、そういうえば旧地獄の件はどうなつたんですか？」

一瞬の沈黙の後、彩はふと思いついたのか彩に峠に確認をとる。

峠「： そういうえば言つてなかつたね。許可は取れたよ。ただ紫曰く、「大事を起こすな」、だつてさ」

真顔に戻つた峠はふと左上の方向を見ながら返答した。

剛「そうか。： んじやあ今からでも行くか？」

将信「痛い痛い痛い」

剛は片手にズルズルと將信を引きずりながら峠達の元へと戻ってきた。

日はまだ頭上にある。問題ないだろう

峠「だね」

華憐「そうね。ところでその旧地獄の入口は？」

——辺りに再びおかしな沈黙が流れる——

将信「そういうえばボクは知らない： 誰か知らないの？」

結衣「あたしはしらなくい」

彩「同じく、です。」

剛「俺も知らないな」

峠「： とりあえず紫探そうか。：」

た。

6人は自分達のヘンテコなミスにようやく気づき、3グループに別れて紫を探し始めた。

3グループ（人+神）に別れたのには理由があり、結衣や華憐、彩は異常なモノを抱えている共通性からか、テレパシーを送りあえる能力を持つていて。

情報連絡手段に長けているのだ。

～太陽の畠上空～

將信・彩グループ

將信「…あつつい…」

彩「まあ、所々雲があるのが救いですね：」

将信と彩は汗を滲ませながら、のんびりとひまわり畠の上空を飛行していた。

彩は將信より数段も視力が高いためかかなり上空を。將信は人間だからか低空飛行

で紫を探す

～数分後～

彩「ここにはいないようですね」

彩と將信は一旦合流した

將信「うん。とりあえず紅魔館にでも行つみる？」

彩「・ そうですね。行く宛もありませんし」

「 i n 妖怪の山 峠・結衣グループ

結衣「うわ・・・」

峠「なんでここだけこんなに荒れてるんだ・・・」

妖怪の山の山はまるで囲われているようにその部分だけ大きな嵐が・・・いや小型の台風のようなものが吹き荒れていた。

射命丸「つつつつつつ――――――」

あ、射命丸だ。

二人はほほ同時にそんな事を思つた。

嵐に巻き込まれたのかグルグルと射命丸は円をかくように振り回されている。

峠「はあ・・・ ほい」

射命丸「ぐぼぼぼぼつ!」

峠が両手をパチつと音を立てて合わせると、射命丸は嵐の中強引に峠の元へと連れてこられた。

射命丸「はあ・・・ はあ・・・ あれ? 峠さん? ありがとうございます?」

射命丸はボサボサになつた髪、乱れた服装で峠達を見る。

まだ混乱しているのだろうが、射命丸は髪を整えながら、ゆっくりと立ち上がつた

峠「…大丈夫?」

射命丸「じゃないですよお…。最近嵐が止まなくて困つてゐんです。

つてあ

れ?ここしか荒れてないじゃないですか!!」

峠「いや僕に言われても困るんだけど

結衣「あのー、文ちゃんは紫知らない?」

射命丸「八雲紫ですか?最近は見てないですね」

結衣「あー、わかつた。ありがとー」

射命丸「いえ、お力に慣れないので申し訳ないです…。」

射命丸はペコペコと頭を下げる。射命丸の上司である天魔と仲の良い6人の内の二人だ。同じく二人も射命丸にとつて上司のようなものなのだろう。

〔彩「太陽の烟に紫さんは見当たりませんでした。紅魔館に向かいます」〕

峠「————じゃあ僕達は人里にでも戻つてみようか」

———————

i n 博麗神社 剛・華憐グループ

剛 「邪魔する」

靈夢 「あら、どうしたの？」

そして剛と華憐の2人は雲一つない快晴の中、靈夢の元に訪れた。守矢神社の異常がないことを確認したからだ。

笑顔を浮かべた靈夢にいつもと変わらぬ風景。ただ変わっているところは…

剛 「どうしたこれ」

靈夢 「どうしたもこうしたも無いわ!!」

靈夢は笑顔を急変させ眉を釣り上げる。

なんと神社は完全に崩壊していたのだ。

華憐 「… 何が起こつたのよ」

靈夢 「… 昨日大きな地震が来たじやない？それで神社がこんな事に…」

靈夢は神社ガラクタだつたものを見て苦虫をかみ潰した様な顔をする

剛 「… こちらにはなにも影響はなかつたぞ」

靈夢 「… それ本当？」

靈夢の耳がぴくりと動き、疑心暗鬼に思考を始めている。

剛 「ああ。恐らくここだけ、集中的だ」

靈夢は啞然とした表情を見せる。靈夢は迷いがないためか、非常に心情が読みやすい  
華憐「誰かが故意的に起こした、って事n」

【彩「紅魔館にて深い霧の発生を確認。白玉楼の近くでは雲一つない青空を確認。紫さんの中に：何かおかしいです」】

結衣「人里に紫はいなかつたよー。ただ永遠亭の近くはやたら風が強い：異変かな。」

華憐「…どうやら地域ごとに天気が極端に違うみたいね。それが原因かも」

剛「天気？ そういえば守矢神社の所だけ何故か雨が降つてたな」

靈夢「…」、そういえば魔理沙も雨が多すぎて困るとか言つてたわね。こつちは雨が降らなくて困つてゐるのに」

確かに神社の周りの植物達は水が得られないせいか弱つてゐるようにも見える

剛「…まずは異変を解決しないといけないらしい。紫はその後だな。天気が原因、で探るぞ。天気を操るやつに知り合いは？」

靈夢「ん…たぶんいないわね」

剛「そう、か。うーむ…」剛は頭をフル回転させて思考を巡らせてゐると

華憐「天気というか、地震を起こせる奴はいるじゃない。——天人よ」

【華憐 「紫は後回し。多分天界になにかあるはず。まず異変解決をするわ  
彩・結衣 「わかりました（わかつた）」】

# 赤と白

靈夢「面倒くさいわねえ・」

靈夢は血眼で全速力で天界へと向かっていた。そして靈夢についていく剛達。彼らも流石に神社崩壊はまずいと感じたのだろう。

靈夢「：つて・？ 紋色に：」

靈夢は全速力で空を駆けている時、ふと違和感を感じて空を見上げた。その空は恐ろしささえ感じさせるほどの鮮やかな緋アカで多い隠されていた

??? 「緋色の霧は氣質の霧。緋色の空は異常の宏観前兆。… 緋色の雲は大地を揺るがすでしよう。」

峠「へえ、竜宮の使い？ 珍しいね」

竜宮の使いは峠達の前に立ちふさがった。

そう、実は峠達は天界へと行つたことがなかつた。知識は腐るほどあるものの、行く機会がなかつたのだ。

剛「：まあ、地震はもう起きた。今更遅い」

そして剛は冷淡に竜宮の使いに先ほど起こつたことを述べる

衣玖「…!? それはありえません： 雲がおさまっていない。 ——いやあの方

ならもしかしたら」

靈夢「だあーもう面倒！ 後はよろしく！」

靈夢はとうとう我慢出来なくなり衣玖と剛の間を隙間を通り抜けていった。鈴に稽古をたまにつけてもらつているようだが、相変わらずの性格は変わらないらしい。

6人「…」

衣玖「…」（嘘ではなさそうですね）

衣玖「貴方達は、これを解決しに来たのですか？」

衣玖が様子を伺うための質問に、結衣達は軽く頷く。

結衣「そうだよー。というか、早く行かないと大変なことになると思うけどね」

結衣はチラッと横目で霧を見た。その緋色は天界に近づくにつれて濃くなつていている様な気がした。

衣玖「——お先に進まれてください。総領娘様を相手にするのは、大変だと思いますが」

衣玖は苦笑いしながらそつと通せん坊をやめる

華憐「話が早くて助かるわね」

彩「つ、急ぎましよう。衣玖さんは私と一緒に行つてもらつて、念のため皆の避難を…お願いしていいですか？」

衣玖「はい。構いません」（これで被害者が出て天界に悪い噂が広まつてもあれです  
し：）

峠「じゃあ僕達は靈夢のここにいこう。氣を引き締めてね！」

剛・將信・華憐・結衣「了解」

i n 人里

彩「…つと、こんなところでしょうか」

彩は人里の中心地に人間妖怪問わず、子供など自身で身を守れないような者を集め  
た。（といつても既婚者の大半は子供に付き添つているが）

そして彩は人里の上下左右に結界を貼つた。立方体のようになつた結界からは、たと  
え力の弱いものでも凄まじい神力が感じられるだろう。

衣玖「だいたい避難は終わりました…まだ空は変わってないですか…？」  
相変わらず赤い空は地上を覆い尽くし、全てを不気味に照らしている。

それはまるで紅霧異変を思い浮かばせた。

彩「…そのようですね」（何か…嫌な予感がします。皆さん大丈夫でしょうか…）

i n 天界

靈夢「…さあて、異変の犯人さんは…あ？…あんたね」

??「…やあああつと来たわね博麗の巫女、貴女だらしないわねえ」

靈夢「あんただけには言われたくないわ…」

天人、比那名居天子は欠伸をしながら岩に座り、靈夢が来るのを待っていた。よほど退屈だったのかかなり眠たそうな様子だ。

天子「さあて、相手、当然してくれるわよね？」

天子は頬を軽く手で叩き、その後ゆつくりと立ち上がりつて剣を抜いて静かに構えた。

靈夢「…まあ理由なんて後でいいわね。神社の責任は取つてもらうわよ!!」

——そして天子はニヤリと笑い、靈夢の元へと駆け出した——

天子「はあっ!!劍技『氣炎万丈の剣』」

天子は走りながらスペルを宣言し、緋想の剣を闇雲に振り回す。

ただの初心者がするような適当な攻撃。しかし何故か、靈夢にはかなり効いている。

靈夢「ぐつ…」（また微妙などこを…）

現在靈夢はお祓い棒で天子と向き合つてゐる。お祓い棒は軽量なものリーチは短い。天子はそこをつき、リーチを上手く利用して戦つていた。天子は靈夢の異変解決の様子を事前に見ていたのだ。

靈夢「なら！珠符『明珠暗投』」

靈夢はそれの対抗策を出した。

青白く輝いた大きな陰陽玉を地面にはなつた。それらはバウンドしながら地面に散らばつた。しかしそれだけではなく、それらは消えることなくそこに居座つてゐる。

そう、これは撒菱と同じような役割をしてくれるのだ。

天子「つ、面倒ね」

天子は無闇に突撃するのは危険と判断し、一旦靈夢から離れ、陰陽玉を地道に赤色の弾幕で消し飛ばしている。

靈夢「今！夢符『夢想封印』」

靈夢はその隙を見逃さずスペルを宣言した。数々の鮮やかな特大ホーミング弾は順調に天子にむかっていく

しかし

天子「む・：地符『不讓土壤の剣』！」

天子は緋想の剣を地に突き刺した。そして刹那、それと同時に大地は急激に隆起して弾幕を防ぐ壁となる。ホーミング弾は簡単に相殺されてしまった。

靈夢「そんなのありつ!?」

靈夢はさらに勢いをあげた天子の攻撃を後退しながらなんとか躱していく。

靈夢「…仕方ない！神技『八方龍殺陣』」

靈夢はギリギリまで天子との距離が縮まつた時、スペルを宣言した。そして靈夢を中心に無数の弾幕やお札が展開された。封魔陣の上位互換の上位互換というような密度と威力は見る者を圧倒する。ここが地上なら岩は碎け木は薙ぎ倒されていただろう。ここまで引き付けたのだから確実に被弾するはず。そう靈夢は考えていた。

天子「ああ・やっぱり地上つてほんつとうに面白いわ！」

天子は満面の笑みを見せた。

そして目にも留まらぬ速さで靈夢から離れ、

ジエットコースターのようなスピードで120。ほどの角度をつけて急激に上昇した。

そして靈夢の真上に来た時、スペルを宣言する

天子「これで終わりよ!!『全人類の緋想天』

靈夢「!？まずつ！」

天子は高温になつた剣を振り上げ氣質を集中させ、――――――地に解き放つ  
た――――――

天子「…あ、あれ？」

はずだつた。天子の持つ緋想の剣はまるで意味をなさず、まるでガス欠を起こしたか  
のように反応を示さない。なをとスペルが発動しなかつたのだ。

天子「――きやつ！」

靈夢「…？」

そして天子はあえなく靈夢の弾幕に被弾し地上に落下していく。

小町「…つと」

それを突如現れた小町が受け止めた。そして靈夢は怪訝な顔をして小町の元へと駆  
け寄る。

靈夢「…何であんた達がここにいんのよ」

美鈴「私はお嬢様が：借りを返しに・・つてことで」

小町「ああーアタイも同じようなもんだよー。」

(仕事手伝つてくれたお礼が言えないって……四季様も可愛いところあるもんだね)

靈夢「……まあいいわ。で、この雲は何で収まらないのかしら」

小町「そんなのアタイ達に言われてもねえ?」

美鈴「あはは……——ただ、何者かの気を上から感じます」

美鈴は目を細める

靈夢「……なーんか嫌な予感がするわ。」

(スペルの発動ミスはあの天氣のせいで不良でしようね……他に天氣を操る種族なんていたかしら……?)

———そして突如天界に一つの咆哮が木靈した————

靈夢「つつ?!なに!?’

靈夢と美鈴はまるで耳を塞ぎたくなるような咆哮を聞き、反射的に体を斜めにそらして構える。そして小町は鎌を肩にかけながらそれを見て神妙に呟いた

小町「あれは……ちょっと不味いね。」

嵐のような黒い雨雲に変化した空の下にいたのは蒼龍、いや、龍は黒かつた。言うならば、玄龍だ。

鱗と鱗のつなぎ目や髭は青光りしている。

体長は山を超えるような大きさで、黒光りした体は金属のように輝き、神々しくも

禍々しい迫力を放つていてる。

その圧倒的な神力を前に靈夢達は思わず足がすくみそうになるのを堪えている。

靈夢「つ！これだけになると幻想郷が…」

剛「おい！無事か？状況は…」

そこへ剛達はようやくやつてきた。

靈夢「…見ての通りよ。」

剛「……………りや厄介だな。」

靈夢「ええーっと…まずは急いで結界で地上を守らないといけん」

華憐「落ち着きなさい。さつき紫と会ったの。紫に將信、彩と衣玖に力を貸しても  
らつて地上は結界で覆つてるわ。安心しなさ」

結衣「…でもこの龍、結構やるんじゃないかな。油断は禁物かもね」

グギヤアアアアアアアアアアアン

龍は今度は明確に、彼ら（彼女ら）に向かつて咆哮を上げながら、大きな黒い尾を豪  
快に振るつた。

小町「いくよ！魂符『情け無用の鎌鼬』」

美鈴「はい！華符『彩光蓮華掌』」

小町は巨大化させ威力を倍増させた鋭い鎌を躊躇なく玄龍の尾を目掛けて振るつた。美鈴もそれに合わせるように蓮の花のような形をした弾幕を放つ。

そして龍の尾と2人の攻撃がぶつかりあつた瞬間。あまりの衝撃波が生まれ美鈴と小町は後方に大きく吹き飛んだ。

しかし幻想郷でもレベルの高い2人はそれを乗り切ることが出来た。  
小町は距離を操つて木々にぶつかるのを防ぎ、美鈴はなんとか空中で体制を整えることができた。

美鈴小町とともに息を切らすほどの大技だが、虚しくも龍は全くの無傷。あまりの力の差に思わず2人からは苦笑みがもれる。

玄龍「グアアアアアアアアアアン!!!」

そして突如玄龍は再び咆哮した。口を徐に天に向かつて上げると、黒い紫色の巨大なエネルギー弾が生まれさせる。

エネルギー弾はだんだんと巨大化していき、そこからはまるで黒の紅炎のようなものがバチバチと音をたてていた。

剛 「まてまてまで、ありやまざい……!!」

(ただでさえ結界の範囲が広いつてのにあの威力を受け止められるのか……!?)負荷がか

かりすぎるぞ…)

峡「…つまづは弱らせるよ！僕と靈夢は足狙うから剛は龍を！」

峡は自分達に匹敵するほどの威力の攻撃に思わず目を見開くが、すぐさま思考回路を加速させ全体に指示をする

剛「…了解。なるべく離れてくれ」

剛は右足を下げる右腕を引き、左腕を大きく前に突き出して、靈力を爆発的に噴出させる

そして峡達が左右に退避した時、2つの叫びが地に、天に響き渡った

玄龍「バクレツ『インフェルノ』」

剛「怪力『鬼に神槍』」

## 機械と魂

玄龍が紅炎を放つと同時に、剛はスペルを宣言した。剛が持った華憐、元い神槍からは黄金色の光が放たれ、見る見るうちに神力、靈力が莫大に増加していく。

そしてその光は次第に黄金色から赤へと変化した。

ここまで時間はわずか5秒。いくら峠達でもここまで一気に力を強くすることは出来ないだろう——しかし、触れたものの強弱操ることが出来る今の剛にとつて、それは容易なことであった。

剛「……！」

剛の目はまるで獲物を捉えた狼のような鋭い目つきに変わり、無言で紅炎に向かつて駆け出した。

恐れを知らずに突き進むその姿に迷いはなく、剛は思い切り飛躍し、思い切り槍を振り上げ

——そして剛は紅炎を叩き割つた——

剛「……（なんとかいけたか）、峠！靈夢！頼むぞ！」

峡「了解」

靈夢「ええ！」

剛は衝撃波で大きく吹き飛ばされるものの、空気抵抗を強化し踏みとどまることが出来た。

そして剛に龍が注目している間に、靈夢と峡は龍の足目掛けて一目散に突進し攻撃した。

峡「かつたいな…」

靈夢「なんのよこれ…！」

靈夢のお祓い棒も、峡の双剣結衣でさえも、その攻撃達は玄龍に浅い傷程度しか入れる事が出来なかつた。これではバランスを崩すことも叶わないだろう。

結衣「ア、黒でも白でもないらしい…魂がないよ！」

結衣はテレパシーで峡に言葉を伝える

峡「あやつり人形か…」

——そして突如、龍は動きを止めた——

剛「…なにか来るぞ」

靈夢・峡・小町・美鈴「…」

辺りには静けさが戻った。変わりに禍々しいオーラーが強くなつていく。

將信「まずい！天子が!!」

將信の叫びに思わず峠達は振り向いた。そこにいたのは確かに眠つっていた天子だ。しかし様子を見ると酷く魔されており、汗も尋常ではない。誰がどう見ても異常である。

小町「：能力干渉…！？また酷いことをやるもんだねえ…」

龍は天子の能力に干渉しているようだ。本来精神や肉体と能力は結びついているため、無理に長い間干渉すれば当然その本人は心身ともに強いダメージを受けてしまう。小町はそれを知っていたのか酷く怒り、手を震わせている。

再び龍は動き出した

そしてその様子は、先ほどとはあまりにも違いすぎた

氷龍「ゴワアアアアアアアアアアアアン!!!」

天子の能力、即ち気質操る能力を手に入れた龍は自身に氷を纏わせ、氷龍へと変化した。

そして突如黒い大きな雨雲が出てきたと思うと、大雨となつて幻想郷中に降り出しだ。それは結界にあたつて蒸発していく。

美鈴「つ!? 雨に気をつけてください!」

いきなり、ただの雨かと思われていたそれらは鋭い氷の礫へと変化し、幻想郷中の結界を攻撃し始めた。美鈴達は弾幕などを使い巧みに避けるもののこれでは大きく行動ができない。

將信「くつ……」

結界陣も壊滅とまではいかないものの、かなり体力を削られている。が、気合でなんとか持ちこたえているようだ。

水龍「グアアアアアアアアアアアア!!!」

そして水龍は動きを停止し雨を止めたかと思うと、次は反動で後方に大きく体を仰け反らせながら物凄い勢いの水を噴射した。

直径4mはあるであろうアクア光線の威力は計り知れない。

小町「地獄「むぐつつつ!!」

その光線はスペルを唱えようとしていた小町にほぼ命中した。水といえどその強力な流れに小町は吹き飛ばされ、鈍い音と共に結界にぶつかって止まる。そこに思わず將信と衣玖は駆け出した。

小町「つ……アタイは大丈夫だから、龍を……」

小町はなんとか平静を取り繕つてゐるもの、関節はありえない方向に曲がつてゐるものもある。出血も多く癌も出来てゐる。かなり重症だ。そして小町は眠るように途中で意識が途切れた。

將信「つ… 危なかつた」

將信は思わず唇を噛み締める。將信の治癒により脈はあるが、どのみち満足な治癒をしなければ小町にも死が見えてくる。

將信「… 僕が天子と小町を連れていく。美鈴と衣玖もついてきて！」

美鈴「つ！ わかりました!!」

衣玖「は、はい！」

將信の普段見せない焦りに嫌な汗が流れるのを2人は感じたが、それを無視して大急ぎで支度をする。

彩「… ここはおまかせを！」

彩はそれを聞いて將信達をチラ見し、さらに結界を強化する

將信「ごめん！ 早く戻つてくるから… なんとか耐えて！」

將信は自分の靈力を彩に託し、光のような速さで永遠亭へと向かつた。

彩「… とはいつたけど… !!」

彩は現在かなり苦しい状況だ。なにせ3人の力を1人で担当しているのだからそれも当然だろう。腕や足は震え始めている。

——そしてそこにとある人物が現れた——

鈴「————お手伝いしますよー！……ハツ！」

現れたのは元博麗の巫女、博麗 鈴だった。妖夢が門番をしている間、幽々子が鈴に異変解決の手伝いを命じたのだ。

お得意の結界術で結界はみるみる頑丈さを戻していく。それは幽霊になつても衰えを知らなかつた。

彩「……助かりました。ありがとうございます」

彩は隣にいる鈴を見た。汗が滲んでいることから全速力でここへと来たのだろう。

鈴「いえいえ……ですがこの龍……かなり手強いですよ。まああの人達なら勝てるでしょうけどね♪」

そうこうしているうちに、氷龍は剛・峠・靈夢に容赦なく襲いかかる。時には炎を纏い木々を燃やし尽くし、時には風を纏い嵐を起こした。その力をなんと

か抑えようとするものの、剛達の力を持つてしてあまりにも火力不足であつた。

いや、剛なら仕留めることは簡単に可能だろう。しかしその威力を結界が耐えられるのかとはまた別の話だ。そして玄龍は動きを変えた

「玄龍は突如戦闘をやめ、上空に上昇し始めた。」

剛 「… 峠、—————を—————に伝えてくれ」

峡 「… !!————」

剛 「—————」

峡 「… ——」

そして美鈴達に治療を任せた將信がやつと戻ってきた。將信は彩を手助けしつつ、鈴は戦闘メンバーとして加わり、鈴と靈夢は峠から計画を聞いた

剛 「… ! 鈴、靈夢、いけるな？」

鈴・靈夢 「もちろんです」

峠 「じゃあ： よーい： はじめ!!<sup>よ</sup>」

龍 「ホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンン!!!!」

峠の合図とほぼ同時に龍は玄龍へと姿を戻し、透き通つた甲高い声で咆哮した。そうすると空からは無数の隕石が現れ、幻想郷中に降り注いでくる。

峠「つ！ 霊夢と鈴は打ち合わせ通りに！ 僕達はアレをなんとかする！」

鈴・靈夢「了解！」

鈴と靈夢はそれぞれ時計回り、反時計回りに龍の周りを飛行しながら何やら呪文を唱えている。2人は莫大な靈力を使おうと思つてることが誰しもそのオーラから感じ取れた。

一方剛と峠はその場で静かに隕石達を見つめ、スペルを宣言した

峠「断絶  
『雲の糸』」

剛「合業  
鬼神咆<sup>レーザー</sup>」

峠のスペルは宣言されたが、客観的に見て特に景色に変化はない。不発にも見えるが、それは違つた。

迫り来る隕石達は、見えない張り巡らされた糸に細かく切断された。この雲の糸はゆつくりであれば触つても特に影響はない。しかし隕石のように高速でぶつかればダメヤモンドさえも切る威力を發揮するら、

そしてそれらの隕石の破片を剛の砲撃<sup>レーザー</sup>で消し飛ばした。

2人の見事なコンビネーションである

玄龍「グルルルルルル…」

玄龍は自分の攻撃が防がれたことに唸り、怒りを示した。その後に今度は炎龍へと変化した。低空飛行しながら炎を尻尾に纏い、剛達に近づいて2人を吹き飛ばそうとする

將信「！封鎖『攻撃封じ』」

その攻撃を將信のスペルは封じた。核爆発にも耐えられる鎖が頭と尻尾に絡みついで龍の動きを封じ、間もなく龍はあつけなくバランスを崩して墜落した。

將信「よし…！紫…たのんだよ!!」

紫「ええ…皆、結界を圧縮してちようだい！」

將信は永遠亭から戻る途中、紫と偶然出会い、結界の調整を頼んでいたのだ。

紫は飛光虫ネストで龍が暴れるのをさらに抑えつつ、合図を出した。

その合図で彩と將信は結界を龍のギリギリにまで縮めて、その分威力を強化する。

玄龍「グワアアアアアアアアア!!!」

変化が消えた。それでも玄龍は逃げようと必死に抵抗する。

峠「させない…！」

玄龍「グググググググ…」

峠は能力で鎖をさらに締め上げ、玄龍の抵抗を防ぐ。

剛「…よし、もう少し…だ！」

剛も能力を使って、彩達の結界をさらに頑丈にする。

紫 「——靈夢達は準備が完了したらしいわよ」

鈴 「いつでも実行できます！」

將信 「了解、いくよ。3……2……1……0」

鈴・靈夢 「博麗奥義『絶対封印』」

## 掃除と後始末

後日談、というかその後。異変解決メンバーが永遠亭で治癒するのを待つて居る間の話になる。

峠達は封印した龍の残骸を見ていた。靈夢と鈴の使った技“絶対封印”は通常の夢想封印のように体と魂とを封印するのではなく魂のみを封印するのだ。そのため骨や肉を燃やし、魂を解き放てばそれは昇天する。

剛 「これは、燃やせないよな」

剛はあの時、そう、キメラとの対戦の時のようにまた玄龍の死骸を見ていた。

将信 「そもそも魂があつたのかも疑わしいよね。」

華憐 「でも封印は成功したんでしよう？とりあえずなんとかしてコイツを…」

峠 「うん、どうにかしたいけど…あ、とりあえずにとりにでも聞きに行く？」

將信 「うん、埠明かないし、そうするしかなさそだね」

にとり 「うーーんと…この素材は見たことがないね」

—————

にとりは剛に渡された龍の尻尾の切れ端を丁寧に両手で持ち、そつと人差し指の関節を切れ端にあて軽く音を立てる。触れた感触はゴムの用だが、金属のようにとても重い。音は岩のように軽かつた。

数十分後

にとり「どうやらマグマには溶けたよ。だから温度をものすごく下げるでも壊れやすくなると思う。けど残念ながらうちにそういう施設はないんだ…ごめんね」

にとりは申し訳なさそうにシユンとした顔で俯く。河童たちの持つている溶岩炉はあくまで金属などの加工用だ。それも仕方ないだろう。ただ、処理法を知ることが出来たのはかなりの成果だ。

剛「いや問題ない。ふむ…この設備でも時間がかかるか…」

将信「月に行つて永琳の知り合いにでも頼む?」

彩「行く手段に宛はあるんですか?」

将信「ないね」

彩「…なら無理でしょう」

6人十にとりは円陣を組むようにして話し合う

にとり「えっと、これらを全部溶かしたいんだよね？」

その真ん中には龍の残骸の一部を置いてある。力は既に抜けきっているものの、その不気味な姿は強い存在感を放っている

剛「ああ、処理に困っていてな。」

にとり「なら旧地獄にでも行つてみたらどう？八雲紫に頼んだりしてさ」

旧地獄。それは盲点だつたと言わんばかりに剛達はにとりに礼を言うと、何故か博麗神社の近くにある結界のある場所に来た。ここは俗に言う“幻想入り”のしやすい場所だ。ここがもつとも外の世界とは近い。

峠「…ほい」

峠は突然結界に触れ、打ち壊さん威力で大きくヒビをいた。辺りの空間は歪み今にも崩れそうだが、限界といつたところで峠がそれを制御する。そしてその数秒後、紫は顔を青くして現れる事となつた。

紫「はあ、はあ…。だから、その起こし方はやめて…」

まだ寝癖もついたままの紫は顔だけをスキマから出して峠達の元へ現れた。そこに前の妖艶な紫の姿はなかつた。ただのおばさ・美女である。

剛 「いやすまん。緊急の用事でな」

紫 「…緊急？ なにかしら」

紫は緊急という言葉を聞いて目つきを細く変え、声のトーンを落とした。その目には若干限がある。まああれだけ妖力を使えれば当たり前だろう。辺りに静けさが戻つた。そしてそれを打ち破つたのは將信だ。

將信 「旧地獄に行きたいんだよね。ほら、龍の残骸の処理」

將信は結界を修復しながら紫に語りかけた。

紫 「ああ・あれね。本来は禁止しているんだけど・仕方ないわよねえ・。許可してあげるからちよつと待つて」

紫はスキマを閉じて数十秒後、再び何やら紙を持つてまた剛達の前に現れた。

紫 「はいこれ。疑われてもこれ出したら通れるから・」

許可証を渡しながら、ふうと紫は息を吐く。許可証には簡単な事しか書かれていたかつた。最後には紫の名前と赤色の指紋がついていた。

將信 「ありがと！ ジやあこれで・」

紫 「つてどこに行くつもり？ 場所がわからないでしょ。」

地底の近くの洞窟まで落としてあげるわ」

結衣「おおー太つ腹だね！」

紫「嫌味にしか聞こえないのは気のせいかしら…まあいいわ、早く行きなさい」  
紫は6人の足元にスキマを展開。6人は気持ちの悪い空間へと落とされた

i n 旧地獄前洞窟

彩「…結構暗いですね」

結衣「だね。寒いし…」

華憐「ジメジメして気持ち悪いわ…」

女性陣は愚痴を言い始めた。やはり旧地獄というのは神とは相性が悪いのだろうか。  
6人はコツコツと音を鳴らしながら、トラブルもなく順調に洞窟の奥へと進んでいつた。

剛「もうそろそろか？」

峠「だね、あーほら光が…ん？」

峠達の目の前を光っていたもの。それはマグマの熱なんかではなかつた。

鬼火だ

剛「なんだ…」

しかしそれを剛はまるで期待して損したと言いそうな、子供っぽいムツとした顔で腕を軽く振るい鬼火を消し飛ばした。

??? 「つきやああつ!!」

その剛の放った風圧に負けた誰かさんはあまりの風圧に吹き飛ばされ、コツンコツンと木の器が地面にぶつかるような音を何度もかたてた後呻き声をもらした。

キスメ「いっつーーー！」

剛達が慌てて駆け寄ると、キスメと名乗る緑髪の少女は頭の上にできたタンコブを抑え涙目になっていた。

剛「あ… 大丈夫か？」（釣瓶落としか：あまり凶暴にはみえないが…？）

そんな剛をキスメは鋭く睨んでいた、その眼光は少女とは思えない、強い殺気を持っていた。そしてそこに一匹（？）の蜘蛛が現れる。

彩「…（おそらく土蜘蛛でしようか、てますがあまり妖力は大きくないようです  
ね。）」

ヤマメ「ちよつと!? キスメ大丈夫。!?

ヤマメは焦つてキスメに近寄つた。

キスメ「アイツらがやつたのよ：ちよつと驚かしてやろうと思つただけたのに…  
ぐすん」

ヤマメ「それはサイテーね。今すぐ追い払いましょ」

彩「（…つて、いきなり誤解されちゃいましたか）」

将信「…（案外、噂よりは大丈夫そうだな。）」

峠「え？ それは横暴すぎ！」

ヤマメ「問答無用！ 蜘蛛『石窟の蜘蛛の巣』  
と、半ば強引に弾幕ごつこは始まつた。

そして結果から言えばヤマメ達は瞬殺だつた。なにせ力量が違う上にステージはこの洞窟。峠達は非常に有利である。

剛は能力で洞窟を崩すことが出来、キスメ達は逃げられる範囲が限られているため剛の当てずっぽうな攻撃でも当たる確率が高い。

峠は念道力で岩や水を操れるし、將信は水やマグマを燃料として活動することも出来る。彼らに弾幕ごっこを挑んだ時点で二人は負けていたのである。

そうして惨敗したヤマメ達は洞窟の壁に凭れ座り込んだ。

キスメ「強い……」

ヤマメ「……煮るなり焼くなり好きにするといいわ」

キスメは若干涙目で、ヤマメは逆に投げやりになつていた。地底の妖怪は獰猛だと聞いていたが、狂うほど凶暴なわけでもないらしい。6人はしばらく呆気に取られていたが、スグに言葉を返した。

華憐「別に食べないわよ。というかここを通してくれない？」

ヤマメ「ん、負けたし別にいいけど、何で地上の人間がここにいるのか教えてくれない？」

確かに八雲紫が禁止しているはずだけど

華憐「いや許可は貰つたわ。」

華憐はヤマメに許可証を見せた。それをキスメはのぞき込む

キスメ「あー……なるほど。大丈夫そうだね。さつきはごめん」

キスメは申し訳なさそうにペコリと腰を折った。

峠「いや、大丈夫だよ。」

彩「ええと、とりあえず街を探したいんですけどどこにあるかご存知ですか?」

キスメ「つと、簡単だよ。ここを真っ直ぐ行つたら橋があるからそれを渡つて、またしばらく歩いたら街につくよ。—————あつでも橋の前には」

結衣「おつけーありがと!」

キスメ「つて、行つちやつた。」

結衣達はキスメの説明を切り上げ慌ただしくまた飛んでいつてしまつた。

ヤマメ「…何者?」

キスメ「さ、さあ…」

ヤマメとキスメは目を見合わせ、苦笑いした

——  
——  
——  
——  
——  
——  
——  
——  
——  
——  
——  
——  
——  
——  
——

橋姫「…で、ここを渡りたいと」

將信「はい。そうです」(橋姫：嫉妬深い女神だけ、また珍しい種族…)

現在6人は橋を渡ろうとして、橋姫に通せん坊されている。ヤマメ達が言いたかつたのは彼女の事だろう。

橋姫「大体なんで地上の人間がここに？上みたいに甘くはないわ。さつさと引き返しなさい」

橋姫は左手でしつしと虫を払うような態度をとる。客観的に見れば橋姫はかなり好感度が落ちるだろう。

將信「ふふ、優しいんですね。大丈夫ですよ」

まあ、6人は感性が変わつたらしい。以前の6人とはまるで比べ物にならないほどに今の6人は他人と交流できていた。

水橋「… その素直さが妬ましいわ…。————私は水橋パルスイよ。あまり揉め事は起こさないようにね」

水橋と名乗る橋姫はクールなオーラを漂わせつつも、そのエメラルド色の中には奥深く謎めいた魅力があつた。水橋は3人の力や性格を見て問題ないと思つたのか、案外簡単に橋を渡させてくれた。

剛 「… つにしても急に暑くなつたな」  
峠 「だね。」